

加古川市所在

## 石 守 廃 寺

(一) 大久保平荘線交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

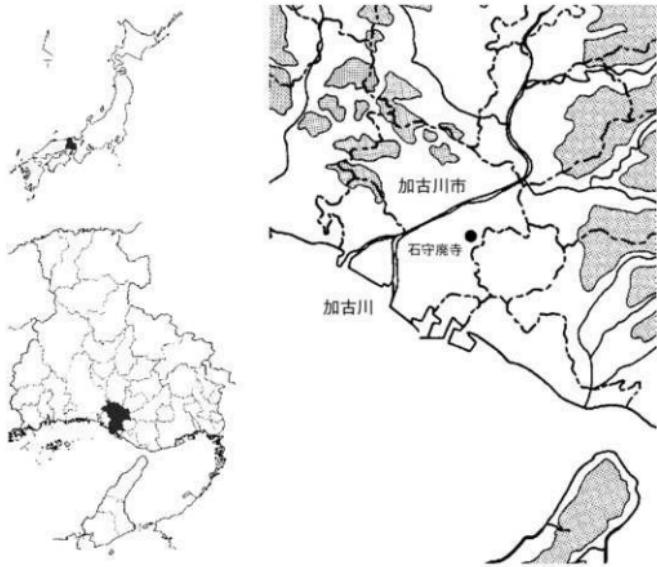


## 例　　言

1. 本書は、加古川市神野町石守に所在する石守庵寺の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、(一)平荘大久保線交通安全施設等整備事業に関連するもので、東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所の委託を受けて、平成14年度に兵庫県教育委員会が実施したものである。
3. 出土品整理作業は、平成18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、平成19年度に兵庫県立考古博物館において実施した。
4. 遺物写真撮影は、株谷口フォトに委託して実施した。
5. 本書の執筆は長濱誠司が担当し、編集は増田麻子の補助をえて長濱が行なった。
6. 発掘調査時に森永速男氏（兵庫県立大学大学院生命理学研究科）に考古地磁気年代測定を依頼し、その成果について玉稿を賜った。
7. 本報告にかかる遺物・写真・図面は、兵庫県立考古博物館で保管している。
8. 現地調査および整理作業の際には、地元の方々をはじめ、関係各機関のご協力をいただいた。感謝の意を表する。

## 凡　　例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基とする。方位は座標北を指し、平面図に示した座標値は、平均直角座標V系原点からの距離である（単位：km）。
2. 遺構は種類ごとに以下の略号を用い、石守庵寺に伴う遺構をそれぞれ1～、それ以外の遺構を101～つづけている。  
SA：柱穴列 SB：掘立柱建物 SD：溝 SH：堅穴住居 SK：土坑 SX：その他の遺構  
P：柱穴
3. 遺物には通し番号を付けている。ただし瓦はT、石製品はS、金属製品はMをそれぞれつけて、土器と区別している。遺物の番号は、本文・図版ともに統一している。
4. 土器の断面は須恵器を黒塗りとした。
5. 土器の色調や土層などの表記については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1999年版、土器の色調は2002年度版を使用した。
6. 本書で使用した地図は以下のとおりである。  
第2図 1/2,500加古川市都市計画図 「神野」、「中西条」、「大野」、「山手」 1974年  
第6図 国土地理院1/25,000地形図 「加古川」、「高砂」、「東二見」 1996年  
「三木」 1997年



第1図 遺跡の位置

## 本文目次

第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 石守庵寺	1
第3節 発掘調査の経過	3
第4節 整理作業の経過	4
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の結果	
第1節 地形・層序	11
第2節 奈良時代の遺構	12
第3節 その他の時代の遺構	17
第4章 出土遺物	
第1節 土器	21
第2節 金属製品	22
第3節 石製品	22
第4節 瓦	22
第5章 まとめ	
第1節 出土遺物	36
第2節 遺構の性格	36
第3節 石守庵寺の立地	39
第6章 SX01で検出された焼土の考古地磁気年代	41

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	
第2図 調査地点位置図(1)	2
第3図 調査地点位置図(2)	3
第4図 石守庵寺の調査箇所	3
第5図 加古川周辺の地形	7
第6図 周辺の遺跡	10
第7図 石守庵寺周辺の地形	11
第8図 出土金属製品	22

第9図 軒丸瓦の型式	23
第10図 軒平瓦の型式	23
第11図 平瓦凸面の調整	25
第12図 T79側面	31
第13図 T98凹面	33
第14図 石守庵寺寺域と主な遺構	37
第15図 加古郡周辺の寺院と官衙	40
第16図 パイロット試料（6と16）の段階交流消磁結果	43
第17図 焼土試料の交流消磁前（左）および消磁後（右）の残留磁化方向	44
第18図 一般土壤試料の交流消磁前（左）および消磁後（右）の残留磁化方向	44
第19図 採取土壤の磁気的性質（帶磁率と残留磁化強度の関係）	44
第20図 平均残留磁化方向と標準考古地磁気曲線（Maenaka、1990）との比較	44
第1表 残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ	42

## 表目次

## 図版目次

図版 1 調査区全体図	図版38 出土瓦00
図版 2 調査区北壁断面	図版39 出土瓦01
図版 3 調査区南壁断面	図版40 出土瓦02
図版 4 寺域内全体図	図版41 出土瓦03
図版 5 寺域内の遺構(1)	図版42 出土瓦04
図版 6 寺域内の遺構(2)	図版43 出土瓦05
図版 7 寺域内の遺構(3)	図版44 出土瓦06
図版 8 寺域内の遺構(4)	図版45 出土瓦07
図版 9 寺域内の遺構(5)	図版46 出土瓦08
図版10 寺域内の遺構(6)	図版47 出土瓦09
図版11 寺域内の遺構(7)	図版48 出土瓦09
図版12 寺域東限の遺構	図版49 出土瓦20
図版13 寺域東側全体図	図版50 出土瓦21
図版14 寺域東側の遺構(1)	図版51 出土瓦22
図版15 寺域東側の遺構(2)	図版52 出土瓦23
図版16 寺域東側の遺構(3)	図版53 出土瓦24
図版17 寺域東側の遺構(4)	図版54 出土瓦25
図版18 寺域東側の遺構(5)	図版55 出土瓦26
図版19 寺域東側の遺構(6)	図版56 出土瓦27
図版20 土坑	図版57 出土瓦28
図版21 その他の時代の遺構全体図	図版58 出土瓦29
図版22 その他の時代の遺構(1)	図版59 出土瓦30
図版23 その他の時代の遺構(2)	図版60 出土瓦31
図版24 その他の時代の遺構(3)	
図版25 その他の時代の遺構(4)	
図版26 その他の時代の遺構(5)	
図版27 出土土器(1)	
図版28 出土土器(2) 出土石製品	
図版29 出土瓦(1)	
図版30 出土瓦(2)	
図版31 出土瓦(3)	
図版32 出土瓦(4)	
図版33 出土瓦(5)	
図版34 出土瓦(6)	
図版35 出土瓦(7)	
図版36 出土瓦(8)	
図版37 出土瓦(9)	

## 写真図版目次

写真図版 1	調査区遠景(1) 調査区遠景(2)
写真図版 2	石守魔寺付近航空写真 調査前の状況
写真図版 3	調査区全景(1)
写真図版 4	調査区全景(2) 調査区全景(3)
写真図版 5	調査区全景(4) 調査区全景(5)
写真図版 6	寺域内の遺構 寺域東側の遺構
写真図版 7	古墳時代の集落(1) 古墳時代の集落(2)
写真図版 8	寺域内の遺構 SB01周辺 SB01柱穴断割状況
写真図版 9	SB02 SB03 SB03柱穴断割状

況		写真図版32	寺域内柱穴出土土器 寺域内土坑出土土器
写真図版10	SA01 P02瓦出土状況 SK05	写真図版33	寺域内包含層出土土器(1) 寺域内包含層出土土器(2)
写真図版11	SK02 SK01 SK01軒丸瓦出土状況	写真図版34	寺城東側出土土器(1) 寺城東側出土土器(2)
写真図版12	SK05断面 SK03 SK03遺物出土状況	写真図版35	寺域内出土軒丸瓦
写真図版13	SK04断面 SD101断面(1) SD101断面(2) SD01断面	写真図版36	寺域内出土軒丸瓦・丸瓦
写真図版14	寺城東限付近の遺構 SD02断面 寺城東側の遺構(1)	写真図版37	寺域内出土平瓦(1)
写真図版15	寺城東側の遺構(2) SB06～08 柱穴内土器出土状況	写真図版38	寺域内出土平瓦(2)
写真図版16	SX01検出状況 SX01(1) SX01(2)	写真図版39	寺域内柱穴・SK02出土瓦
写真図版17	SX01南溝断面 SX01南溝 SX01南溝軒丸瓦出土状況	写真図版40	寺域内SK02出土瓦
写真図版18	SX01東溝断面 SX01東溝(1) S X01東溝(2)	写真図版41	寺域内土坑出土瓦
写真図版19	SX01東溝軒丸瓦出土状況 SX01西溝断面 SX01西溝(1)	写真図版42	寺域内溝出土瓦
写真図版20	SX01西溝(2) SX01西溝平瓦出土状況 SX01北溝断面	写真図版43	寺域内出土瓦
写真図版21	SX01北溝(1) SX01北溝(2) SX01北溝平瓦出土状況	写真図版44	SX01出土軒丸瓦(1)
写真図版22	SX01赤化面断面 SK07断面 SK08断面	写真図版45	SX01出土軒丸瓦(2)
写真図版23	SK10断面 SK09断面 SK11断面	写真図版46	SX01出土軒丸瓦(3) SX01出土軒丸瓦(4)
写真図版24	SH101 SH101カマド断面 SH101カマド	写真図版47	SX01出土軒丸瓦・軒平瓦
写真図版25	SH102 SH103 SH103カマド断面	写真図版48	SX01出土平瓦(1)
写真図版26	SB101 SB102 SK101断面	写真図版49	SX01出土平瓦(2)
写真図版27	SX101・102 SX102断面 SX102	写真図版50	SX01出土平瓦(3)
写真図版28	SX101 SX101断面 SX101土器出土状況	写真図版51	SX01出土平瓦(4)
写真図版29	調査風景 塔心礎 伝石守磨寺礎石	写真図版52	SX01出土平瓦(5)
写真図版30	出土土器(1)	写真図版53	SX01出土平瓦・隣平瓦
写真図版31	出土土器(2)	写真図版54	SX01出土丸瓦・熨斗瓦
		写真図版55	SX01西溝出土瓦
		写真図版56	SX01西溝・北溝出土瓦
		写真図版57	SX01北溝出土瓦
		写真図版58	SX01東溝出土瓦
		写真図版59	SX01南溝・検出時出土瓦
		写真図版60	SX01南溝・西溝・検出時出土瓦
		写真図版61	出土金属製品 出土石製品

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

兵庫県加古川市は東播磨地域の中心的都市である。阪神地域の外縁部にあたるため、人口は増加傾向にあり、市街地は拡大している。それに対応し交通を円滑にするために道路整備が進められている。

(一) 大久保平荘線は国道2号線、250号線に平行する東播磨内陸部の主要道路の1つで、明石市大久保町と加古川市平荘町を東西に結ぶ。同路線は段階的に整備されているが、神野地区内は幅員が狭く通行の支障となっている。今後同地区で県立新加古川病院の開院が予定され、病院へのアクセス手段も必要となることから、道路の整備が急がれた。

県土整備部加古川土木事務所による計画では、路線は周知の埋蔵文化財包蔵地である石守庵寺の寺域内を通過することになっていた。石守庵寺は、加古川市教育委員会による調査では約100m四方の寺域が推定され、この成果に基づくと路線は、寺域を北西から南東方向に対角線上に横切ることになる。協議により寺域中枢部に工事が及ぶことは避けたものの、すでに周辺の工事が進捗し、寺域外へ道路を迂回させることは不可能なため、寺域内については本発掘調査、寺域の東側については遺構の広がる可能性があるため確認調査を実施することとなった。

### 第2節 石守庵寺

#### 1. 概要

石守庵寺に関する報告は、1958年の鎌谷木三次によるものが最初である。その報告では「畦畔や灌漑水路に古瓦破片が散じ、又小径に接触して巨大な塔心礎の目観される」とある。ただしこの心礎の存在は戦前から地元研究者らには知られていたようである。明治の中頃までは庵寺付近は松林だったが、開墾の際に多量の瓦片が出土し、低地側へなされた盛土に混じって廃棄されたという。また戦後には、寺域東側の豊川の河川改修が行われ、これに伴う土取りが寺域内で行われ、部分的に水田が地下げされている。これらの事業により庵寺一帯の地形はかなり改変されていると思われる。

なお塔心礎は当初、地表に露出した状態であったらしいが、戦前に一時外部に持ち出され、その後現地に戻された経緯がある。現在塔心礎は庵寺南側にある寶塔寺境内に移されている。また、石守集落内にある觀音堂前の碑の台石は庵寺にあった礎石を転用したものといわれている。

#### 参考文献

鎌谷木三次『播磨国石守庵寺』『兵庫史学』第18号 兵庫史学会 1958年

石見完次『東播磨の民俗 加古郡石守村の生活誌』 神戸新聞出版センター 1984年

#### 2. 石守庵寺の調査

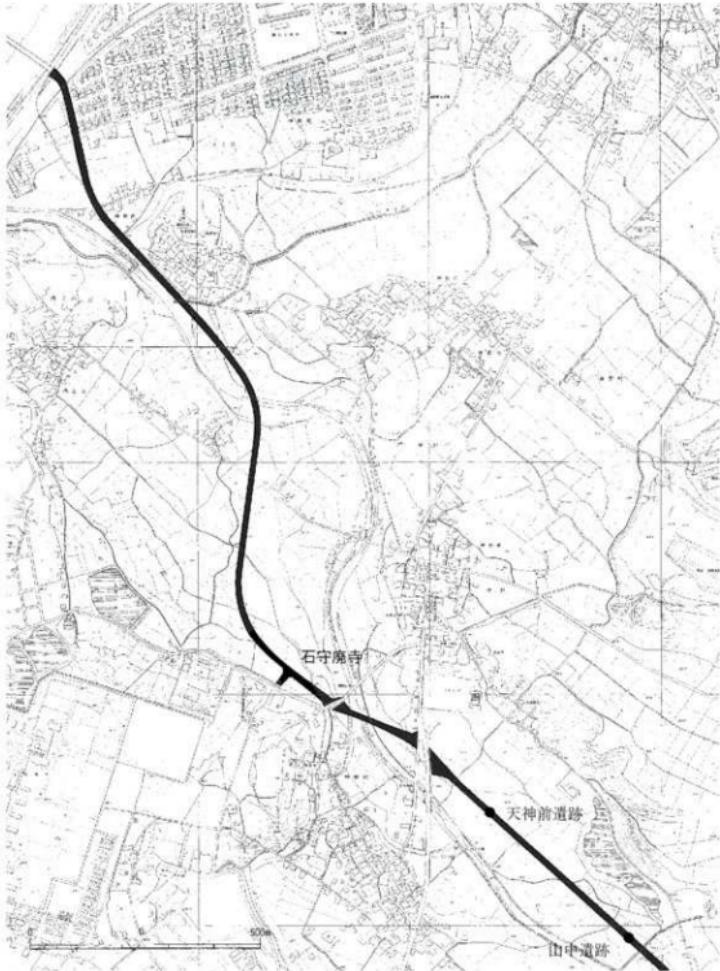
石守庵寺の発掘調査は、加古川市教育委員会により、昭和58年度に実施されたものが最初であり、今回報告する調査で第5次となる。

##### 第1次・第2次調査

調査主体：加古川市教育委員会

調査年度：昭和58年度・59年度

石守庵寺は、遺構については一切不明であったため、伽藍配置を明らかにし、資料化するための調査



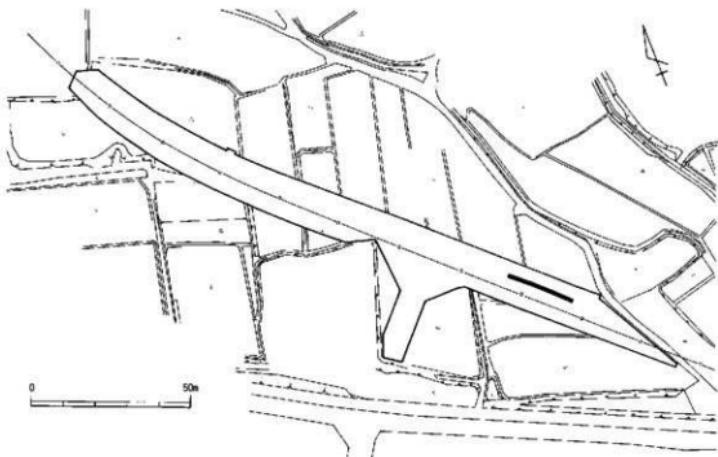
第2図 調査地点位置図(1)

を行った。伽藍は法隆寺式であることが判明した。

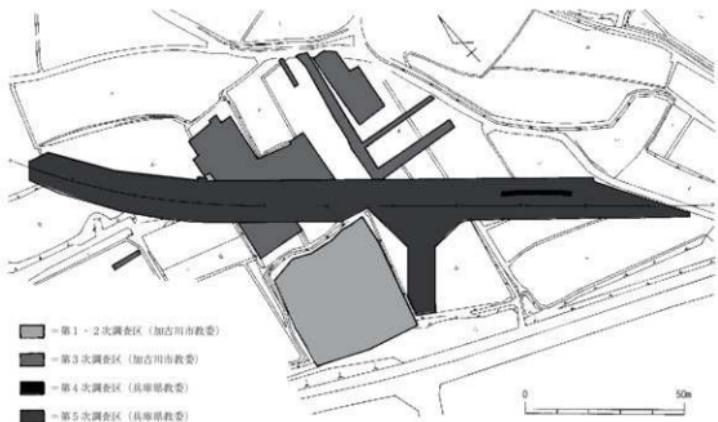
#### 第3次調査

調査主体：加古川市教育委員会

調査年度：平成12年度



第3図 調査地点位置図(2)



第4図 石守廃寺の調査箇所

寺域周辺では場整備が行われるため、その事前調査として実施された。建物4棟と寺域を区画すると考えられる築地跡および溝を検出し、寺域の範囲を推定することが可能となった。

### 第3節 発掘調査の経過

(一) 大久保平荘線交通安全施設等整備事業に起因する石守廃寺の発掘調査は、確認調査、本発掘調査の2次にわたり行われた。

#### 確認調査（第4次調査）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査年度：平成13年度

遺跡調査番号：2001210

調査期間：平成13年12月13日

調査面積：22m<sup>2</sup>

寺城の東側についての埋蔵文化財の有無を確認するため、1×22mのトレンチを1本設定して調査した。その結果、寺城の東側にも造構が広がることが判明した。

#### 本発掘調査（第5次調査）

調査主体：兵庫県教育委員会

調査年度：平成14年度

遺跡調査番号：2002078

調査期間：平成14年9月9日～11月28日

調査面積：2,668m<sup>2</sup>

調査区は第1・2次調査区と第3次調査区の中間にあたる。本発掘調査区は幅約12m、延長約200mの細長い形狀の本線部分と、既存道路に接続する道路部分によりT字形となる。発掘調査工事は歩信建設株式会社と、空中写真測量は株式会社近畿シビルコンサルタントと委託契約を結んだ。

#### 発掘調査の体制

調査担当 調査専門員 吉田 昇

主査 平田 博幸・長濱 誠司

調整事務担当 主査 高瀬 一嘉

調査補助員 森崎由紀子・西村 美緒・松井利可子

室内事務員 角野 郁子

#### 第4節 整理作業の経過

遺物の整理作業は現地での発掘調査時に、遺物の水洗、図面整理などから開始されているが、本格的な整理作業は埋蔵文化財調査事務所、兵庫県立考古博物館および魚住分館において平成18、19年度の2ヵ年で実施した。

#### 平成18年度

魚住分館において遺物のネーミング作業を行い、作業終了後に遺物を埋蔵文化財調査事務所に搬入し、接合・補強、実測の諸作業および金属器の保存処理を実施した。

担当職員 主査 長濱 誠司

進行管理担当 担当課長補佐 森内 秀造

調整事務担当 主査 菊田 淳子

保存処理担当 主査 岡本 一秀

非常勤嘱託員 早川亜紀子・伊藤ミネ子・衣笠 雅美・家光 和子・岡井とし子

吉田 優子・島村 順子・藏 幾子・宮野 正子・早川 有紀・荻野 麻衣  
増田 麻子・古谷 章子・杉本 淳子・藤川 紀子  
栗山 美奈・大前 篤子・藤井 光代  
日々雇用職員 清水 幸子・谷脇 里奈

#### 平成19年度

兵庫県立考古博物館にて、刊行までの諸作業を行なった。

担当職員 主査 長濱 誠司  
進行管理担当 担当課長補佐 森内 秀造  
調整事務担当 主査 菊田 淳子  
保存処理担当 主査 岡本 一秀  
非常勤嘱託員 増田 麻子・古谷 章子  
西口 由紀・島村 順子・藏 幾子・奥野 政子・荒木由美子・藤池かづさ

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

石守庵寺の所在する加古川市は、旧播磨国の東南部に位置し、東西約16km、南北約18km、面積約138,51㎢の規模をもち、北側を加西市・小野市、東側を加古郡、西側を高砂市・姫路市と接する。市域の中央には県下最大の河川で、市名の由来にもなった加古川が南流し、播磨灘へ注ぐ。

加古川市は播磨東部の中心的な位置を占める。かつては加古川東部の加古郡（賀古郡）を市域としたが、その周辺地域と段階的に合併を行い現在の市域を形成する。人口は増加傾向にあり、昭和50年代には20万人を超え、近年では26万6千人を数える。人口、商工業とも南部に偏る傾向にあり、北部は農村の形態を保つ。

市域東部は高位段丘の裾部である。開析谷を加古川支流の草谷川、曇川が流れる。段丘上の開発はおくれ、近世に新田開発が進み、今日では新興住宅地が広がりつつある。北部から西部は標高100~200m級の山地となる。この山地の基盤となるのは流紋岩質凝灰岩であり、多くの箇所で岩盤が露頭し植生は貧弱である。この流紋岩質凝灰岩は竜山石と通称され、古墳時代以降今日まで石材に利用される。南部の瀬戸内海沿岸には砂州が続く。かつては景勝地として知られ、海水浴場などとしても親しまれたが昭和40年代より埋め立てが進み、今日ではその面影もない。この埋め立て地へ大規模工場が建設されたことにより加古川は工業都市の様相を呈するようになる。加古川沿いは氾濫原や三角州から形成された低地であり、米どころ播州平野の一角を形成するとともに市街地化がすむ地域である。

市域は東西の交通が発達している。古代山陽道以来の街道は今日では国道2号線として発達、海岸沿いには国道250号が併行する。内陸部では姫路から有馬に至る湯乃山街道、今日では県道姫路加古川神戸線が主要な道路となっている。またこれらの道路から南北に分岐する道路があり周辺地域と結ばれる。加古川は近世に入ると高瀬舟による水運が発達し、加古川河口の高砂は物資の集積地として栄える。近代に入ると鉄道が開通する。1888年開通の山陽鉄道は、国有化を経て今日のJR山陽本線となる。また陰陽連絡線である播州鉄道も開通し加古川の水運に取って代わる。また海岸部には姫路と神戸を結ぶ山陽電鉄が敷設された。

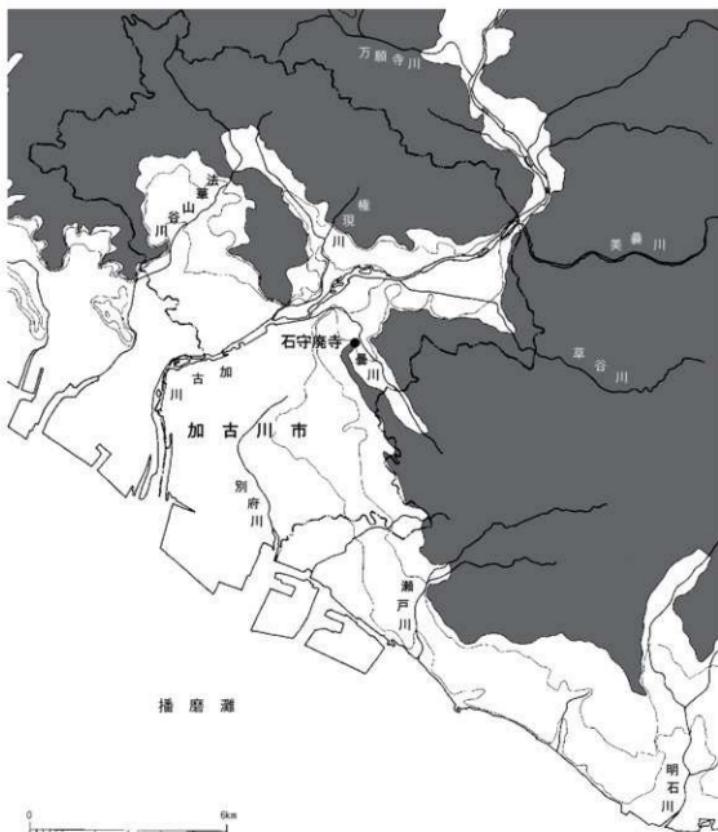
市街地は江戸時代には山陽道の宿場町として繁栄する。近年は人口増加と都市化が進み、JR山陽本線の高架事業や加古川駅前の再開発など新しい町づくりに取り組んでいる。

石守庵寺の位置する神野町は、加古川市域の北東部、市街地の北側約3kmに位置するが、市街地との間は日岡段丘によって隔てられる。町域は加古川支流の曇川中・下流域に広がり、右岸の加古段丘、左岸の日岡段丘と河川沿いの谷底平野からなる。草谷川流域の八幡町とともに「播磨国風土記」記載の賀古郡望理里に比定される地域である。昭和25年加古川町などと合併し、加古川市となる。曇川は延長7.5kmの小河川である。福美町北山の満溜池を水源とし、途中国安川と合流、神野町西之山付近で加古川に合流する。ふだんは枯れ川のように水量が少ない。石守庵寺は神野町の中央付近、曇川左岸の日岡段丘裾部付近、神野町石守字丸山に所在する。

### 第2節 歴史的環境

#### 旧石器・縄文時代

遺跡は台地や段丘上に分布するが、踏査による遺物採集がほとんどである。日岡山遺跡ではナイフ形石器や細石刃核、剥片が採集されている。神野城山遺跡でも旧石器が採集される。



第5図 加古川周辺の地形

印南段丘末端の宮山遺跡では縄文時代後期の住居や集石造構を検出、磨消縄文土器が出土している。

加古川左岸では、美乃利遺跡、溝之口遺跡が前期後半から始まる。美乃利遺跡では前期から中期の水田を検出している。溝之口遺跡は、中期段階に大きく発展する。この時期の遺構としては微高地上で堅穴式住居や土坑を、低地で水田を検出している。また方形周溝墓、円形周溝墓なども検出され、播磨における拠点的集落の1つとなる。また、北在家遺跡では堅穴住居が検出されている。

加古川右岸では、東神吉遺跡、砂部遺跡がある。東神吉遺跡では前期後半の溝や貯蔵用とみられる土坑群、砂部遺跡では前期末の住居、土器焼成土坑を検出している。いずれの遺跡も断続的ながらも弥生時代を通じて存続している。

中期後半の段階には西条庵寺下層遺跡などいわゆる高地性集落が現れる。また印南段丘上の望塚からは扁平鉢式6区製装棒紋銅鐸の出土が伝えられる。弥生時代終末には西条52号墳など墳丘をもち、列石を巡らせる墳丘墓が築かれる。

#### 古墳時代

前期古墳は加古川左岸の日岡古墳群があり8基の大型古墳より構成される。築造時期は4世紀代から5世紀初頭で、被葬者は流域の首長と考えられる。加古川右岸にある前期古墳としては、天坊山古墳、長慶寺山古墳などあるが、いずれも小規模である。

日岡古墳群に続く首長墓が西条古墳群であり、前方後円墳の行者塚古墳と2基の帆立貝式前方後円墳の3基で構成される。築造時期は5世紀代である。中期後半になると加古川右岸に池尻2号墳、カンヌ塚古墳が築造され、渡来系遺物を副葬品にもつ。周辺では造墓活動が後期まで継続し、平莊湖古墳群を形成する。その総数は100基を越え加古川下流域では最大の古墳群である。日岡古墳群や西条古墳群では後期の群集墳も所在する。日岡古墳群は20基以上で構成され、埋葬施設は横穴式石室とされる。またここから派生したと思われる石守古墳群、水足古墳群などが現存する。

集落遺跡としては砂部遺跡があり、出土する土器は畿内や吉備のほか、韓式系土器が出土し、他地域との交流を物語る。溝之口遺跡は後期の住居などの遺構が検出され、日岡古墳群との関連が考えられる。

生産遺跡としては神野大林窯跡群があり、疊川流域において6世紀前半～7世紀初頭に須恵器生産を行っていた。また坂元遺跡では段丘斜面を利用して築かれた埴輪窯を検出。出土した埴輪は石見型盾形埴輪など形象埴輪が大半である。創業時期は6世紀代と推定され、付近の古墳に供給したようである。

またこの地域で注目されるのが、市域北部および西部に露頭する流紋岩質凝灰岩が石棺石材として産出され、畿内の天王墓に長持式石棺として採用される。

#### 古代

古代において加古川市域は加古川左岸が賀古郡、右岸が印南郡となる。『播磨国風土記』によれば賀古郡、印南郡とも4つの里が記載されている。また大道である古代山陽道が平野部を東西に通過する。推定ルートは加古川の渡河地点など不明な部分もあるが、直線的にのびる道路の痕跡を残す地点もある。

古大内遺跡は、付近に「駅ヶ池」という地名があり、古代山陽道に接すること、出土瓦が播磨國府系瓦であることなどから「賀古駅家跡」の有力な推定地である。「賀古駅家跡」は「延喜式」によれば駅馬數四〇疋を有し、山陽道最大の駅家とされる。また加古川河口付近には主要港湾であった鹿子水門が所在した。

播磨国には古代寺院が多く建立される。賀古郡には石守庵寺を除いても西条庵寺、野口庵寺の2寺が知られ、概ね里ごとに寺院が建立されていたようである。

野口庵寺は古代山陽道沿いに位置する。発掘調査により講堂と推定される瓦積基壇や回廊跡と推定される高まりなどを検出し、出土した瓦から8世紀初頭に創建され9世紀まで存続していたと推定される。なお加古郡の都衙所在地は不明であるが野口庵寺付近とする説もある。

西条庵寺は加古川左岸の台地上に位置する。石守庵寺と同じ賀古郡望理里の比定地にあり、同瓦もることから関連が想定できる。塔、金堂とも瓦積基壇で法隆寺式に準ずる伽藍配置をとる。出土瓦より7世紀末に創建され、9世紀中頃まで存続したと推定される。

加古川右岸の印南郡には山角庵寺、中西庵寺がある。

山角庵寺は、西条庵寺の対岸に位置する。遺構は明らかでないが、出土瓦の技法が西条庵寺創建瓦と類似し、同時期の寺院と推定される。中西庵寺も心礎のはか付近に石製の露盤、刹が残るのみで、遺構

については明確でない。出土瓦から7世紀末に創建し、平安時代後期まで存続したと推定されている。

古代寺院の多くは9世紀代に廃絶しているが、それは『日本三代実録』貞觀十年（868年）七月条に記載された地震に起因する、との説が有力である。

集落遺跡としては坂元遺跡、美乃利遺跡、溝之口遺跡がある。

坂元遺跡は発掘調査により多数の掘立柱建物が検出され、播磨國風土記記載の「駅家里」を構成する集落の1つと推定される。美乃利遺跡でも掘立柱建物などが検出されている。溝之口遺跡は、奈良時代後期から平安時代前期の掘立柱建物群、井戸などを検出している。井戸からは「大穀」などの墨書き器が出土したほか、銅製帶金具、石製帶・播磨國府系瓦に属する軒丸瓦などが出土し、官衙的性格の強い遺跡と想定されている。

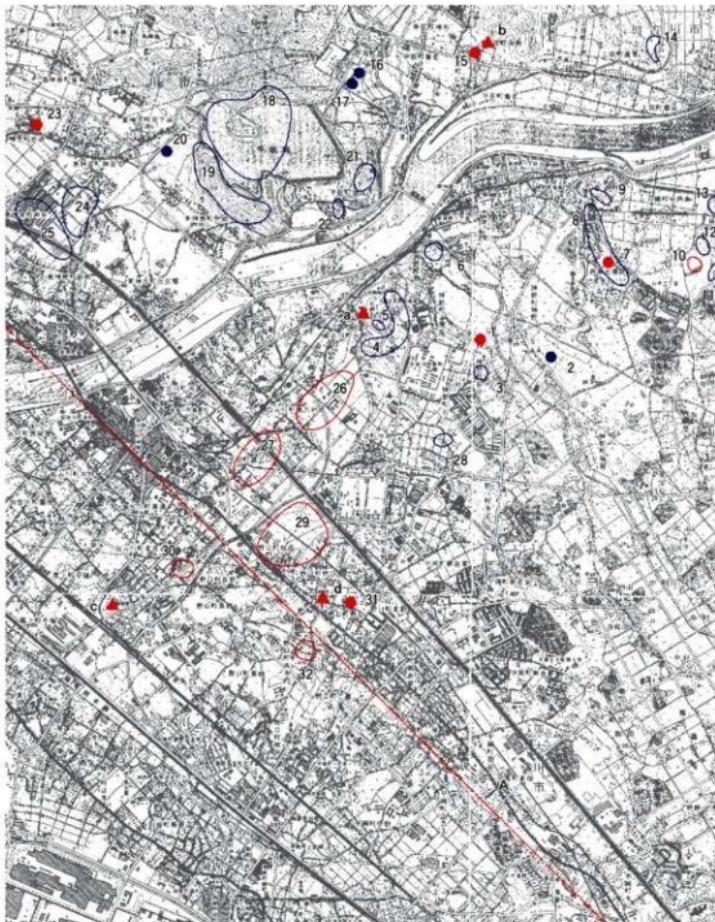
今日の日岡神社は『延喜式』神名帳記載の日岡坐天伊佐々比古神社に比定されている。

#### 中世

山陽道の加古川渡河地点付近に加古川宿が形成される。中世の寺院として13世紀以降の石造遺物などが遺存する常楽寺、報恩寺がある。報恩寺は山角庵寺に隣接し、古代から存続する寺院である可能性がある。常楽寺は1258年に再興されたと伝えられるが、境内付近では12世紀代の瓦片が出土することから、その前身となる寺院が想定される。鶴林寺、教信寺は、ともに平安時代後期に整備された寺院である。また加古川周辺には中世の銘をもつ石造物が多数残存し、仏教文化の浸透を物語る。

#### 参考文献

- ・兵庫県加古川市『加古川市史』第1巻 1983年
  - ・兵庫県加古川市『加古川市史』第4巻 1996年
  - ・加古川市教育委員会『加古川市遺跡分布地図 第2版』 1994年
  - ・兵庫県教育委員会『山陽道（西国街道）』歴史の道調査報告書第2集 1992年
- 発掘調査報告書は割愛した。



1. 石守磨寺 2. 神野大林窯跡 3. 石守古墳群 4. 日岡古墳群 5. 日岡山遺跡 6. 二塚古墳群  
7. 西条廃寺 8. 西条古墳群 9. 城山遺跡 10. 古壺廃寺 11. 上村池遺跡 12. 成福寺古墳群  
13. 宮山古墳群 14. 長慶寺山古墳群 15. 山角廃寺 16. 里古墳 17. 西山大塚古墳 18. 平莊湖古墳群  
19. 升田山古墳群 20. 天下原古墳 21. 地藏寺古墳群 22. 平山遺跡 23. 中西廃寺 24. 砂部遺跡  
25. 東神吉遺跡 26. 美乃利遺跡 27. 濑之口遺跡 28. 水足古墳群 29. 坂元遺跡 30. 北在家遺跡  
31. 野口遺跡 32. 古大内遺跡 a. 常樂寺 b. 報恩寺 c. 鶴林寺 d. 教信寺 A. 推定古代山陽道

第6図 周辺の遺跡

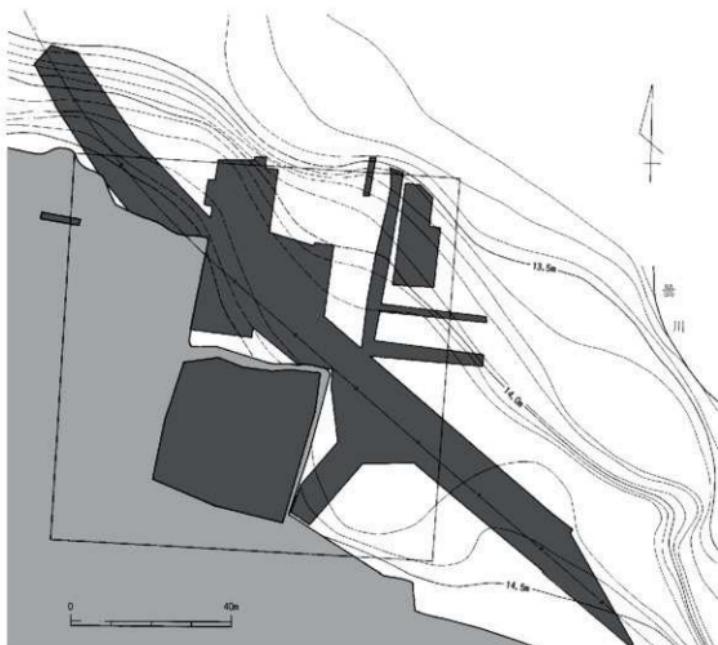
## 第3章 調査の結果

### 第1節 地形・層序

調査区は桑川左岸の段丘上に位置する。調査前の地目は主に水田や畠であったが、近代以降地形の改変が著しい。現在の地形は、平成13年度に実施されたほ場整備によって形成されたものである。

調査区北・南壁の断面観察では、調査区東半部は地形改変の影響が少なく、比較的旧状を保っている。この部分の基本的な層序は、現耕土・床土の下に旧耕土面が数面確認でき、ほぼ水平な堆積をみせる。旧耕土面下にしづい褐色シルト質極細砂層があり、次いで地山となる。地形は東端付近をピークとして中央付近へとゆるやかに傾斜する。寺城の中心ともいえる中央付近から西は、上位段丘面から派生した高まりになる。現状では塔・金堂の検出された水田（現在は盛土・整地される）と本調査区とは1m程度の比高差をもつが、この部分は段丘崖として当初よりある程度の段差があったものと推定する。塔・金堂北側の水田1筆は土取りにより周囲の水田よりも0.3~0.4m掘り下げられ、西半部は地山面が現地表面に露頭する箇所や造構面の削平された箇所が随所に見られる。

寺城西半部には塔・金堂が所在する水田と同じレベルで張り出す高まりがあり、当初は自然地形か、寺院造宮に伴う盛土と考えていたが、圃ち割りしたところ、地山上に2時期にわたって盛土を行ってい



第7図 石守磨寺周辺の地形

ることが判明した。調査区西端は遺構面の地下げが行われているとみられ、部分的には場整備前の耕土層が残存するのみである。

遺構は地表面において検出したが、東半部は、地表面上の土壤化が進み、またマンガンが集積して検出作業が困難であることから、土壤化層を除去して遺構検出を行っている。地山は明赤褐色極細砂であるが、調査区中央付近の北半部では礫層が隆起している。

## 第2節 奈良時代の遺構

石守庵寺に伴う遺構は、「寺域内」と東半部の「寺域東側」に大別でき、寺域内は「寺域東限付近」をさらに分けて記述する。また、寺院関係以外の遺構については別に記述する。

### 1. 寺域内の遺構

#### a. 掘立柱建物

##### SB01 (図版5 写真図版8)

検出状況 第3次調査で検出された建物跡1と同一の建物である。今回の調査では南西隅部分を検出したのみで、建物の大半は北東調査区外へ続く。北側に付属建物と考えられる2間×4間の側柱建物（建物2）が検出される。搅乱や削平により遺構の残存状況は良好ではない。

形状・規模 今回検出したのは2間×3間分で、柱穴5基を再検出した。さらにその南側で東西方向に並ぶ柱穴を新たに4基検出し、梁間4間、桁行9間の純柱建物となることが判明した。これにより、本建物の規模は16.2m、6.5mを測り、調査された掘立柱建物の中では最大規模となる。方位はN 5° Eを示す。柱穴の芯々間距離は1.5~2.0mであるが、南辺の柱穴はやや柱穴間距離が開く。

柱穴 平面形が長径1m、短径10.9m程度の橢円形または隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.3~1.0mとばらつきがあるが、南辺の柱穴については深さ0.3m程度と浅く、東半部は地下げが行われたためか第3次調査区では検出されていない。柱痕は径0.2~0.35mである。

出土遺物 柱穴内より平瓦（T 1・2）が出土している。

##### SB02 (図版6 写真図版9)

検出状況 検出地点は周囲よりも0.3m以上地下げが行われており、柱穴の残存状況は良好でない。

形状・規模 現状では南北に2間、東西に3ないし4間であり、さらに東西に1間分ずつ延びる可能性がある。また南北方向についても、柱穴間距離が2mと4mを測ることから、北側に庇をもつか、消失した柱穴があり、梁間は3間となるかもしれない。東西方向の柱穴間は2.5m前後であるが、東端は2mとなり、東側にも庇が巡る可能性がある。建物の規模は、南北5.8m、東西7.5mあるいは9.5mを測り、SB01に次ぐ規模である。方位はN 4° Eを示す。

柱穴 大半の柱穴掘方は平面円形を呈するが、掘方の底部が残存するだけであり、本来の形状は不明である。掘方の規模は、大半が径0.25~0.5mだが、最大規模のものは0.8~1.0mと大型である。検出面からの深さは0.1~0.2mである。柱痕は大半の柱穴で検出され、径0.15~0.3mを測る。

出土遺物 図化しうる遺物は出土していない。

##### SB03 (図版7 写真図版9)

検出状況 SB04の南側に位置する。SK02と重複し、土坑埋没後に本建物の柱穴を掘り込む。

形状・規模 梁間2間、桁行3間の側柱建物である。規模は東西5.0m、南北3.5mを測り、柱穴の芯々間距離は1.5m前後とはほぼ均等である。建物の方位はN 6° Eを示す。

**柱穴** 挖方は方形または梢円形を呈する。一辺0.6~1.0m、検出面からの深さ0.3~1.0mを測る。掘方の方向はほぼ整い、建物の向きに合致する。大半の柱穴で柱痕が検出された。径0.2~0.3mを測る。

**出土遺物** 柱穴内より土師器長胴甕（1）が出土した。

#### SB04 (図版7)

**検出状況** SA01の東側で検出した。調査で確認した建物では最も西側に位置する。SK01と重複するが、切り合いをもたないためその前後関係は明らかではない。

**形状・規模** 建物は北側調査区外へ広がり、その全容は不明であるが、南北3間以上、東西2間以上の建物である。南辺の柱穴の並びは良好でないが、柱穴間距離がやや短いことから庇になると考える。南北4.5m以上、東西6.5m以上である。建物主軸の偏りはN 5° Eである。

**柱穴** 挖方は平面がやや不整な円形または梢円形を呈し、径0.25m~0.6m、検出面からの深さは0.1~0.4mを測る。柱痕は大半の柱穴で検出できた。径0.1~0.25mである。

**出土遺物** 柱穴内より丸瓦（T 4）が出土した。

#### その他の建物

寺域内では第3次調査で検出された掘立柱建物があり、規模と概略のみ記す。

**建物跡2** 3間×2間 (7.5×3.7m) 東側は水田のレベルが大きく下がるため調査していない。

**建物跡3** 5間×2間 (10×5 m) 北側に短い庇がつく

**建物跡4** 5間×3間 (8.4×4.6m)

#### b. 柱穴列

##### SA01 (図版5 写真図版10)

**検出状況** SD01の北側、SB04の西側で検出した。寺域内の施設としては西端の造構となる。

**規模・形態** 南北方向に直線的に並ぶ6基の柱穴により構成され、検出長は約10m、方向はN 6° Eを示す。柱穴の芯々間距離は1.7~2.3mとばらつきがあるものの、2m程度をとるものが多い。

**柱穴** 平面形は不整な梢円形もしくは隅丸方形を呈する。方形を呈する柱穴の辺はおむね方位に従う傾向がみられる。一辺0.7~1.0mを測る。検出面からの深さは0.3~0.5mある。柱痕は各柱穴で検出でき、径0.2~0.3mを測る。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

#### c. 土坑

##### SK01 (図版8 写真図版11)

**検出状況** 調査区北壁際で検出した。造構の一部は北側調査区外へ続く。削平により造構面が現地表にはほぼ露出し、造構自体も底部付近が残存するのみと考える。SB04と重複し、位置的にはその内部にある。ただし切り合いがなくその前後関係は明らかではない。

**規模・形態** 本来の形狀は明らかにしえないが、検出した部分から南北方向に主軸をもつ不整梢円形を考える。長辺2.0m、短辺1.8mを測る。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは0.1m程度である。

**出土遺物** 理土内から須恵器杯（8）瓦片（T20~27）が出土している

**用途・機能** 廃棄土坑であろう。

##### SK02 (図版9 写真図版11)

**検出状況** SB01の西側約5mに位置する土坑である。西半部は後世の溝SD101に切られる。また本造構埋没後にSB03を構成する柱穴が掘られている。

**規模・形態** 本来の形狀は損なわれているが、南北に長軸をもつ不整長方形と思われる。規模は長辺

6.0m、短辺4.5mを測る。断面形は残存する部分は台形状を呈し、検出面からの深さは0.2mである。

**出土遺物** 土坑内からは大量の瓦片（T 6～19）が出土しているが、それに混じり土器片（2～6）のほか、焼土、礫の羽口（7）、鉄滓などの鍛冶行為を想起させる遺物も含まれている。

**用途・機能** 投棄土坑であろう。

**SK03** (図版10 写真図版12)

**検出状況** SD01の東側、SK02南側、調査区南壁付近で検出した。南端を擾乱により欠くが、ほぼ全容を検出した。南北方向に延びる溝と重複し、溝が本遺構埋没後に掘削されている。

**規模・形態** 平面形は南北に長軸をもつ楕円形と推定する。長径1.7m、短径1.5mを測る。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.15mである。

**出土遺物** 瓦片（T28～32）のほか、須恵器・土師器杯（9・10）が出土している。

**用途・機能** 廃棄土坑であろう。

**SK04** (図版20 写真図版13)

**検出状況** 寺域内で検出した遺構では最も西側に位置する。他の遺構との重複は認められない。

**規模・形態** 平面形は南北方向に主軸をもつ楕円形であり、長径1.0m、短径0.7mを測る。断面形は浅いU字状を呈し、検出面からの深さは0.15mである。埋土は2層から成り、上層には炭が混じる。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

**用途・機能** 不明であるが、火を用いるなんらかの施設に伴う遺構であろう。

**SK05** (図版12 写真図版14)

**検出状況** 金堂の北側に位置する。比較的遺構の疎らな箇所であり、他の遺構との重複はみられない。

**規模・形態** 削平のため底部のみが残存すると思われる。平面形は東西に長軸をもつ楕円形であり、長径1.05m、短径0.9mを測る。断面形は皿状を呈する。検出面からの深さは0.1mである。

**出土遺物** 軒丸瓦片（T33）などが出土した。

**用途・機能** 廃棄土坑であろう。

d. 溝

**SD01** (図版11 写真図版13)

**検出状況** SB01とSB02間に位置する。東西方向に直線的に延びる。西端は調査区内でおさまるが、東側は地下にによって損なわれ、本来の長さは不明である。柱穴と重複し、断面観察では本溝が埋没後に掘り込まれている。

**規模・形態** 検出長6.5m、検出面からの深さ0.3mを測る。

**出土遺物** 埋土内より瓦片（T34・35）、土器（12～14）などが少量出土している。

**機能・用途** 不明であるが、区画あるいは雨落ち溝の可能性がある。

## 2. 推定寺域東限付近の遺構

a. 掘立柱建物

**SB05** (図版12 写真図版14)

**検出状況** 北側は調査区外へ延びるため全容は明らかでない。東側が南北方向の溝SD03と重複する。

**形状・規模** 南北3間以上、東西3間の建物である。南北4.5m以上、東西5.0m以上を測る。柱穴间距離は1.0m～2.0mとばらつくが、1.5mを測るものが多い。南北方向はN10°Eに偏る。

**柱穴** 平面円形か不整楕円形を呈し径0.4～0.7m、検出面からの深さ0.2～0.4mを測る。遺構面が削平

され、深さは浅い。柱痕は大半の柱穴で検出され、径0.15~0.35mを測るが、0.2m程度のものが多い。

出土遺物 遺物は出土していない。

b. 柱穴列

SA02 (図版12 写真図版14)

検出状況 SB05から南へ延びる。東側にSA03があり平行する。

規模・形態 南北方向に直線的に並ぶ7基の柱穴から構成され、その方向はN10°Eを示す。検出長9.2mを測り、さらに南側へ続く可能性がある。柱穴間距離は1~2.5mとばらつき、北半は柱穴間が開くのに対し、南半は間隔が短くなる傾向にある。

柱穴 平面は円形または楕円形を呈し、規模は0.25~0.7mを測る。検出面からの深さは削平のため0.1~0.25mと浅い。柱痕は検出することができなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

SA03 (図版12 写真図版14)

検出状況 SA02の東側約3mに位置し、平行して南北に延びる。4間分検出したが、南側へさらに続く可能性がある。北端の柱穴はSD03と重複する。

規模・形態 南北方向に直線的に並ぶ5基の柱穴から構成され、その方向はSA02同様にN10°Eを示す。柱穴間距離はSA02同様、約2.5mと開く部分と1m程度の部分がある。なお南半の柱穴はSA02の柱穴の並びとは対応した位置にある。

柱穴 柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径0.2~0.5m、検出面からの深さは0.05~0.3mである。造構面の削平により底部付近が残存するのみである。検出できた柱痕は0.2mを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

c. 溝

SD02 (図版12 写真図版14)

検出状況 調査区北半部で検出した。直線的に南北方向にのび、SB05や柵と同じ方向を示す。

規模・形態 幅0.8~1.0m、検出長6.8mを測り、さらに北側調査区外へ続く。検出面からの深さは0.1m前後である。断面形は浅い皿状を呈する。

出土遺物 遺物は出土していない。

機能・用途 第3次調査で検出された寺域東限とされる2本の溝のうち、東側の溝の延長上に所在するため、同一の溝となり、この地点が寺域の東限と推定する。

### 3. 寺域東側の造構

a. 掘立柱建物

SB06 (図版14 写真図版15)

検出状況 SB07・08と近接するため時期差があると思われるが、柱穴の重複がないため前後関係は明らかでない。

形状・規模 東西2間、南北2間の個柱建物である。N10°Eの偏りをもち、東西4.2m、南北4.4mを測る。柱穴間距離は1.5~2.8mと均等ではない。

柱穴 8基の柱穴を検出した。掘方は平面円形を呈し、径0.4~0.6m、検出面からの深さは0.2~0.5mである。大半の柱穴で柱痕を検出できた。径0.2~0.25mを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

#### SB07 (図版14 写真図版15)

検出状況 北東隅の柱穴がSB08を構成する柱穴と重複し、本建物がSB08の柱穴に切られている。

形状・規模 東西2間、南北2間の純柱建物である。N10°Eの偏りをもつ。東西4.5m、南北4.0mを測る。柱穴間距離は1.8~2.2mとばらつくが、おおむね2mか2.2mを測る。

柱穴 9基の柱穴を検出した。掘方は平面が円形または梢円形を呈し、径0.3~0.7m、検出面からの深さは0.2~0.7mである。大半の柱穴で柱痕を検出できた。径0.15~0.2mを測る。

出土遺物 P71より須恵器高杯(19)、土師器杯(20)が出土した。

#### SB08 (図版15 写真図版15)

検出状況 北西隅の柱穴がSB07の柱穴と重複し、本建物がSB07の柱穴を切っている。

形状・規模 東西3間、南北2間の側柱建物である。N12°Eの偏りをもち、東西5.5m、南北4.9mを測る。柱穴間距離は、東西は1.8m前後とほぼ均等だが、南北は北側が約2m、南側が約3mを測る。

柱穴 10基の柱穴を検出した。掘方は平面が円形を呈し、径0.35~0.6m、検出面からの深さは0.3~0.7mである。柱痕は各柱穴で検出できた。径0.2~0.25mを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

#### b. 方形区画

##### SX01 (図版16~19 写真図版16~22)

検出状況 推定寺域東限の東側約5m付近で検出した。北半部を中心に削平され、北西、北東の隅部分を欠く。また南西隅付近は調査区外となる。柱穴や土坑などの遺構と重複関係にある。

規模・形態 方形に巡る幅2~3mの溝を検出し、溝に開まれた区画は東西7m、南北6mの方形となる。区画東半部では1.7×2.0mの火熱による赤化面が確認できる。南北方向の溝はN10°Eを示し、寺域内の施設とは約5°東に偏りを見せる。溝は検出面からの深さは0.2~0.5mを測り各隅部分が浅くなる傾向にある。断面形は南溝、西溝が台形状を呈し、北溝、東溝は皿状で、東溝は底部に凹凸がある。

出土遺物 多量の瓦片(T46~T130)とともに土器片(27・28)が出土している。また炭・灰に混じって変質をきたした土壁状の断片も出土している。

用途・機能 区画溝の中には大量の瓦が含まれることから、区画内部には瓦葺きの建物が存在していた可能性がある。

#### c. 土坑

##### SK06 (図版20)

検出状況 調査区東端で検出した。東端が銅溝と重複し、銅溝に切られる。

規模・形態 平面形は北西~南東方向に主軸をもつ梢円形を呈する。規模は、長径0.9m、短径0.65mを測る。検出面からの深さは0.15mあり、底部は凹凸がある。

出土遺物 遺物は出土していない。

用途・機能 不明である。

##### SK07 (図版20 写真図版22)

検出状況 SX01の南東部、調査区南端で検出した。遺構の大半は南側調査区外へ続く。

規模・形態 遺構の平面は方形を呈すると推定され、現況ではその北東隅部分を検出したのみである。東辺はほぼ南北方向を示す。現況の規模は、2.2×1.7m、検出面からの深さ0.2mを測る。土坑の周囲には約2mの距離をもって幅0.4~0.5mの浅い溝(SD03)が円形に取り囲む。土坑内埋土には炭状炭化物と少量の焼土が含まれ、坑壁の一部は赤く変色をきたしている。

**出土遺物** 上層より土器片が出土しているが炭化しえなかった。

**用途・機能** 火気を伴う遺構と推定し、周間に排水・除湿用の溝が設けられたようである。

**SK08 (図版20 写真図版22)**

**検出状況** SK07東側で検出した。他の遺構とは重複しない。

**規模・形態** 平面形はほぼ南北方向に主軸をもつ長楕円形を呈する。規模は、長径1.1m、短径0.55m、検出面からの深さ0.3mを測る。断面形はU字状を呈する。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

**SK09 (図版20 写真図版23)**

**検出状況** SX01北東隅付近で検出した。本土坑は区画溝と重複する位置にあるが、搅乱によりその前後関係は明らかにしえない。

**規模・形態** 平面形はやや不整な楕円形を呈する。長径0.8m、短径0.7mを測る。削平により本来の形状は不明であるが、断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは0.1mである。埋土には炭を含む。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

**SK10 (図版20 写真図版23)**

**検出状況** SX01の東側に位置する。他の遺構とは重複関係にはない。

**規模・形態** 平面形はやや不整な楕円形を呈する。長径1.3m、短径1.2mを測る。断面形は台形状を呈し、検出面からの深さは0.3mである。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

### 第3節 その他の時代の遺構

#### 1. 寺院造営前の遺構

##### a. 壁穴住居

**SH101 (図版22 写真図版24)**

**検出状況** 調査区東半部の北端で検出し、ほぼ全容を検出した。後世の廊溝と重複する。

**規模・形態** 3.1m×3.2mの方形の住居である。周壁溝は西壁の中央付近にある造り付けカマド付近で途切れるが他の壁面沿いには巡っている。検出面からの深さは0.05m前後と浅い。主柱穴は4穴で柱間は1.6~2.3mである。住居の主軸方向はN55°Wを示す。

**屋内施設** 周壁溝、造り付けカマド、主柱穴のほか床面中央付近で火熱による赤化部分がみられた。

**周壁溝** 幅0.15~0.2m、深さ0.05m前後である。カマド部分を除いて方形に巡る。

**カマド** 西壁中央付近に位置する。焚き口から燃焼部に向かって浅く土坑状に掘り込む。削平のため残存は不良であるが袖部を削り出して馬蹄形に構築している。

**柱穴** 挖方は円形または楕円形を呈し、径0.2~0.4m、深さ0.2~0.3mである。ただし西隅の柱穴のみ2cmと浅い。柱痕は径0.15~0.2mである。

**出土遺物** 須恵器・土師器片が出土したが、炭化しえない。

**SH102 (図版23 写真図版25)**

**検出状況** 調査区中央付近で検出した。SH103、SB101・102に隣接する。削平が著しく壁面の立ち上がりは残存しない。また周壁溝は東半部が損なわれ、コ字状に検出した。寺院関連の遺構と重複する。

**規模・形態** 3.4m×3.3m以上の方形の住居である。周壁溝は残存する部分を見る限り途切れる箇所はない。柱穴の配置から主柱穴は4穴と考えられるが、残存するのは3穴のみである。柱間距離は南北方

向が2.6m、東西方向は3.7mを測る。カマドは削平によって消滅したのか検出できなかった。住居の南北方向はN34°Eを示す。

屋内施設 周壁溝、主柱穴がある。

周壁溝 コ字状に残存する。幅0.1~0.25m、深さ0.05m前後である。

柱穴 掘方は円形を呈し、径0.2~0.5m、深さは0.05~0.2mである。柱穴痕は径0.2m前後である。

出土遺物 遺物は出土していない。

SH103 (図版24 写真図版25)

検出状況 調査区中央付近で検出した。隣接してSH102、SB101・102が所在する。削平が著しく壁面の立ち上がりは残存しない。柱穴が周壁溝と重複する他は遺構の重複はみられない。

規模・形態 3.6m×4.0mの方形の住居である。北東壁中央付近で周壁溝は土坑と重複するが、これは造り付けカマドの残欠と考える。主柱穴は4穴で柱間は1.7~1.8mである。住居の主軸方向はN45°Eを示す。

屋内施設 周壁溝、土坑、主柱穴がある。

周壁溝 幅0.15m前後、深さ0.05~0.1mである。北西と南西壁面中央付近で途切れる部分がある他はほぼ全周する。

土坑 北東壁際中央付近に位置する。平面はやや不整な長方形を呈し長さ1.1m、幅0.75mを測る。断面は浅い皿状で深さは0.15mある。埋土は炭・焼土を多量に含む。周壁溝と重複した状態で検出したが、主軸が住居と同一であること、埋土に炭・焼土を含むこと、検出した位置からカマドの残欠と推測する。

柱穴 掘方は円形を呈し、径0.2~0.3m、深さ0.05~0.3mである。P1・2とも0.05mと浅い。

出土遺物 遺物は出土していない。

b. 挖立柱建物

SB101 (図版25 写真図版26)

検出状況 調査区中央付近、調査区北壁際で検出した北東ー南西方向の建物である。一部調査区外へ広がる。他の遺構との重複は見られない。

形状・規模 梁間3間、桁行4間以上の側柱建物である。梁方向5m、桁行は6.4m以上。柱の芯々間距離は1.5m前後である。建物の南北方向は、N56°Eを示す。

柱穴 掘方の平面形は、円形または方形を呈し、径または一辺が0.25~0.7m、検出面からの深さ0.2~0.4mを測る。柱痕は大半の柱穴で検出できた。径0.1~0.25mを測るが、0.2m程度のものが多い。

出土遺物 遺物は出土していない。

SB102 (図版25 写真図版26)

検出状況 調査区中央付近、調査区北壁際で検出した北西ー南東方向の建物である。一部調査区外へ広がる。他の遺構との重複は見られない。

形状・規模 梁間3間以上、桁行4間の側柱建物である。梁方向5m以上、桁行は7m。柱の芯々間距離は1.5~2.0mである。建物の南北方向は、N48°Eを示す。

柱穴 掘方の平面形は、円形または方形を呈し、径または一辺が0.4~0.7m、検出面からの深さ0.25~0.35mである。柱痕は大半の柱穴で検出できた。径0.15~0.3mを測るが、0.2m程度のものが多い。

出土遺物 遺物は出土していない。

c. 集石造構

SX101 (図版26 写真図版27・28)

**検出状況** 調査区東端で検出した。不整形な浅い凹地に集石がみられる。

**規模・形態** 掘方は南北に主軸をもつ不整な楕円形を呈し、南西隅の一部が調査区外となる。規模は長径3.7m、短径2.5m、検出面からの深さ0.05~0.2mである。埋土はやや土壤化した明褐色極細砂とにぶい黄褐色極細砂からなる。断面形は皿状を呈し、底部は比較的平坦である。底部の北よりに浅い長楕円形のくぼみがコ字状に配置される。このくぼみに囲まれた中で集石を検出した。集石は一部欠くが復元した規模は長さ1.6m、幅0.6m程度である。0.2~0.4mの凝灰岩の板状の亜角礫より構成され、その上面はほぼ面を揃えて平坦となる。

**出土遺物** 須恵器の小型短頸壺(29)、土師器杯(30)が集石付近より出土した。杯は蓋として用いる。  
**機能・用途** 本遺構は、南東側に開口する小型の横穴式石室の基底部とするのが妥当かと考える。集石は敷石の一部、コ字状のくぼみは奥壁・側壁の石材据え付けのための掘方と推定する。墳丘は削平のために完全に消失し、石室材もまったく残存しないが、石材据え付けのための掘方から幅1m、長さ2m以上の石室規模を復元することができ、出土遺物から終末期の小型横穴式石室と思われる。

**SX102** (図版26 写真図版27・28)

**検出状況** 調査区東端で検出した。不整形な浅い凹地に集石がみられる。

**規模・形態** 掘方の平面形は北西~南東方向に主軸をもつ隅丸方形を呈する。北西側は調査区外へ続く。検出長2.8m、幅2.1mを測る。検出面からの深さ0.1~0.15mである。断面形は皿状を呈し、底部は比較的平坦である。掘方の東半を中心0.05~0.2mの亜角礫、亜円礫が集中する。埋土はやや土壤化した明褐色極細砂とにぶい黄褐色極細砂からなり、礫は主にこの2層の境界付近のレベルで検出した。

**出土遺物** 出土していない

**機能・用途** SX101を横穴式石室とするなら、本遺構もその一部を構成する可能性がある。ただし、集石が想定される石室の延長上からやや東に偏ることから、石室一部というよりも、周溝や墳丘の礫が2次的に集積したものと推定する。

d. 土坑

**SK101** (図版23 写真図版26)

**検出状況** 調査区中央部の西端付近で検出した。

**規模・形態** 平面形は不整な円形を呈し、径0.6×0.7m、検出面からの深さ0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

**用途・機能** 遺物がないため、時期などは明らかにできないが、埋土がSH03内のカマドのものと類似することから、同様に造り付けカマド残欠の可能性がある。

e. 小結

調査区東半部で、竪穴住居3基、掘立柱建物2棟を確認している。竪穴住居と掘立柱建物は方向に幅をもつものの、奈良時代の遺構と異なり北東の方針をとることから、同一時期のものと判断し、寺院造営前に集落が存在したことが明らかとなった。

竪穴住居は一辺3~4mの方形平面を呈し、4本柱構造となる。SH101には北西辺に、SH103は北東辺に造り付けの龕を作り、3棟とも周壁溝を残す程度の残存状況であり、内部からの遺物の出土はない。

それぞれの建物の配置をみると、SB102の北東桁行柱列とSB101の北東梁間柱列が同一線上に並び、SB102の南西桁行柱列とSH103の北東辺が揃い、その延長線がSH102を二分する位置関係になるもの

と推定され、意図的な配置が行われていると考えられる。

## 2. 寺院廃絶後の遺構

### SD101 (図版11 写真図版13)

**検出状況** 寺域内の調査区南壁際で検出した。廃棄土坑であるSK02と重複し、本遺構が切っている。

**規模・形態** L字状に直角に屈曲する部分を検出した。溝の示す方向は奈良時代の遺構と同じである。南側は調査区外へ続き、西側は次第に幅や深さを減じ、調査区端ではほぼ消滅するようである。幅は南側で2.7m、西側で1.5mを測る。検出面からの深さは南側で0.2~0.4m、西側で0.2mを測る。断面形は船底状を呈し、緩く立ち上がる。

**出土遺物** 瓦片（T36~43）など出土しているが、須恵器こね鉢、土師器鍋も混じる。

**機能・用途** 調査区の制約により明らかにしえないが、寺院廃絶後の土地利用を示す遺構であろう。

### 鋸溝

調査区東端で検出した。奈良時代、古墳時代の遺構と重複し、これらの遺構を切っている。溝の方向は、西北西-東南東（N75~80°W）を示すもの、西南西-東北東（N105~110°W）を示すものの2種がある。いずれも古墳時代、奈良時代の遺構の示す方位とは合致しない。2種類の溝は、切り合い関係から、前者の溝が後出していている。

## 第4章 出土遺物

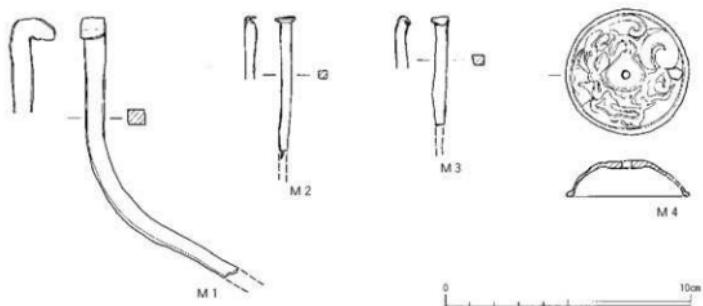
### 第1節 土器

#### 1. 寺城内出土の土器

1は土師器長胴壺と思われる。口縁部が大きく開く。内外面とも摩滅のため調整は不明である。2は須恵器杯Aである。平坦な底部から体部が斜上方にのびる。底部と体部の境は明瞭である。3・4は須恵器杯Bである。底部と体部の境が明瞭であり、体部は斜め上方に直線的にのびる。底部と体部の境付近に高台がつく。5は小型の土師器壺である。最大径は胴部付近にあり、体部は丸みのある形状になると思われる。頸部が短く立ち上がり外反する口縁部へと続く。6は破片のため全容は明らかでないが、壺と思われる。体部から直線的に開く口縁部へ続き、口縁部下に湾曲させた把手が付く。7は輪の羽口である。残存長7.5cm、外径6.5cm、内径3.2cmを測る。8・9は須恵器杯Aである。底部と体部の境が明瞭であり、体部は斜め上方に直線的にのびる。口径に対し器高は低い。10は土師器杯である。底部と体部の境は不明瞭である。体部は湾曲しつつ立ち上がる。11は須恵器鉢底部である。いわゆる鉄鉢といわれる器種で尖底である。志方窯跡群に類例がある。12は須恵器杯B蓋である。平坦な頂部で端部を下方に屈曲させる。13は須恵器環状紐付蓋である。頂部が平坦な形状になるものと思われる。14は扁平な体部から短く直立する口縁部をもつ短頭壺である。底部を欠くが平坦な形状になると思われる。志方窯跡群中谷4号窯跡の壺Cに類例がある。15・16は須恵器杯B蓋である。平坦な頂部から丸みをもって周縁部につづく。端部は下方に短く屈曲させる。17は須恵器杯Aである。底部は平底で体部は斜め上方にのびる。口縁部は屈曲させ直立する。18は輪の羽口である。破片であるが、復元した外径約6cm、内径約4.5cmを測る。内部に銅と思われる付着物がある。

#### 2. 寺城東側出土の土器

19は須恵器高杯脚部である。端部は下方に拡張する形状である。20は土師器杯である。底部を欠くが、口縁部より丸みをもって底部に続くものと考える。21・22は須恵器杯Aである。底部はやや丸みをもち体部との境は不明瞭である。22の底部内面に×印のヘラ記号がある。23は須恵器杯Aで、平坦な底部から体部が斜上方にのびる。底部と体部の境は明瞭である。24は須恵器短頭壺である。体部は直線的に立ち上がり樽状を呈する。体部にはらせん状に沈線を巡らせ、体部下半から底部にかけて静止ヘラ削り調整が残る。口縁部は直立ぎみである。25は底部が平底で口縁部を外方に引き出す。いわゆる灯明皿とされる器種であり志方窯跡群中谷4号窯跡出土の皿Eに類例がある。26は須恵器杯Aである。平坦な底部から体部への境が明瞭である。口径に対し器高は低い。27は須恵器底部である。底部は扁平で、外面には×印のヘラ記号がある。28は須恵器横瓶である。口縁部は直立して外反する。口縁端部は平坦である。体部外面は平行タタキの後カキ目を施す。横長側面の内面には粘土板を充填した痕跡が認められる。29は短頭壺で、体部の形状は算盤玉に近く短く直立する口縁部がつく。30は土師器杯である。丸みのある底部のみ残存し、体部は球状を呈すると思われる。31は須恵器杯蓋である。天井部は平坦で体部が垂下する。底部と体部の境は不明瞭である。32は土師器高杯である。杯部は球状を呈し、脚部は端部へ外反し水平方向にのびる。33は須恵器杯蓋である。天井部と体部の境は不明瞭で口縁端部を屈曲させる。34は須恵器杯Aである。底部は平坦で体部が斜上方にのびる。底部と体部の境はやや不明瞭である。35は土師質のイイダコ壺把手部である。壺部は残存しない。



第8図 出土金属製品

## 第2節 金属製品

出土した金属製品は少量である。

鉄釘は大型と小型の2種がある。M2・3は小型の鉄釘である。M2はSK02、M3はSD01から出土している。現存長はM3で5.8cmあり、断面は一辺0.4cmの方形を呈する。頭部は折り曲げる。M1は大型の鉄釘である。伽藍西部の包含層より出土した。残存長は13.4cmあり、断面は一辺0.75cmの方形を呈する。頭部は折り曲げる。鉄釘の小型はSK01およびSX01西溝からも出土しているが、残存状況不良のため、図化していない。

なお図化していないが寺域内のSK02、SD101からは鉄滓が出土している。

M4は銅製の不明製品である。径5.0cm、高さ1.45cmの半球状を呈する。頂部に径0.3cmの孔がある。また頂部に宝珠状の、その周囲に唐草状の浮き彫り状文様が認められる。用途は不明ながら、建築材などを装飾する金具であると推測する。

## 第3節 石製品

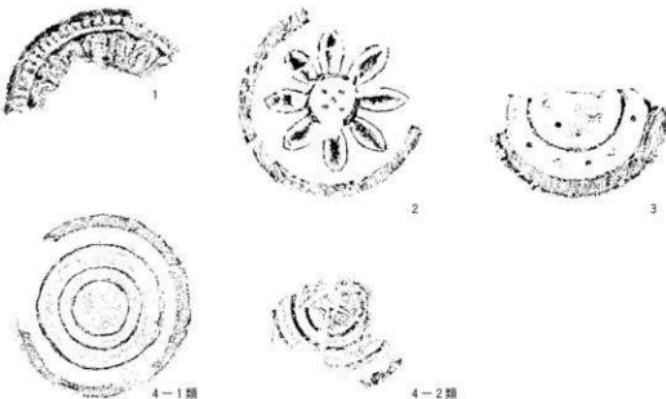
S1・S6が調査区西半部。その他が調査区東半部の遺物包含層から出土したもので、遺構に伴うものはない。S1・S2はサスカイト製凹基無茎式の打製石鏨である。S1は厚い薄片を素材とし、両側面は直線的に仕上げている。基部の抉りはU字状を呈し、脚端部は尖り気味に仕上げられる。S2は、S1よりも幅があり両側面は丸みをもって仕上げている。基部の抉りは浅いU字状を呈し、脚端部は尖り気味に仕上げられる。S3はサスカイト製剥片である。S4はチャート製石核でS5の剥片と接合できる。S6はチャート製で、剥片の一端に加工を施し刃部としていることから削器と思われる。S7はサスカイト製剥片で、一端に加工痕が認められる。

## 第4節 瓦

### 1. 瓦の分類

#### a. 軒丸瓦

瓦当の文様によって4型式に分類できるが、残存状況が良好でないため、細分していない。



第9図 軒丸瓦の型式

1型式 框線文帶細弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。石守庵寺の創建瓦とされるものである。外区の外縁は素文で直立する。外区は框線を施す。中房は圈線によって区画される。蓮子は $1+8$ ないし $7$ の2種に分けられるが、今回の調査では分類できない。蓮弁の長さは $2.45\text{cm}$ 、幅 $0.7\text{cm}$ である。

2型式 単弁八葉蓮華文である。中房は圈線で囲まれ、その中に $1+4$ の蓮子を配置する。蓮弁は子葉とそれを包む1重の輪郭線からなる。蓮弁の彫りは浅く、花弁中央には鈍い棱が認められるが、大半は丸みをもつ。弁端はやや尖形である。弁間は無文である。外縁は素文で断面形はコ字状である。外面の文様部基底面とほぼ同じレベルに枷型の痕跡と考えられる段差が認められる。蓮弁は長さ $3.5\text{cm}$ 、幅 $1.55\text{cm}$ を測る。

3型式 重圈文軒丸瓦の瓦当部破片である。外縁は素文で直立する。外区は珠文を巡らせる。出土したものは6点残存しているが、本来は10点程度であろう。中房は外区と同じレベルであり、境界に圈線が巡る。蓮子は $1+5$ 残存しているが、本来は $1+7$ ないし $8$ となるのである。過去には外区が素文のものは出土しているが、今回報告のものは初の出土となる。

4型式 三重圈文軒丸瓦である。外縁は無文であり外面の文様部基底面とほぼ同じレベルに枷型の痕跡と考えられる段差が認められる。中房部は無文のものと線刻するものがある。



第10図 軒平瓦の型式

b. 軒平瓦

総数2点出土した。いずれも細片であるがすべて図化した。瓦当の文様によって2型式に分類する。

1型式 波状文軒平瓦である。外区がなく頭部の形態は曲線頭であるが低い。

2型式 斜格子文軒平瓦である。0.6×1.0cmの斜格子文を型押しする。頭部の形態は不明であるが、過去に出土したものは段頭である。

c. 丸瓦

すべて破片であるが、出土したものは玉縁をもたないいわゆる行基式丸瓦であり、玉縁式丸瓦は出土していない。凸面の調整は平瓦1-1種と同じである。

d. 平瓦

主に凹面や側面で観察できる痕跡などから桶巻き作り、一枚作りに分類した。

凸面は主に表面に施したタタキの原体により分類した。タタキの原体には縄巻叩板と刻線叩板がある。

さらに縄巻叩板は原体とタタキの方向、刻線叩板は原体によって細分した。

凹面

A技法 桶巻き作り

B技法 一枚作り

凸面

1種 縄目タタキの後ナデで仕上げたもの。残存する縄目タタキで細分できる。

1-1種 縄目タタキは縱方向

1-2種 縄目タタキは斜め方向

2種 縄目タタキの後ナデで仕上げ、さらにその上からV字状に縄目叩きを施す。残存する当初の縄目タタキで2種に細分する。

2-1種 当初のタタキが1-1種と同じ

2-2種 当初のタタキが1-2種と同じ

3種 斜め方向の縄目タタキ

4種 縦方向の縄目タタキ

4-1種 縄巻叩板を用いるもの。その単位は6本／1cm程度であるが、中には4～8本程度のものがあり、タタキ板の部位の違いか原体の違いかは明らかでない。

4-2種 縄巻叩板を用いるもの。その単位は11本／1cmと細かい。

5種 横方向の縄目タタキ

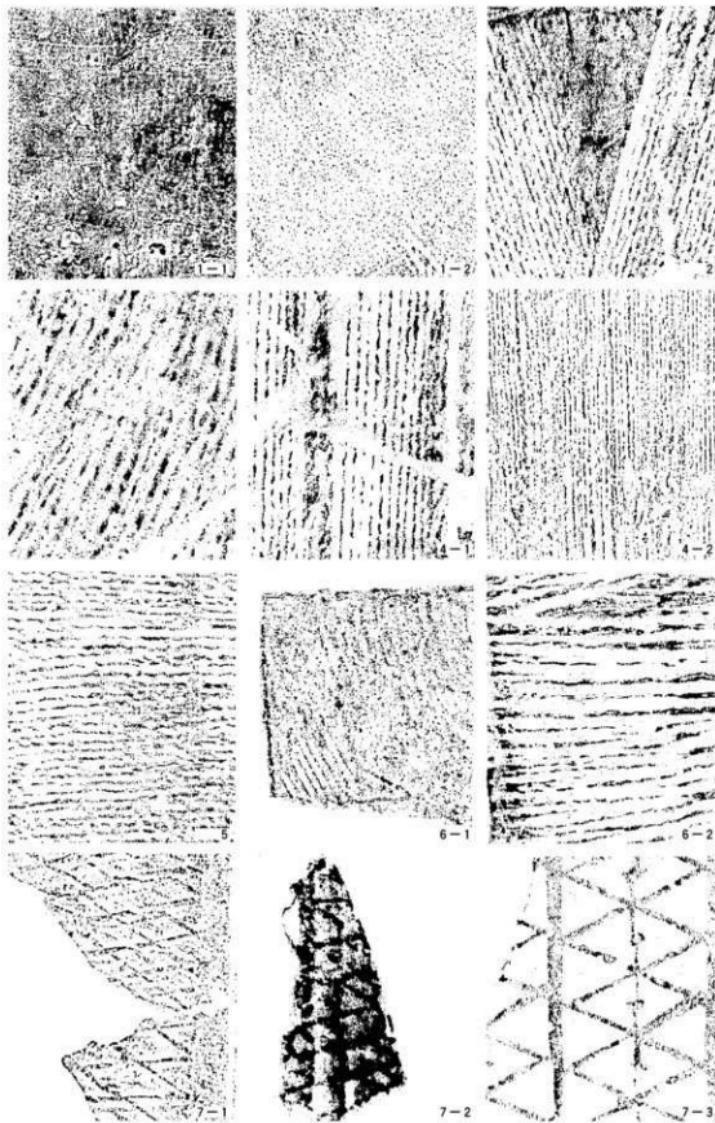
6種 横方向の平行タタキ

7種 斜格子タタキ

7-1種 1.8×2.0cm程度の斜格子を刻み、平行四辺形を形作る格子の線がシャープなものとやや乱れるものがあるが、部位の違いが明らかでない。

7-2種 1.0cm×1.0cmの正格子。

7-3種 各辺が3cm程度の斜格子。斜格子により形作られる平行四辺形は縦方向の直線により2分され、中央に珠文をおく。珠文の形状から原体はすべて同じと思われる。また叩板は重複を避け、線刻された平行四辺形が横方向に並ぶよう意識して叩いている。



第11図 平瓦凸面の調整

#### e. 隅平瓦

平瓦の広端部の隅を焼成前に切断している。凸面の調整は平瓦1-1種と同じである。

#### f. 睫斗瓦

平瓦を焼成前に切断したもので、凸面の調整が平瓦1-1類と同じものが大半であるが、わずかに製作技法が不明ながら凸面を板状のナデで仕上げたものがある。

### 2. 寺城内出土の瓦

#### a. 建物、柱穴

T 1 は平瓦。全面に摩滅が著しいが凸面は1種と思われる。凹面は縦横7本前後／1cmの布目が見られる。縦方向の凹凸が確認できることからA技法と推定する。狭端面は1段の削りで断面がコ字状を呈する。側面は2段の削りを行い、凸面側を大きく削る。厚さは2.4cm。焼成は不良で、色調は灰黄である。

T 2 は平瓦。凸面は4-1種。凹面は布目と糸切り痕が見られる。狭端面は1段の削りにより断面はコ字状を呈する。側面は2段の削りを行い、凸面側を大きく削る。厚さは1.6cm。焼成は良好で須恵質である。

T 3 は小片であるが、残存する端面から右隅平瓦と推定する。凸面は4-1種。凹面は摩滅が著しいがわずかに布目が見られる。端面は1段の削りにより凹面側がわずかに鋭角をなす。厚さは2.5cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。

T 4 は丸瓦。凹面は縦横12本／1cmの布目が見られる。狭端面は削りにより断面はコ字状を呈する。残存する側面は2段の削りを行い、凹面側を大きく削る。焼成はやや不良である。

#### b. 土坑

##### SK01

##### 軒丸瓦（T20）

3種の瓦当部と丸瓦部の一部が残存する。丸瓦部は凸面が網目タキの後ナデで仕上げる。凹面は縦横8本／1cmの布目が見られる。焼成は良好で須恵質である。

##### 平瓦（T21-25）

T21-23の凸面は不明瞭なものもあるが、1種である。T21の凸面は横方向にナデである。凹面は縦10本／1cm、横8本／1cmの布目が見られる。狭端面は削りにより断面は凸面側が鋭角をなす。厚さは1.8cm。側面は1段の削りを行い断面はコ字状を呈するが、凸面側に分割痕が残り A技法である。焼成は良好で須恵質である。T22の凹面は布目の糸がほつれている。また幅1.5-4.0cmの縦方向の凹凸が確認でき、A技法と推測する。狭端面は2段の削りを行い、凸面側を小さく面取りする。側面は1段の削りを行い、断面はコ字状を呈する。厚さは1.8cm。焼成はやや不良で、色調は浅黄を呈する。T23は3／4程度が残存し、長さ36.5cm、厚さ1.7cm。凹面は縦横10本前後／1cmの布目が見られる。端面および側面はいずれも1段の削りにより断面がコ字状を呈する。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。

T24の凸面は4-2種。凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。布目は側面までまわり込みB技法である。広狭両端面ともに1段の削りにより断面がコ字状を呈する。端面間の長さは30.0cmである。残存する側面は1段の削りを行い凹面側は未調整である。厚さは1.8cm。焼成は良好で須恵質である。

T25の凸面は7-3種。タタキは右から左に行う。凹面は縦横9本前後／1cmの布目と糸切りが見

られる。布目は側面にまわり込みB類と判断する。広端面は1段の削りにより断面がコ字状となる。残存する側面は1段の削りを行なう。厚さは2.1cmである。焼成は良好で須恵質である。

#### 丸瓦（T26・27）

T27の凸面は縦目タタキの単位が縦方向7本／2cmと確認できる。凹面は縦横9本／1cmの布目が見られる。T26の広端面、T27の狭端面とともに1段の削りにより断面がコ字状を呈する。側面はいずれも1段の削りを行い断面はコ字状を呈し、T27の凸面側に分割痕が残る。厚さはT26が1.7cm、T27が1.2cm。焼成は、T26がやや不良、T27は良好でいずれも須恵質である。

#### SK02

##### 軒丸瓦（T5）

瓦当部破片。無文の外縁と2条の圓線があり4型式と推定する。焼成は良好で須恵質である。

#### 平瓦（T6～T13、T18・19）

凸面の調整は、T11が縦目タタキのはかは、1種（T6～10、T19）または2種（T11・12・18）と判断される。

T6の凸面は縦目痕がかなり残存する。凹面は摩滅のため調整は不明。両端面を欠く。側面は2段の削りで、凸面側を大きく削る。厚さは2.3cm。焼成はやや不良で、須恵質である。T7・8ともに摩滅が著しい。凹面はともに縦横8本前後／1cmの布目が見られる。T7の広端面は凸面側が鋭角をなし、側面はいずれも1段の削りで断面は凹面側が鋭角をなす。厚さは2.8cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T8は凸面に横方向の沈線が1条ある。凹面は縦方向の凸凹が確認できA技法と推定する。広端面の断面は削りによりコ字状を呈する。側面は1段の削りを行い、凹面側が鋭角をなす。厚さ1.6cm。焼成は不良で、色調はにぶい灰白を呈する。T9の凹面は縦横8本／1cmの布目が見られる。また幅2.5～3.0cmの縦方向の凸凹が確認でき、A技法と推測する。広端面の断面は削りによりコ字状を呈する。側面は2段の削りを行い、凸面側をより大きく削る。厚さは2.6cm。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙を呈する。T10の凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。広端面の断面は摩滅するものの、本来はコ字状を呈するのであろう。側面の断面は削りによりコ字状を呈するが、分割痕と思われる突起が凹面側に残る。厚さは2.1cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T19の凹面は縦横とも8本／1cm程度の布目が見られる。狭端面と側面の断面はヘラ削りによりコ字状を呈する。厚さは2.7cmと厚い。焼成は良好でない。

T11はほぼ完形である。長さ37.5cm、重さ3.22kg。凸面は5本／2cmの縦目タタキを縦と斜め方向に施す。タタキは左から右に行なう。凹面は縦横9本／1cmの布目が見られる。端面は1段の削りにより断面形はコ字状を呈する。側面は1段の削りで断面は凹面側が鋭角をなす。厚さ2.2cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。

T12の凸面は2～1種。凹面は縦横8、9本程度／1cmの布目が見られる。またT13の凹面は幅3cm程度の縦方向の凸凹が確認でき、A技法と思われる。T12は狭端面幅22.8cm。2段の削りを行い、凹面側をやや大きく削る。T13は広端面幅28.5cm。T12・13とも側面の断面は削りによりコ字状を呈するが、T13の右側面は凸面側を小さく面取りしている。厚さはT12・T13が2.0cm、T18は1.3cmである。焼成は、T12・T18はやや良好で須恵質であるが、T13は不良である。

#### 丸瓦（T14）

凸面は縦目がかなり残存する。凹面は縦8本／1cm横9本／1cmの布目が見られる。広端面は1段の削りを行ない、その断面は凸面側がやや鋭角をなす。側面はコ字状を呈し、わずかに凹面側を面取り

する。厚さは1.8cm。焼成は良好で、色調は灰黄を呈する。

#### 熨斗瓦（T15~17）

T15の凸面は斜め方向の板ナデ状の痕跡が残る。凹面は縦横8本／1cmの布目が見られる。端面はナデで仕上げる。側面は2段の削りを行なうが凹面側は小さく面取りするのみである。厚さ3.0cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T16もやや大型の熨斗瓦と思われるが、調整や胎土が他と異なり、異なる用途の瓦となる可能性がある。凸面は板ナデ状の痕跡が残る。凹面は縦横8本／1cmの布目が見られる。残存する端面はナデによって仕上げられ、側面は1段の削りを行なう。厚さは3.0cmである。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T17は熨斗瓦の凸面は平瓦2~1種と同じ。凹面は縦横7本／1cmの布目が見られる。端面および側面は削りによりコ字状を呈する。幅14.5cm、厚さ2.0cmを測る。焼成は不良であり、色調は橙を呈する。

#### SK03

##### 軒丸瓦（T28）

瓦当部破片で外区のみ残存する。1型式と思われる。焼成は不良であり、色調は灰白を呈する。

##### 平瓦・隅平瓦（T29・30）

T29は隅平瓦と思われる。凸面は1~1種。凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。狹端面の断面は削りによりコ字状を呈する。残存する側面は1段の削りでコ字状を呈する。厚さ2.0cm。焼成は良好で須恵質である。

T30の凸面は摩滅しているが、1種と推定する。凹面は縦横とも7~8本／1cmの布目が見られる。残存する狹端面と側面の断面はヘラ削りでコ字状を呈する。厚さは2.3cm。焼成は良好で須恵質である。

##### 丸瓦（T31・32）

凹面は縦横7、8本／1cmの布目が見られる。T31の狹端面幅は11.5cmである。断面は削りにより凹面側が鋭角をなす。側面は削りにより左側はコ字状をなし、右側は凸面側が鋭角をなす。厚さ1.6cm。焼成は良好で須恵質である。T32は広端面の断面は削りの後ナデを施す。側面は3段の削りを行い、凹面側を大きく削る。厚さ1.7cm。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。

#### SK05

##### 軒丸瓦（T33）

内区の蓮弁のみ残存し、その配置から2型式と思われる。焼成は不良であり、色調は浅黄を呈する。

##### c. 溝

#### SD01

##### 平瓦（T34）

凸面は2類。凹面は縦横8本／1cmの布目が側面までみられ、B技法と推定する。狭端面は凹面側を面取りする。側面は1段の削りでわずかに凸面側が鋭角をなす。厚さ1.9cm。焼成は良好で須恵質。

##### 隅平瓦（T35）

右隅平瓦である。凸面は1~2類。凹面の調整は摩滅で不明である。側面は1段の削りにより断面がコ字状を呈する。厚さ1.7cm。焼成は良好で色調は灰を呈する。

##### d. その他の遺構、包含層

#### SD101

##### 軒丸瓦（T36）

4~2型式の破片である。中房のほぼ中央にヘラにより十字状に線刻する。外縁はやや丸みをもち高

さ1.5cmである。丸瓦部との接合箇所は残存しない。焼成は良好で須恵質である。

#### 平瓦（T37~39）

T37の凸面は縱方向の削りの後、横方向のナデで仕上げるが、側面付近はナデが及ばず削りが残存する。凹面は縱横8本／1cmの布目が見られる。残存する狭端面、側面とも1段の削りを行い、断面はコ字状を呈する。焼成は良好で須恵質である。T38の凸面は1種。凹面は縱横8本／1cmの布目が見られる。広端面は1段の削りにより、断面は凸面側が鋭角をなす。残存する側面は1段の削りにより凹面側が鋭角をなす。厚さ1.8cm。焼成は良好で須恵質である。T39の凸面は1~1種。凹面は縱14本／1cm、横9本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。狭端面、残存する側面とも1段の削りを行い、断面はコ字状を呈する。焼成は良好で、色調は須恵質である。

#### 軒平瓦（T40）

2型式の瓦当片。凹面は縱横10本前後／1cmの布目が見られる。焼成は良好で須恵質である。

#### 隅平瓦（T41~43）

T41~43の凸面は平瓦1~1種と同じで、横方向のスレ線が2条認められる。凹面はいずれも摩滅著しい。側面は1段の削りにより断面はコ字状を呈する。T43は右隅平瓦と推定。厚さは2.4cm。焼成は良好で須恵質である。T42の凸面は平瓦1~2種と同じ。凹面は縱横8本／1cmの布目が見られる。側面は1段の削りで断面はコ字状を呈する。焼成は良好で須恵質である。

#### 包含層

#### 丸瓦（T44~45）

T44の凸面は平瓦1~2種と同じ。凹面は布目が見られる。狭端面は1段の削りにより断面がコ字状を呈する。側面は2段の削りで凹面側は小さく面取りするのみである。厚さは2.0cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T45の凸面は平瓦1種と同じ。凹面は縱横10本前後／1cmの布目が見られる。両端面を欠く。側面は凹面側のみ1段の削りを行なう。厚さは1.5cm。焼成は良好で須恵質である。

### 3. 寺城東側出土の瓦

#### a. 方形区画

##### SX01

#### 軒丸瓦（T46~64）

T46~T49はいずれも破片であるが、文様の配置から1型式と推定する。T46~48は外区と内区の蓮華文が残存する。T49は中房部の破片で蓮弁8葉と蓮子4点が残存する。焼成はT48、T49が良好で、T49は須恵質である。T46、T47の焼成は不良である。

T47~T58はいずれも破片であるが、文様の配置から2型式と推定する。このうちT50は外縁の一部を欠くものの、ほぼ全容が明らかである。外縁外面の文様部基底面とほぼ同じレベルに枷型の痕跡と考えられる段差が認められる。丸瓦との接合部となる瓦当裏面は浅い溝状にくぼませる。T51は外縁の大半を欠き蓮弁と中房が残存する。焼成は不良でにぶい橙色を呈する。裏面は丸瓦部との接合に用いた補充粘土が凹面側に残っている。T52は蓮弁5葉と中房の蓮子3点が残存する。丸瓦との接合部となる瓦当内面は浅い溝状にくぼませ、丸瓦部の凹凸両面に補充粘土をあて指ナデにより密着させる。

T53~56は外縁部と蓮弁の一部が残存する。T53の焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。T54は裏面に丸瓦部を接合させるための浅いU字状の溝がある。焼成は不良で摩滅が著しい。色調は浅

黄橙である。T55は凸面側に補充粘土の一部が残存する。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T56は丸瓦との接合部分は残存しない。外縁外面に伽型の痕跡と考えられる段差が認められる。運弁は2葉残存する。焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。T57は外縁から中房の一部が残存する。丸瓦部の凹面にはわずかに布目が認められる。補充粘土は凸面側にのみ認められる。焼成は不良であり、色調は淡黄である。T58は中房の蓮子が1+3残存する。丸瓦との接合部分は残存しないが凹面側の補充粘土が残存している。焼成は不良であり、色調はにぶい橙を呈する。

T59・T60は3型式の破片である。T60は瓦当表面には縱方向に木目が残存する。丸瓦との接合部分は残存せず、凹面側の補充粘土が残存するのみである。焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。T59は破片であるが、3型式と思われる。丸瓦部との接合部分は残存しないが、補充粘土は凸面側で認められる。色調は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。

T61の瓦当は4-1型式で、丸瓦部の一部も残存する。焼成は良好であり、色調は暗灰を呈する。

T62~T64は軒丸瓦細片である。T62は軒丸瓦の瓦当外縁の破片である。外縁は素文であり、幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る。T63・T64は軒丸瓦の丸瓦部破片である。T63の接合部端面はコ字状を呈し、補充粘土は凹凸両面で確認できる。凹面は縱横とも7本/1cm程度の布目がある。焼成は不良であり、色調は灰白を呈する。T64は凹面側に補充粘土がわずかに残存する。

#### 軒平瓦（T65）

1型式の瓦当部破片である。平瓦部凹面には単位不明であるが、布目が見られる。焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。

### 平瓦、丸瓦、その他の瓦

#### 西溝

##### 平瓦（T66~84）

###### 1種

T66・67の凸面は1-2種。凹面は縱横8本/1cmの布目が見られる。幅2.5~3.0cmの桶の枠板の痕跡と思われる縱方向の凹凸が確認できA技法と推測する。側面・広端面の断面形はどちらも1段の削りによりコ字状を呈する。復元長33.9cm、狭端面幅23.2cm、厚さ1.6cmを測る。焼成は不良で、色調はにぶい黄を呈する。T67の凹面は縱横10本/1cmの布目。厚さは1.55cm。焼成は良好で色調は灰白を呈する。

T68・70の凸面は1-1種。凹面は縱横10本/1cmの布目が見られ、布の綴じ痕も認められる。また縱方向の凹凸が確認できることから、A技法と推測する。側面・広端面の形状はどちらも1段の削りによりコ字状を呈する。厚さ1.8cm。焼成は良好で、色調は灰白を呈する。T70の凹面は縱・横とも8本/1cmの布目と糸切り痕が見られる。広端面は1段の削りの後ナデで仕上げ、断面はコ字状を呈する。側面は1段の削りで断面は凹面側が鋭角をなす。厚さ1.5cm。焼成は不良で、色調は浅黄を呈する。T69はほぼ完形だが凸面は摩滅により不明瞭。凹面は縱横8本前後/1cmの布目が見られる。長さ39.1cm、広端面幅27.7cm、狭端面幅24.4cm、厚さ2.5cmを測る。重量は4.35kgである。端面は1段の削りにより、広端面は凸面側が鋭角をなし、狭端面側はコ字状を呈する。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。

###### 4種

T71~73の凸面は4-1類。T71の凹面は縱横6本/1cmの布目が見られる。広端面幅27.6cm、厚

さ2.1cmを測る。広端面は1段の削りで断面はコ字状を呈する。側面の形状は凹面側にやや丸みをもち、摩滅ぎみではあるが少なくとも2段の削りを行なっているようである。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T72の凸面は叩き右から左へ施す。凹面は縦横7本／1cmの布目が側面上部までまわり込み、B技法と推定。狭い端面は1段の削りを行ない、断面はコ字状を呈する。側面は凸面側を小さく1段削るのみである。厚さは2.2cm。焼成は良好で、灰黄褐色を呈する。T73の凹面は縦横7本前後／1cmの布目が見られる。両端面間の長さは33.3cmである。広端面は1段の削りにより断面はコ字状を呈する。狭端面側はナデで仕上げ、凹面側が鋭角をなす。側面はナデで仕上げ丸みをもつ。厚さは2.2cm。焼成は良好であり、色調は浅黄または灰を呈する。

#### 5種

T74の凹面は縦横8本／1cmの布目が側面にまわり込みB技法と推定。長さ29.2cm、厚さ2.1cmを測る。重量は2.5kgである。広端面は2段の削りで、凹面側を面取りする。側面は凸面側を小さく面取りする。焼成は不良で色調はにぶい黄橙または淡黄を呈する。T75の凹面は縦横6本／1cmの布目が見られる。厚さ1.75cm。広端面の形状は1段の削りにより断面はコ字状を呈する。側面の形状は摩滅気味で凹面側にやや丸みをもつが、3段程度のヘラ削りを行なっているようである。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。T76の凹面は縦横8本前後／1cmの布目が側面までまわり込みB技法と推定。側面は凸面側を小さく面取りするのみである。厚さは1.9cm。焼成はやや軟質で、色調は灰を呈する。T77の凹面は縦横7本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。長さ35.9cm、厚さ1.9cmを測る。両端面は1段の削りによりコ字状を呈し、残存する側面はナデにより丸みをもち、凸面側を削りにより面取りする。焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。重量は2.25kgである。

T78の凹面は縦横6本／1cmの布目が見られる。厚さ2.0cm。広端面は1段の削りにより断面はコ字状を呈する。側面は凹面側にやや丸みをもつが、少なくとも2段程度の削りを行なっているようである。焼成は不良で、色調は浅黄橙を呈する。

#### 7種

T79～83の凸面は7～3種である。密に叩くもの（T81～83）と隙間があるもの（T79～80）がある。

凹面の布目が側面にまわり込むものがあり、その他も側面の形状などからB技法と推定する。広端面は1段の削りにより断面はやや凹面側が鋭角をなす。側面はT80を除いて凸面側を削る。



第12図 T79側面

T79の凹面は縦9本、横6本／1cmの布目がある。狭端面は1段の削りでコ字状である。厚さ2.2cm。焼成は不良で、色調は浅黄橙を呈する。T80の凹面は縦横8本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。側面は1段の削りで断面はコ字状を呈する。厚さ2.0cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T81の凹面は縦横7本／1cmの布目と糸切りが見られる。端面間の長さは34.7cmを測る。両端面とも1段の削りにより凹面側が鋭角をなす。側面は2段の削りで、凸面側を大きく削る。厚さ2.2cm。焼成はやや不良で、色調は浅黄である。T82の凸面はタタキを右から左へ行なう。凹面は縦横6本前後／1cmの布目がある。端面間の長さ34.1cm。両端面とも1段の削りで、断面はコ字状を呈する。焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙である。T83の凹面は縦横7本／1cmの布目が見られる。厚さ2.45cm。焼成は良好であり頗る軟質である。

T84の凸面は7-1種。凹面は縦横とも9本／1cmの布目があり、狭端面側には布の巻き取りと思われる痕跡が認められる。狭端面は1段の削りにより断面がコ字状を呈する。側面は2段の削りで、凸面側を大きく削る。厚さは1.75cm。焼成は良好で須恵質である。

#### 丸瓦（T85）

広端面のみ残存。凹面には8本／1cmの布目が見られる。広端面は1段の削りにより断面がコ字状を呈する。広端面の幅は14.2cmである。側面は2段の削りで、凹面側を面取りする。厚さ1.5cm。焼成はやや不良であり、色調は灰または浅黄を呈する。

#### 熨斗瓦（T86・87）

いずれも平瓦を焼成前に切断したもので、凸面は平瓦1-1種と同じである。T86の凹面は縦横10本／1cmの布目があり綴じ目が観察できる。端面と側面は1段の削りにより、断面はコ字状を呈する。平瓦の切断面は未調整である。厚さ1.5cm。焼成は普通で灰白色を呈する。T87の凹面は縦横8本前後／1cmの布目で綴じ目が観察できる。端面と側面は1段の削りにより、断面はコ字状を呈する。平瓦の切断面は切断後ナデを施す。焼成は普通で灰白色を呈する。厚さ2.2cm。

#### 隅平瓦（T88・89）

T88・89とも凸面は1-1種。広端面の右隅を焼成前に切り落とし、右隅平瓦とする。凹面は縦横とも7本／1cmの布目が見られるほか、乾燥時に用いた棒の当たりと思われる痕跡が認められる。厚さは2.2cmである。切り落としは凸面側から刃物を入れ、切り落とし面は不調整である。焼成は良好で、色調は灰白を呈する。T89の凹面は縦・横とも9本／1cmの布目があり、布の綴じ痕が認められる。厚さは2.1cmである。焼成は良好で灰白を呈する。

#### 北溝

##### 軒平瓦（T92）、平瓦（T90・91、T93～104）

T90の凸面は1-2種。凹面は縦14本、横8本／1cm程度の布目があり、中央付近に袋とじの痕跡が残る。また糸切り痕も見られる。広端面と側面とも1段の削りにより断面はコ字状を呈する。厚さは1.4cm。焼成は良好で須恵質である。色調は灰白を呈する。

T91の凸面は2-1類。凹面は縦横9本／1cmの布目が見られる。広端面は削りにより凹面側を取りする。側面は、摩滅が著しいものの、1段の削りによりコ字状を呈する。厚さ2.7cm。焼成は不良であり、色調は灰黄を呈する。

T92は軒平瓦の平瓦部破片で、瓦当といずれの端面も残存しない。凸面は摩滅により調整は不明である。凹面は縦横7本前後／1cmの布目が見られる。焼成は不良で色調はにぶい橙を呈する。

T93の凸面は3種。凹面は縦横6本／1cmの布目が側面にまわり込みB技法。狭端面の断面は1段の削りによりコ字状を呈する。側面は3段のヘラ削りを行い、凸面側を大きく削る。厚さ2.3cm。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。

T94～98の凸面は4-1種。凹面は縦横8本前後／1cm布目が側面にまわり込むことや側面の形状からB技法と推定する。側面は凸面側を大きく削る。両端面とも1段のヘラ削りで断面がコ字状となる。T94の凹面はわずかに糸切り痕が見られる。広端面は凸面側を小さく面取りし、側面は2段の削りを行う。広端面幅27.6cm、厚さ2.3cmを測る。焼成は不良で色調は浅黄橙を呈する。T95の側面は2段の削りを行う。厚さは1.95cm。焼成は良好で須恵質である。T96の狭端面の断面は凸面側がやや鋭角をなす。厚さは1.8cm。焼成は良好で須恵質である。T97の側面はやや丸みをもち、布目をナデ消す。凹面側で1回、凸面側で小さく2段の面取りを行なう。厚さは2.1cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈す



第13図 T98凹面

る。T98の凹面は側端面と平行して溝状のくぼみが巡り、これが布目の端となる。狭端面の形状はヘラ削りによりコ字状を呈する。側面は凹面側を小さく削る。厚さは1.7cmである。焼成は良好で須恵質である。

T99の凸面は5種。凹面は縦横7本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。狭端面の断面は1段のヘラ削りを行い、凸面側が鋭角をなす。側面は2段の削りを施し、凸面側を大きく削る。狭端面幅23.9cm、厚さは1.8cm。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。

T100～102の凸面は7～3種。凹面は7、8本前後／1cmの布目がある。端面は1段の削りにより断面がコ字状となる。側面は凸面側を大きく削る。側面の形状や布目が側面にまわり込むことからB類と推定。T100の凸面は右から左へ叩く。凹面は摩滅のため調整は不明。側面は2段のヘラ削りを行う。厚さ2.0cm。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。T101の側面は丸みをもつ。厚さ2.1cm。焼成はやや不良で色調は灰白を呈する。T102の凹面は縦横8本前後／1cmの布目がある。側面は凹面側を小さく面取りする。厚さ1.65cm。焼成は良好で須恵質である。

T103・104の凸面は7～1種。凹面はいずれも縦横9本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。T103の狭端面の断面は1段の削りによりコ字状を呈する。残存する側面は2段のヘラ削りを行い、凸面側を大きく削る。厚さはT103が2.4cm、T104が1.4cmである。焼成は良好で色調は黒を呈する。

#### 丸瓦（T105）

凸面は摩滅する。凹面は縦横とも8本／1cm程度の布目が見られる。狭端面は幅9.6cmを測り、断面は1段の削りによりコ字状を呈する。側面は狭端面から見て左側面は2段の削りで凹面側を小さく面取りし、左側面は1段の削りにより凸面側が鋭角をなす。焼成は不良で色調は浅黄を呈する。高さ4.75cm、厚さ1.4cmを測る。

#### 熨斗瓦（T106）

凸面は平瓦1～1種と同じ。凹面は縦14本・横10本／1cmの細かい布目が見られる。厚さは2.0cmである。端面の形状はコ字状を呈する。側面はヘラ削りにより凸面側が鋭角をなす。平瓦を切断したもので切斷面は切断後無調整である。焼成は不良で灰白色を呈する。

#### 隅平瓦（T107）

右隅平瓦である。凸面は摩滅しているが、1種と推定する。凹面は縦横6本／1cmの布目が見られる。側面は1段の削りを行なう。広端面の右隅を焼成前に切り落とし、その断面形はコ字状を呈する。焼成は不良であり、色調はにぶい黄橙を呈する。

#### 東溝

#### 平瓦（T108～124）

T108・109の凸面は1～1種。凹面は縦横とも10本前後／1cmの布目が見られる。端面、側面とも1段の削りで断面はコ字状を呈する。T108の厚さ1.5cm。広端面は幅27.2cm、凸面側がやや鋭角となる。焼成は不良で、色調は灰白を呈する。T109は長さ36.0cm。焼成はやや不良であるが須恵質である。

T110・111の凸面は3種。側面は2段の削りで、凹面側を小さく削る。側面の形状からB技法と推定。T110は狭端面の一部を欠く。凹面は摩滅が著しいが、布目が認められる。長さ39.4cm、厚さ2.0cm、広

端面幅27.0cm、重量は3.12kgである。端面は1段の削りで断面がコ字状となる。焼成は不良で、色調は浅黄を呈する。T111の凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。側面は2段の削りで、凹面側を小さく削る。厚さ2.1cm。焼成は良好、須恵質である。

T112の凸面は4-1種。凹面は縦横7本前後／1cmの布目と糸切り痕が見られる。布目は側面までまわり込むことからB類と推定。厚さ2.5cm。広端面の断面形はコ字状を呈する。側面の形状は凹面側にやや丸みをもち、凸面側を大きく削る。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。

T113は小片であり、摩滅している。凸面は4-2種。凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。1段の削りで狭端面の断面はコ字状を呈する。厚さ2.0cm。焼成は不良であり、色調は灰黄を呈する。

T114の凸面は6種。凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。側面は2段の削りで凸面側を大きく削る。厚さ1.8cm。焼成は不良であり、色調は灰白を呈する。

T115の凸面は7-3種。凹面は縦横7本前後／1cmの布目が残る。広端面の幅26.9cm、断面はコ字状を呈する。側面は2段の削りを行ない、凸面側を大きく削る。焼成はやや不良、色調は浅黄橙を呈する。

T116・117の凸面は7-1類。側面は2段の削りで凸面側を大きく削る。T116の凹面は縦横8本／1cmの布目がある。狭端面の断面は1段の削りによりコ字状となる。厚さ2.0cm。焼成はやや不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。T117の凹面は摩滅のため、布目などは確認できない。厚さ2.2cm。焼成は不良で、色調は灰白を呈する。

#### 丸瓦（T118）

凹面は縦横8本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。側面は2段の削りで凸面側が鋭角をなし、凹面側を小さく削る。狭端面幅10.2cm、高さ5.5cm、厚さ1.3cmを測る。焼成は良好、色調は灰を呈する。南溝

#### 平瓦（T119~124）

T119・120の凸面は4-1種。側面は凸面側を大きく削る。その形状や布目がまわり込むことからB技法と推定する。T119の凹面は縦横8本前後／1cmの布目がある。狭端面の断面は1段の削りによりコ字状を呈する。側面は凹面側が未調整である。厚さ2.2cm。焼成は不良で色調はにぶい橙を呈する。T120の凹面は縦横6本前後／1cmの布目が見られる。端面は残存しない。側面は2段の削りを施す。厚さ1.5cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。

T121の凸面は5種。凹面は縦横7本／1cmの布目が側面までまわり込みB類と推定する。端面は残存しない。側面は凸面側に1段削る。厚さ1.7cm。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。

T122・123の凸面は6種。凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。側面の形状からB技法と推定する。T122の端面は残存しない。残存する側面は2段の削りを施す。厚さ2.0cm。焼成はやや不良で色調は灰黄を呈する。T123の狭端面は1段の削りにより断面がコ字状を呈する。側面は1段の削りを施す。厚さ2.2cm。焼成は不良で色調はにぶい黄橙を呈する。

T124 端面、側面ともに残存しない破片である。凸面は7-2種。凹面は摩滅のため調整は不明である。厚さ1.8cm。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙を呈する。

#### 軒丸瓦（T125）

丸瓦部である。瓦当部は残存しないが、瓦当側の端面は凹凸面とも補充粘土の痕跡が残存している。凹面は縦横8本前後／1cmの布目が見られる。残存長30.7cm、厚さ1.6cmを測る。

#### 丸瓦（T126）

凹面は布目が見られる。端面は残存しない。側面は2段の削りを施し、凹面側を小さく削る。厚さ1.7cm。焼成は良好で須恵質である。

SX01周辺出土

平瓦（T127～129）

T127の凸面は6種。凹面は縦横8本／1cmの布目と糸切り痕が見られる。端面は残存しない。残存する側面は2段の削りを行ない、凸面側は小さく削る程度である。

T128の凸面は7～3種。凹面は縦横7本／1cmの布目がある。狭端面は1段の削りを行い断面はコ字状を呈する。側面は残存しない。厚さ2.5cm。焼成はやや良好で、色調は灰を呈する。

T129の凸面は7～1種。凹面は縦横9本前後／1cmの布目がある。厚さ1.8cm。側面は凸面側を大きく削り、凹面側は小さく2段削る。焼成は良好で須恵質である。

丸瓦（T130）

凹面は縦14本、横10本／1cmの布目がある。側面は2段の削りを行なうが凹面側になされたものは小さく部分的に削るだけで狭端面まで達していない。厚さ1.9cm。焼成は良好で須恵質である。

## 第5章　まとめ

### 第1節　出土遺物

出土した土器には、鉢や灯明皿とされる器種、壺などに志方窯跡群に類例が求められるものがある。

瓦は既知の軒丸瓦の他に新規の1例が出土した。出土した瓦の中でも凸面の調整が特徴的なものに平瓦の2種と7-3種がある。前者は小野市広渡庵寺、新部庵寺、加西市繁昌庵寺および繁昌庵寺に隣接した瓦窯跡に出土例があり、加古川中流域で活動した工人集団と共通性を見出せる。また後者は、加古川市西条庵寺、溝之口遺跡に出土例があり、比較的狭い範囲で行動した工人集団と考えられる。

### 第2節　遺構の性格

#### 1. 寺域の範囲

第14図は塔・金堂の中軸線を基準に約10尺のメッシュで区切ったものである。

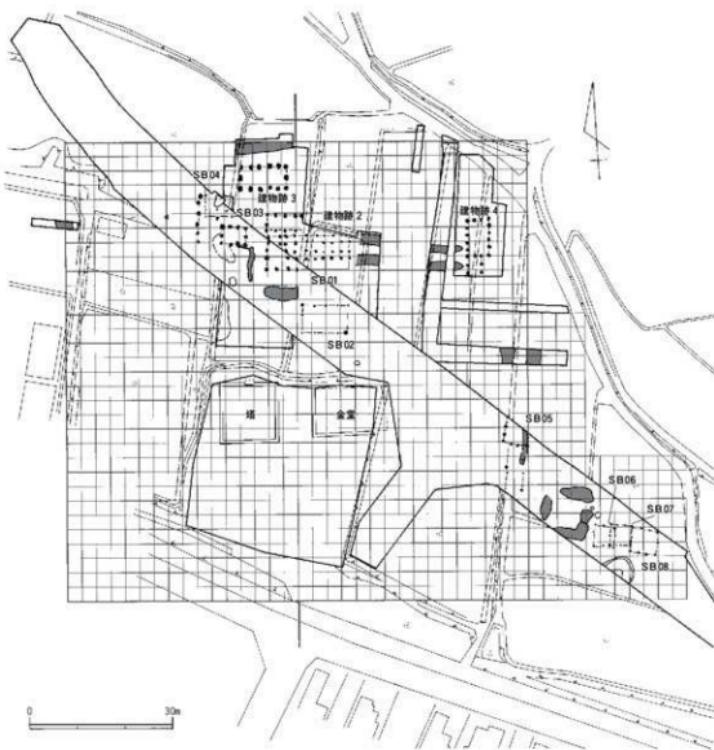
第3次調査では検出した南北方向の溝を西限、東西方向の溝を北限と推定している。今回の調査では、推定北西隅は調査区外となるが、北限については、溝など顯著な遺構は認められなかった。これは当該箇所が、削平も著しいためもあるが、地形が傾斜することが大きいと思われる。ただし建物群を検出したすぐ西側で南北方向の柱穴列（SA01）を検出している。これは寺城の中軸線から西へ70尺、塔跡西辺から20尺にはば合致する。この西側には遺構が見られなかったことから、SA01が柵となり実質的な寺城の西限になると考える。

東限は、推定線にはば重複する位置で溝1条、柱穴列（SA02・03）、掘立柱建物（SB05）を検出している。この柱穴列が、築地の芯柱あるいは築地塀に代わって設けられた柵になるものと思われる。この柱列は調査区の中程で途切れSB05が続く。柵、掘立柱建物は寺城の示す方向よりも若干西に偏る傾向にあるが、これは寺城東限付近が中軸部と谷状地をはさみ、別の微高地上に位置するからと思われる。溝は場整備前の水田畦畔の方向にはば合致、その延長上には第3次調査で検出された溝2条があり、これに統くであろう。SB05は推定寺城の南北距離の中央よりやや南に位置し、その東辺は寺城東限線と合致、南側梁柱の通りは塔基壇の南辺にはば並び、計画的に配置されていることがわかる。SB05は東限線上の遺構となることから、東門に相当する施設と考える。後に記述する寺城東側の遺構群との関係においても、東門と考えることが最も妥当ではないかと思われる。中門との関係であるが、第2次調査において、中門に相当する遺構は検出されず、南限となる柵の柱間隔が一部広くなるのみで、この部分に開閉装置を取り付けた施設を推定している。そうすると寺城南限の施設より東限の施設が整うこととなる。SB05が東門とするならば、寺城の南側よりも東側を重視しているのかもしれない。

#### 寺域内の建物

今回の調査では4棟、第3次調査では3棟の建物を検出している。いずれも掘立柱建物であり、基壇や礎石建物は認められない。

SB01は建物の一部を検出しただけだが、第3次調査で検出分と合わせると、東柱を伴う梁間4間×桁行9間の東西建物を復元することができる。建物の中軸は寺城の中軸よりやや東にずれるが、西から3列目の柱穴の並びは寺城中軸線と合致し、西側梁柱の通りは寺城中軸線より西へ20尺の線と合致する。また南辺は寺城南北の中軸線よりも北へ70尺の線と合致する。梁間柱列のうち最南部の1間分は柱間が他よりもかなり広い造りとなり、この部分が通路と想定する。このような構造や検出した位置からSB01は僧坊と推定する。僧坊の場合、部屋に採光を得る必要から通路は北側に設けられるが、本遺跡の場



第14図 石守庵寺寺域と主な遺構

合には南に向かって地形が高くなるため、採光を得やすい北側に部屋を配し、柱穴の配置から4室前後の房に分けられていたと考えられる。

SB02は最も削平著しい箇所に立地し、柱穴もその底付近が残存するのみである。東西棟で西側梁柱の通りは寺域東西の中軸線よりやや東側、南北辺は寺域南北の中軸線より30尺と50尺の線と合致する。検出位置からSB02は講堂の可能性もあるが、塔、金堂よりも1m以上下がっている。大規模な削平が行われているため、明確にしない。柱穴からはまとまった瓦片の出土があり、瓦葺建物であった可能性は否定できない。

SB03・04は小型の建物であり、重複する遺構SK02から織の羽口や鉄滓、煮沸具などの土器が出土し、鍛冶などの工房、炊事などを行なう施設であったと考える。

このように塔と金堂からなる寺域中枢部は厳然たる寺院として認識できるが、その周辺の建物とは大きな格差を感じる。明瞭な区画する遺構こそ検出していないが、南側の段丘から続く部分のみ柵により区画し、残る3方は約1m程度の自然の段丘崖が区画の代用とされ、その他の部分と隔てていると思わ

れる。また推定講堂と推定僧坊の間は溝によって区画されていたようではあるが、宗教活動と日常生活が混在した空間であったようである。この空間からは煮沸具、貯蔵具などの遺物も出土していることから、僧侶が常駐し宗教活動を行っていたと推定される。

#### 寺域東側のSX01について

SX01は方形に巡る溝に区画された遺構であり、溝から多量の瓦が出土している。遺構の性格について考察してみたい。また出土した瓦は、他所から移動したものではないと考え、簡易的ではあるが数量をカウントし、遺構の復元を行ないたい。

溝によつた囲まれた区画は、ややずれはあるものの東西は寺域東限線から20尺と40尺、南北は南限線から50尺と70尺程度で、寺域とほぼ同一の区画で構築されたと考えられる。

溝内からは大量の瓦が出土し、区画内部には瓦葺きで土壁のある建物が存在したと推定するが、調査においては、区画内部で柱穴や礎石、基壇の痕跡は認められなかった。ただし区画内部の遺構面では火熱による赤化面を検出しているので、上面が極端に削平されているとも考えがたい。

溝ごとの出土した破片数とその重量は下記のとおりである。

#### 西溝

軒丸瓦、丸瓦：25点（6,900g）うち瓦当部3点、平瓦136点（63,380g）、熨斗瓦：2点（1,080g）

#### 北溝

軒丸瓦：7点（1,580g）うち瓦当6点、軒平瓦：6点（5,110g）うち瓦当1点、丸瓦：14点、平瓦：139点（34,860g）隅平瓦を含む

#### 東溝

軒丸瓦、丸瓦：16点（3,910g）うち瓦当5点、平瓦：137点（44,910g）

#### 南溝

軒丸瓦、丸瓦：8点（うち瓦当1点、平瓦：89点（17,280g）

#### 遺構検出時など

軒丸瓦：4点（800g）、丸瓦：3点（1,100g）、平瓦：30点（8,640g）

#### 合計

平瓦：531点（169,070g）

軒丸瓦、丸瓦：63点（うち瓦当部15点）

熨斗瓦：2点

出土点数の多い平瓦のうち、近完形の瓦は西溝出土のT69があり、重量は4,350gである。出土遺構は異なるが近完形の瓦にSK01出土のT23は3,220gであり、この2点を平均すれば3,785gとなり、これが1枚あたりの重量と仮定し、単純にこの重量で平瓦の合計重量を割れば44,668個、T23の重量を採用すれば最大で53枚程度となる。屋根の構造は不明ながら、単純な切妻と仮定すれば屋根1辺あたり26枚程度ということになる。出土瓦のうち、完存する狭縫面の幅は22~24cmあり、上記の1辺に使用する瓦の枚数をかけると屋根の規模は5.7~6.2mとなり、ほぼ区画の長さに近い数値となる。しかしこの数値は出土した平瓦を横一列に並べるだけであり、たとえ上面を削平されると仮定してもこの数字は総瓦葺きにはほど遠いものであり、建物の軒先に瓦を葺いただけの建物を想定せざるをえない。

丸瓦と瓦当の比率は55：15であり、丸瓦としたものの中でも軒丸瓦の一部が混じるとすれば、軒丸瓦の比率はさらに高まると思われる。

鬼瓦や道具瓦の出土がほぼ皆無であること、この建物が総瓦葺きでなかったことを物語っているの

かもしれない。想像力をたくましくすれば、溝に開まれた区画内には、東西棟の切妻屋根、土壁の建物で、軒先にのみ瓦を使用していたと推定する。造構面に建物の基礎部分の痕跡をとどめないことは、重量ある屋根を支える必要がなかったからかもしれない。炭・焼土などが溝埋土内にも含まれることから区画内部の建物は焼失したものと考えられる。

想定される建物は、小型で総瓦葺きとは考えにくいが、寺域内の建物でも明確に溝で区画されたものは確認されておらず、寺域外に位置するとしても特別な施設であったことは間違いないと考える。

### 第3節 石守廃寺の立地

先にも述べたように、石守廃寺は日岡段丘の北側に位置する。石守廃寺の立地を周辺の寺院の立地をみると、山陽道に面するか眺望できる野口庵寺や中西庵寺、加古川に面するか眺望できる西条庵寺、山角庵寺に大別できる。これに対し、石守庵寺は古代山陽道や賀古郡衙推定地からの眺望是不可能であり、近隣の西条庵寺のように加古川からの眺望も良好とはいえない場所である。

また寺域から南面しても日岡段丘の稜線によって眺望もない。日岡段丘と加古段丘に挟まれた曇川沿いの空間を占有するのみである。しかしこの空間は今日の(一)大久保平莊線が東西に通過するように段丘間の谷平野が古代より内陸部の交通路となっていた可能性がある。

播磨国風土記「鶴波里」の条に「此里有舟引原。(中略) 於是、往來舟、悉留印南之大津江、上於川頭、自賀意理多之谷引出而、通出於赤石郡林潮。故曰舟引原。」(『風土記』新編日本古典文学全集5

小学館 1997年)との記述がある。これによれば「舟引原」の地名は、荒れる播磨灘を避け賀古郡と赤石郡を結ぶルートとして、「印南之大津江」より加古川を北上し、「賀意理多之谷」を経て「赤石郡林潮」に至るルートに由来するという。この記述が歴史的事実に基づくならば、加古川より左岸側の支流をさかのぼり、さらに東部に広がる段丘を経て赤石郡に至る内陸ルートが存在したことになる。「賀意理多之谷」の比定地は不明だが、「舟引原」は加古郡福美町六分一の小字「船引」に比定する意見もある。六分一付近は加古川の支流である曇川水系国安川と播磨灘へ南流する喜瀬川の分水界となり、さらに東には喜瀬川と平行して播磨灘へ南流する瀬戸川がある。小字「船引」を「舟引原」の遺称地とするならば、「賀意理多之谷」は曇川流域の谷平野を指す地名である可能性は高い。そうした場合、曇川流域は播磨灘の海上交通の代替となる交通路となる。そして石守庵寺は、そのルート沿いに建立された可能性がある。寺域の東側は曇川に面することから、寺域の中核部である塔・金堂は形式的に南面を意識しながらも、寺域自体は実質的に曇川に面する東側を重視し、そのため寺域東側にSX01などの施設を伴っていたと推定する。今回の調査は寺域の一部分を明らかにしただけであり、飛躍した発想かもしれない。今後石守庵寺の調査の進展や類例の増加を期待したい。



第15図 加古郡周辺の寺院と官衙

## 第6章 SX01で検出された焼土の考古地磁気年代

兵庫県立大学大学院生命理学研究科

森永 速男

### はじめに

土壤中に含まれる磁性鉱物（酸化鉄や水酸化鉄）は堆積時の地球磁場情報（強度と方向）を記録する。この磁化（磁場の化石）を堆積残留磁化と呼ぶが、磁気的には不安定な場合が多く、磁場記録としての信頼性は低い。堆積後に、土壤が何らかの過程（例えば、古代人の焚き火など）で熱を受けると、土壤中の磁性鉱物は化学的に変化したり（主に水酸化物から酸化物に）、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういう過程を経て、土壤は堆積時よりもかなり大きい強度でより安定な残留磁化（熱残留磁化）を示すようになる。その残留磁化の方向は、堆積時よりもさらに正確に、受熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壤が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つようになることを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究（考古地磁気学）が行われてきた。その成果として、過去2,000年間の地球磁場方向変化のはば連続した考古地磁気標準曲線が作成されている (Hirooka, 1971, 1983; Maenaka, 1990)。この曲線と年代のわからない焼土の残留磁化方向を比較することによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの（土器編年など）であるということである。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。

### 試料採取と磁化測定

SX01で確認された焼土範囲から計30個の焼土試料を、また比較検討用に焼土範囲外から計10個の一般土壤試料を、磁気コンパスを用いて定方位で採取した。採取試料は約7cm<sup>3</sup>のポリカーボネイト製の立方体容器を用いて採取された。残留磁化測定にはスピナー磁力計を、二次的な磁化の除去には交流消磁法を用いた。2個のパイロット試料（6と16）を用いて30mTまでの段階交流磁場消磁を実施し、残留磁化の安定性を検討し、また二次磁化（粘性残留磁化）が除去される交流磁場レベルを検討した。その結果、決定された最適磁場レベルで一律に残りの試料を消磁し、その処理前後（消磁前後）の残留磁化を測定した。また、MS2帯磁率計を用いて採取試料の帯磁率も測定した。

### 磁化測定結果および考察

パイロット試料を用いた段階交流消磁の結果を第1図に示す。パイロット試料はほぼ安定な挙動を示しているが、減衰パターンが直線的ではなく最適消磁レベルを一律に決定するのは難しい。しかし、処理を簡便にするために残り試料を6mTの交流磁場レベルで消磁することにした。

交流消磁前後の各試料の残留磁化強度・方向（偏角と伏角）および帯磁率、さらにそれらの平均値を第1表にまとめた。また、焼土試料および一般土壤試料の消磁前・後の残留磁化方向をそれぞれ第2図と第3図（ともに左が消磁前、そして右が6mTの交流消磁後の試料の残留磁化方向）に示した。

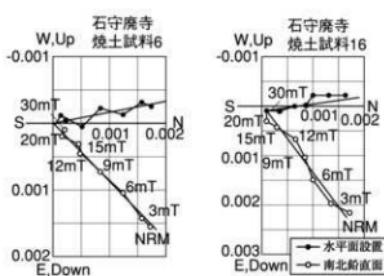
第1表、第17図および第18図からわかるように、焼土試料は大きな強度で、かつ方向値がよくそろっ

第1表 残留磁化、帯磁率測定結果のまとめ

試料	重量 (g)	重量当帯磁率 (10E-8 SI)	交流消磁前			6 mT 交流消磁後		
			偏角 (°)	伏角 (°)	磁化強度 (Amm/kg)	偏角 (°)	伏角 (°)	磁化強度 (Amm/kg)
<b>焼土試料</b>								
I1	9.13	27.16	-15.4	52.0	0.0002377	-20.3	48.5	0.0001765
I2	9.13	25.30	-15.3	51.0	0.0002245	-17.1	49.8	0.0001689
I3	11.35	26.61	-10.9	57.7	0.0002581	-12.8	52.7	0.0002121
I4	10.43	27.61	-12.9	56.0	0.0002675	-18.7	54.0	0.0002183
I5	10.54	23.72	-13.3	55.3	0.0002410	-9.6	56.8	0.0001881
I6	9.38	26.01	-11.6	42.9	0.0002228	-6.7	40.5	0.0001738
I7	10.33	27.30	-13.7	51.8	0.0002711	-14.7	51.5	0.0002144
I8	9.93	31.22	-2.7	52.2	0.0003313	-8.4	54.2	0.0002766
I9	10.99	24.84	-9.2	54.4	0.0002429	-12.8	50.6	0.0002000
I10	10.49	25.36	-5.8	51.4	0.0002450	-7.0	51.5	0.0001924
I11	9.35	25.03	-16.0	51.1	0.0002075	-19.8	47.5	0.0001613
I12	9.21	26.17	-6.7	51.1	0.0002486	-4.9	50.8	0.0001885
I13	9.76	28.59	-18.8	48.6	0.0002633	-19.2	49.1	0.0002041
I14	10.91	29.15	-19.5	55.3	0.0002374	-19.2	54.3	0.0001756
I15	11.11	27.72	-12.5	54.5	0.0002340	-11.9	50.7	0.0001838
I16	10.07	27.90	-10.8	57.3	0.0002354	-12.3	56.1	0.0001817
I17	9.67	28.96	-4.3	54.1	0.0002627	-7.2	53.3	0.0001958
I18	9.62	28.07	-7.8	57.3	0.0002391	-9.0	52.3	0.0001767
I19	7.48	28.07	-26.7	57.2	0.0002299	-14.9	55.9	0.0001710
I20	8.85	27.68	-6.0	57.1	0.0001966	-8.3	50.6	0.0001523
I21	10.42	25.43	-8.0	53.4	0.0002207	-3.0	57.0	0.0001522
I22	10.43	25.12	-9.7	52.0	0.0001879	-23.1	50.9	0.0001336
I23	9.83	25.03	-17.4	58.1	0.0001882	-20.0	50.0	0.0001494
I24	11.28	23.76	-17.4	56.9	0.0001826	-13.0	57.9	0.0001253
I25	9.78	28.32	-17.6	54.2	0.0002403	-11.7	49.7	0.0001820
I26	8.52	28.40	-13.8	58.4	0.0002688	-12.1	60.5	0.0001904
I27	10.18	27.80	4.1	54.5	0.0002515	-2.2	51.7	0.0001936
I28	10.91	22.73	-11.2	59.3	0.0001696	-8.5	57.7	0.0001206
I29	11.40	25.44	-11.2	49.7	0.0002254	-19.6	48.7	0.0001661
I30	9.67	23.78	-13.2	50.8	0.0002099	-13.9	51.7	0.0001487
平均		26.61	-11.8	54.0	0.0002347	-12.8	52.3	0.0001791
			$k = 268.3$	$\alpha_{\pm} = 1.6(2.7)^*$		$k = 241.4$	$\alpha_{\pm} = 1.7(2.8)^*$	

## 一般土壤試料

I31	5.90	11.19	22.2	61.2	0.0000288	21.0	65.0	0.0000130
I32	10.40	13.17	27.7	68.9	0.0000292	12.0	59.8	0.0000133
I33	10.31	13.29	-2.3	57.0	0.0000467	12.0	52.9	0.0000262
I34	8.42	15.56	-11.3	76.4	0.0000510	-3.9	65.7	0.0000302
I35	8.04	14.18	-4.3	56.3	0.0000502	-1.3	51.6	0.0000293
I36	7.35	10.34	-1.7	50.2	0.0000264	23.1	47.4	0.0000145
I37	9.17	13.09	-10.3	55.0	0.0000326	3.5	59.2	0.0000148
I38	9.50	14.21	22.1	72.2	0.0000402	23.3	59.9	0.0000228
I39	8.16	15.32	5.3	68.4	0.0000384	-9.5	58.8	0.0000195
I40	9.38	12.90	-8.5	55.4	0.0000405	14.4	64.6	0.0000189
平均		13.32	2.3	62.7	0.0000384	9.7	59.0	0.0000203
			$k = 56.2$	$\alpha_{\pm} = 6.5(14.2)^*$		$k = 88.2$	$\alpha_{\pm} = 5.2(10.1)^*$	



第16図 バイロット試料(6と16)の段階交流消磁結果

によれば、被熱程度（温度×時間）と磁気的性質（以下、磁性；帯磁率や残留磁化強度など）は正の相関を示すことがわかっている。つまり、被熱程度が高いほど土壤の磁性がより大きな値を示すようになり、新鮮な火山灰など一部を除いて、この正相関が成立することが知られている（Morinagaほか、1999）。帯磁率を横軸に、残留磁化強度を縦軸にとって、石守庵寺の40個の土壤試料の磁性を第4図に示す。これまでの研究で認められた正相関（右肩上がりの傾向）が焼土試料に認められる。また、この傾向は焼土と一般土壤の間で明瞭に異なり、焼土の方がより磁性の大きなところに分布している。

#### （考古地磁気年代決定）

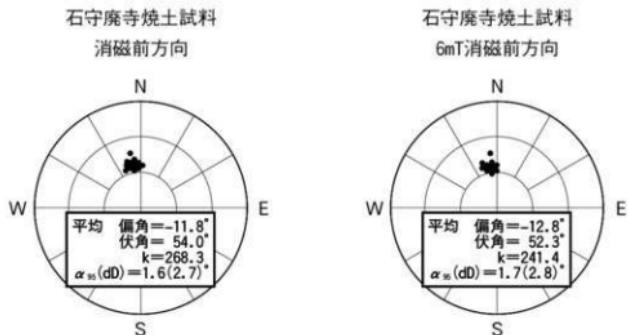
焼土試料の交流消磁後の平均残留磁化方向は、偏角=−12.8°、伏角=52.3°（ $k=241.4$ 、 $a_{95}$ （dI=伏角誤差）=1.7°、dD（偏角誤差）=2.8°）であった。この平均方向と標準的な考古地磁気曲線（Mae naka、1990）との比較を第5図に示す。95%の信頼範囲（ $a_{95}$ 、95%の確率で真の値が含まれる範囲）と標準曲線の重なりから対応を搜すと、考古地磁気学的には西暦550年～600年頃、750年～800年頃、875年頃、そして1000年～1025年頃という年代が得られる。平均値と標準曲線の重なり程度から、これらのうち、前者2年代区間（西暦550年～600年頃、750年～800年頃）が同程度に可能性が高い。

#### 引用文献

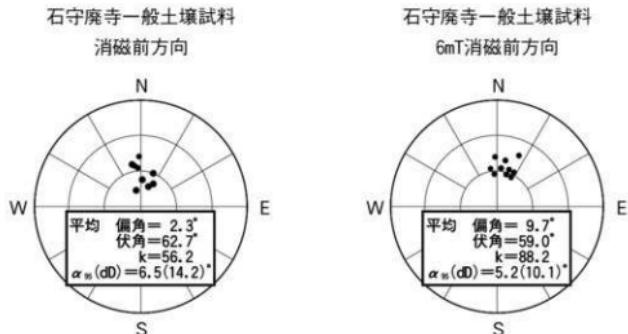
- Hirooka, K., 1971. Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan. *Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.*, 38, 167–207.
- Hirooka, K., 1983. Results from Japan, in *Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments*, eds. Creer, K. M. et al., 150–157, Elsevier, Amsterdam.
- Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan. *Rock Mag. Paleogeophys.*, 17, 21–25.
- Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., 1999. Magnetic detection of heated soils at paleolithic sites in Japan. *Geoarchaeology*, 14(5), 377–399.

たの残留磁化を持っている（信頼度パラメータ： $k$  が大きく、95%の信頼度限界： $a_{95}$  が小さい）。一方、一般土壤試料はそれとは対称的に、強度が小さく、分散の大きな方向値を示す残留磁化を持っている。このことは、これまでの研究でよく知られていること、すなわち被熱が残留磁化（堆積起源-堆積残留磁化）をより大きな強度でより方向の揃った、すなわち安定な磁化（熱起源-熱残留磁化）に変えるということを如実に示している。

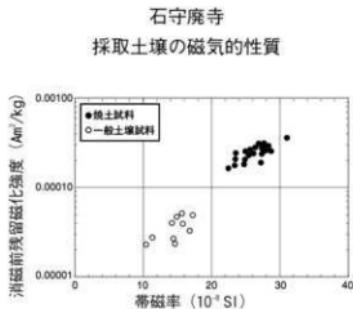
さらに、これまでの研究（たき火実験）



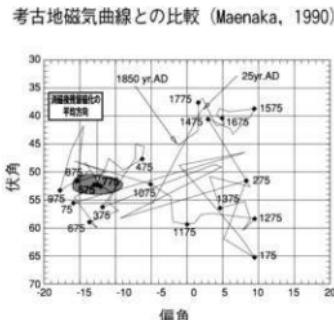
第17図 焼土試料の交流消磁前（左）および消磁後（右）の残留磁化方向。



第18図 一般土壤試料の交流消磁前（左）および消磁後（右）の残留磁化方向。



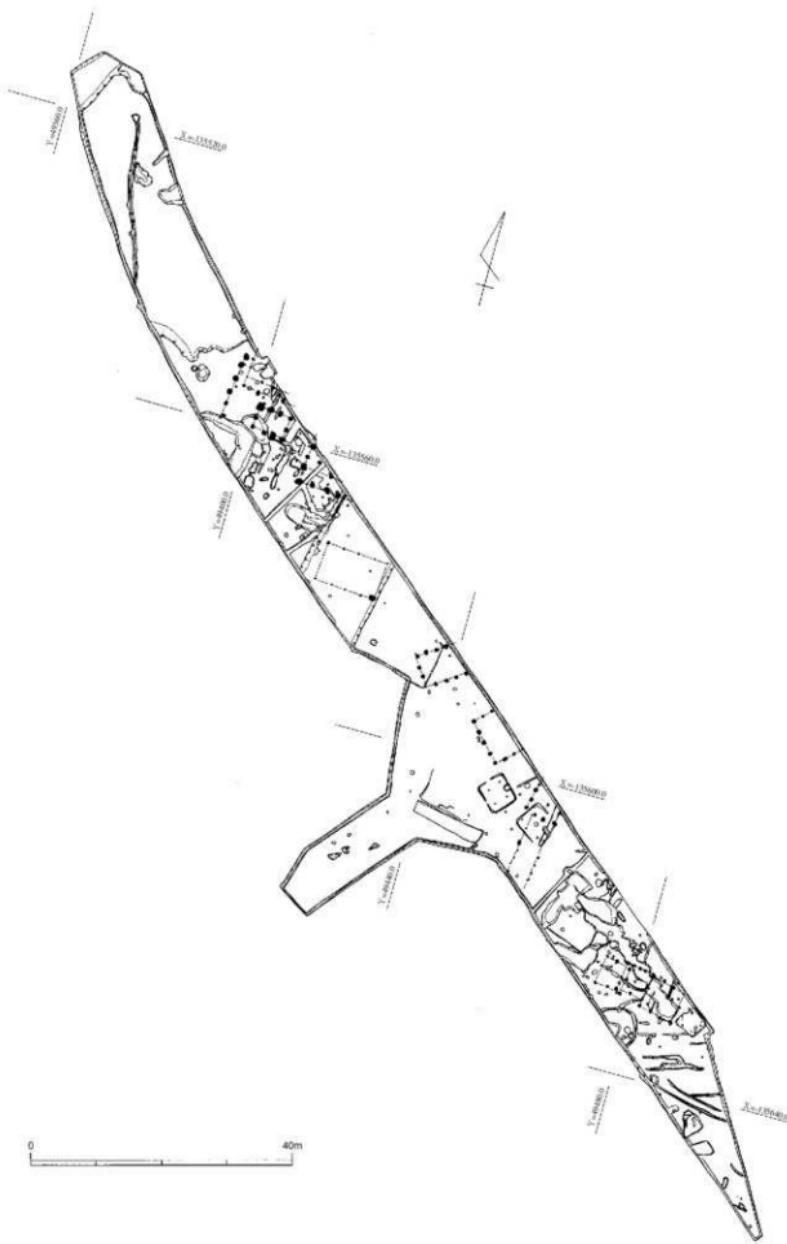
第19図 採取土壤の磁気的性質  
(帯磁率と残留磁化強度の関係)



第20図 平均残留磁化方向と標準考古地磁気曲線  
(Maenaka, 1990)との比較

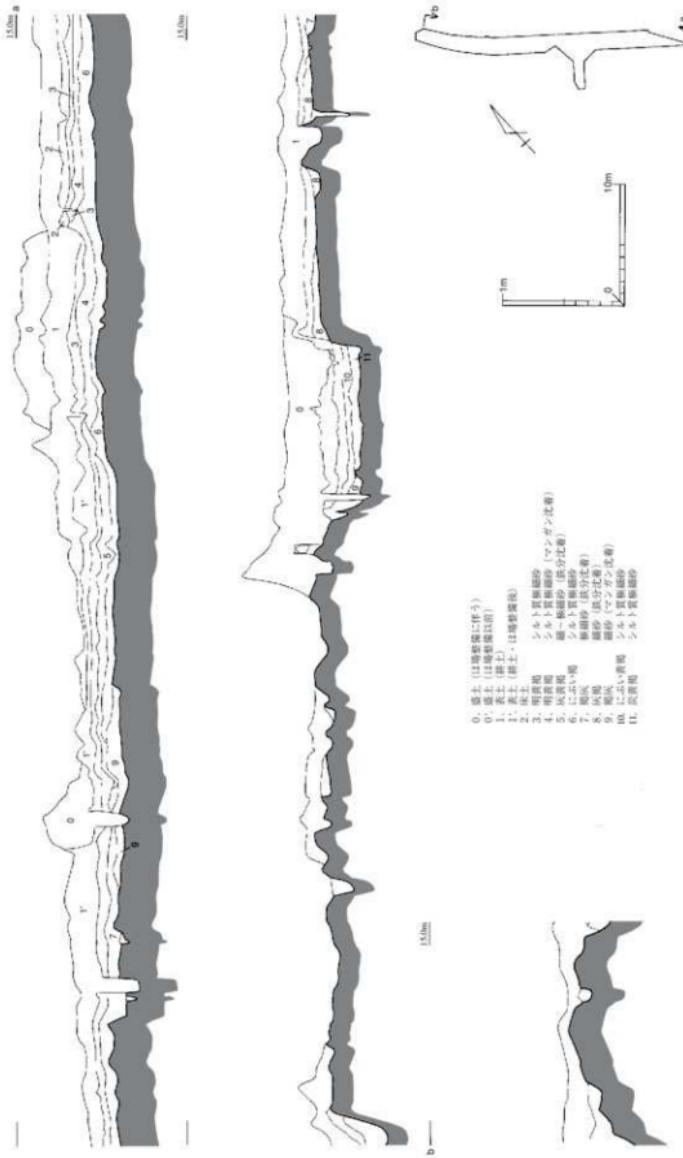
# 図 版



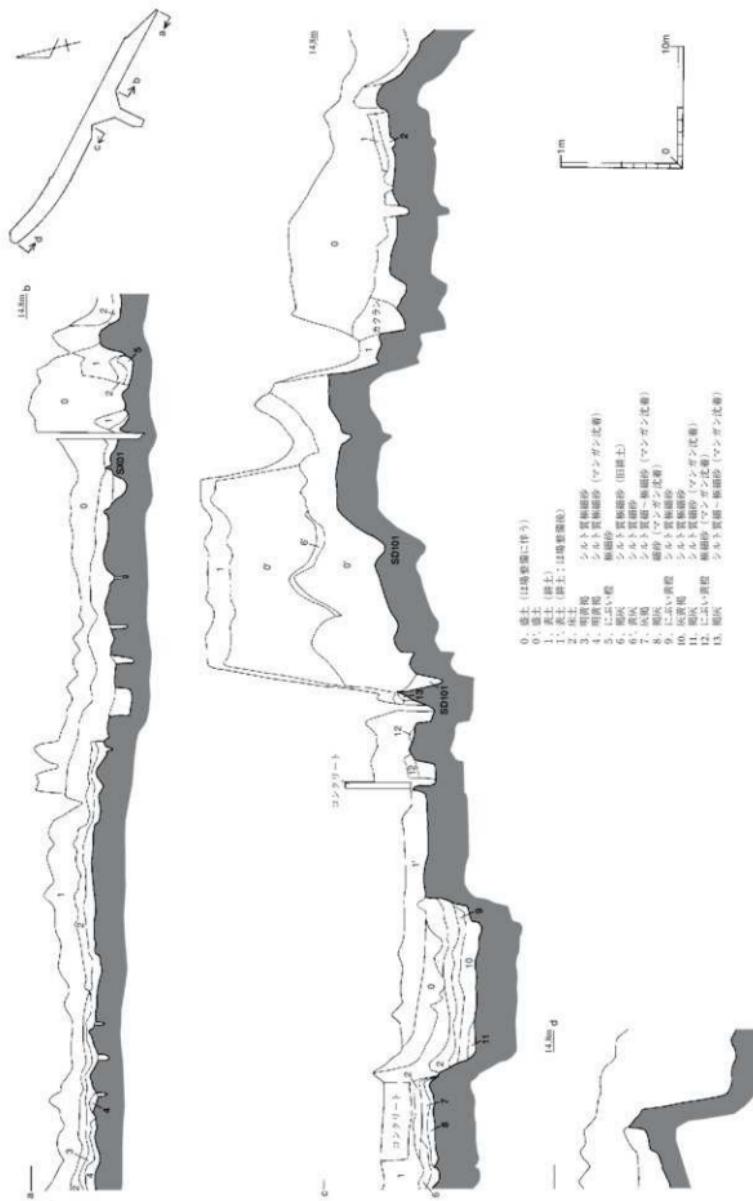


調査区全体図

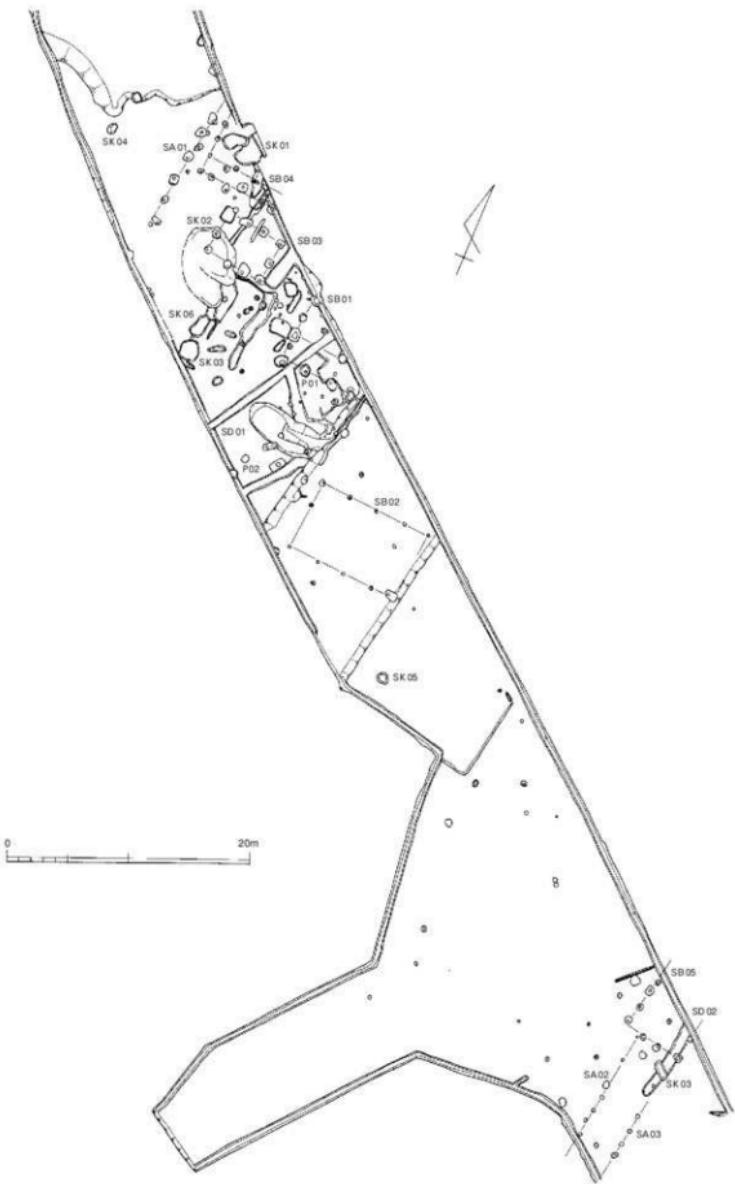
図版 2



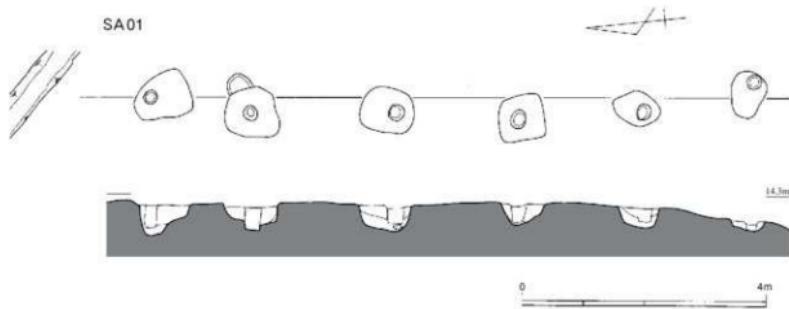
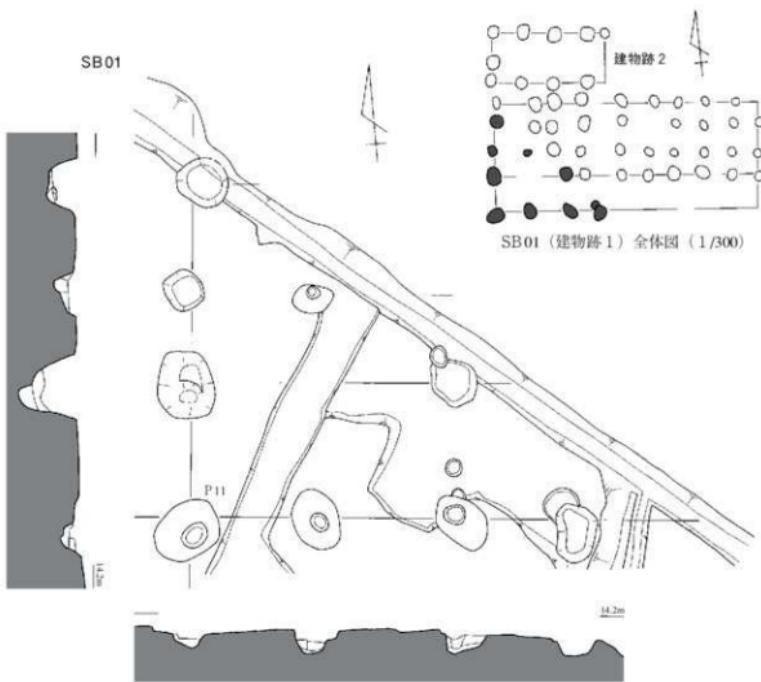
面断壁区北側調査



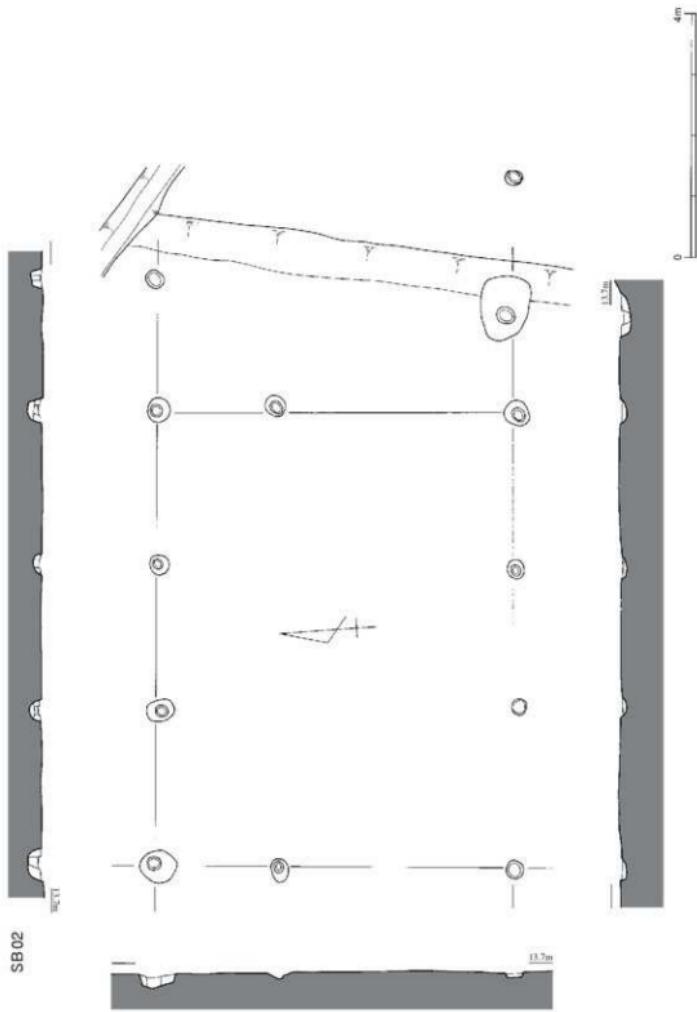
調査区南壁断面



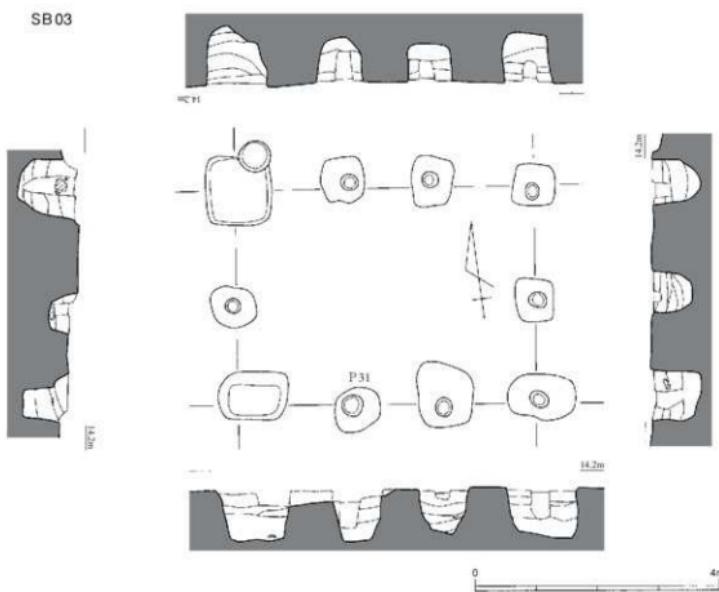
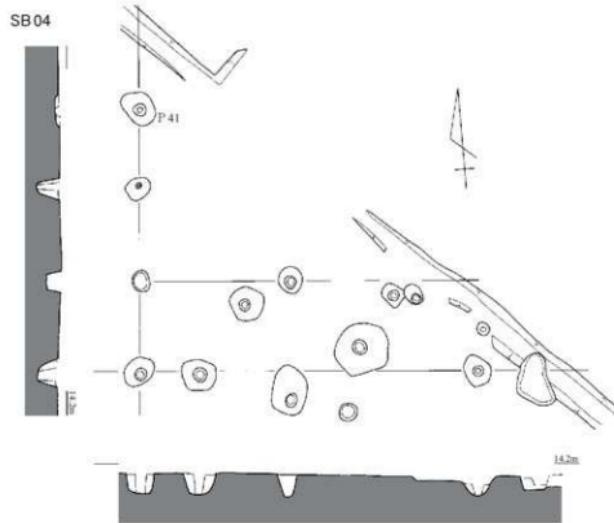
寺域内全体図



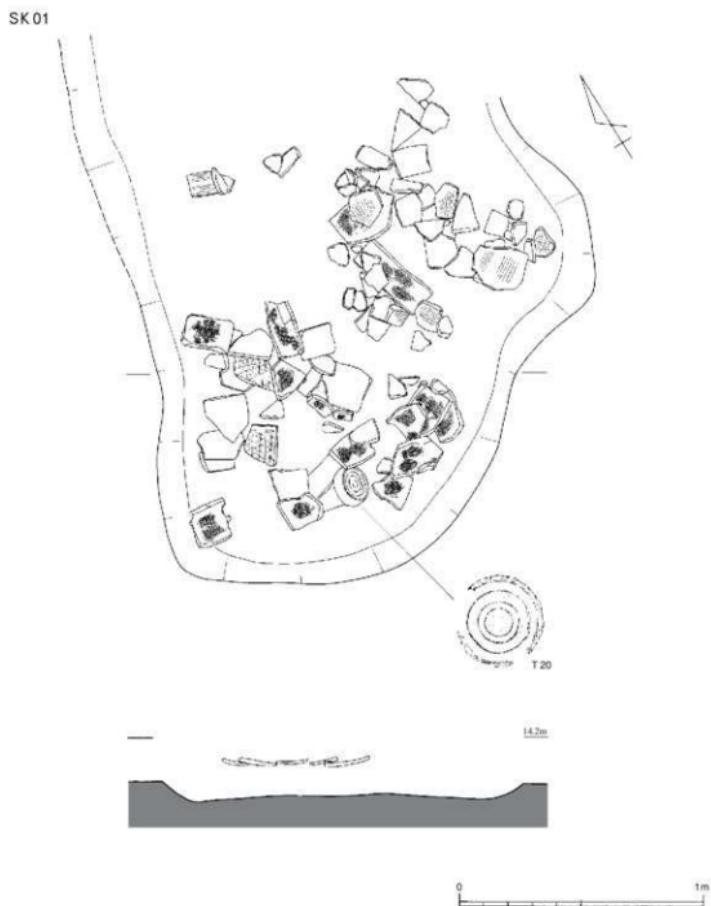
寺域内の遺構(1)



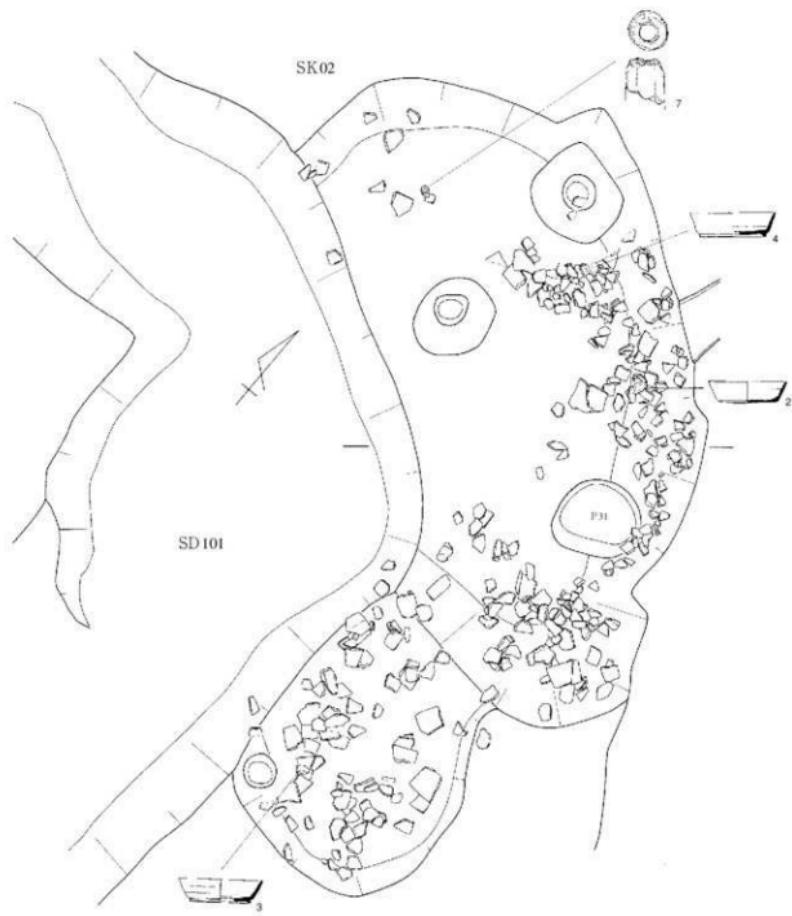
寺域内の遺構(2)



寺域内の遺構(3)



寺域内の遺構(4)



1. 7.SYR6.6 砂  
2. HOY6.4 にほい青板 細砂  
3. HOY5.6 青板 細砂



寺域内の遺構(5)

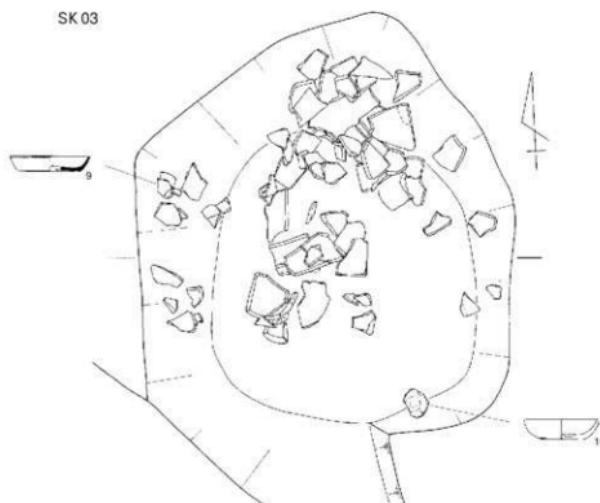
SK 05



14.8m



SK 03



14.2m

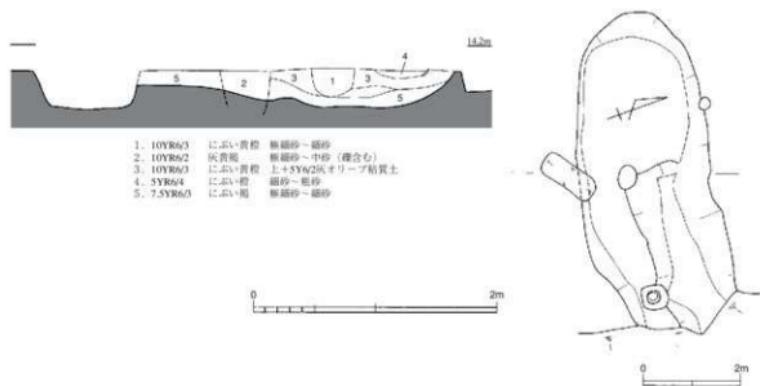


1. 7.5YRS/4 11.5m・周 シルト質細砂

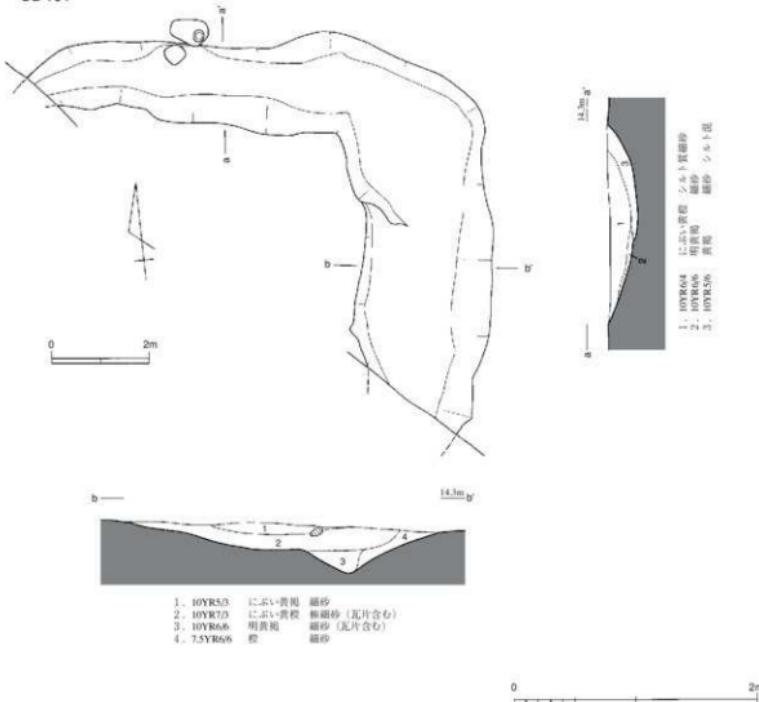


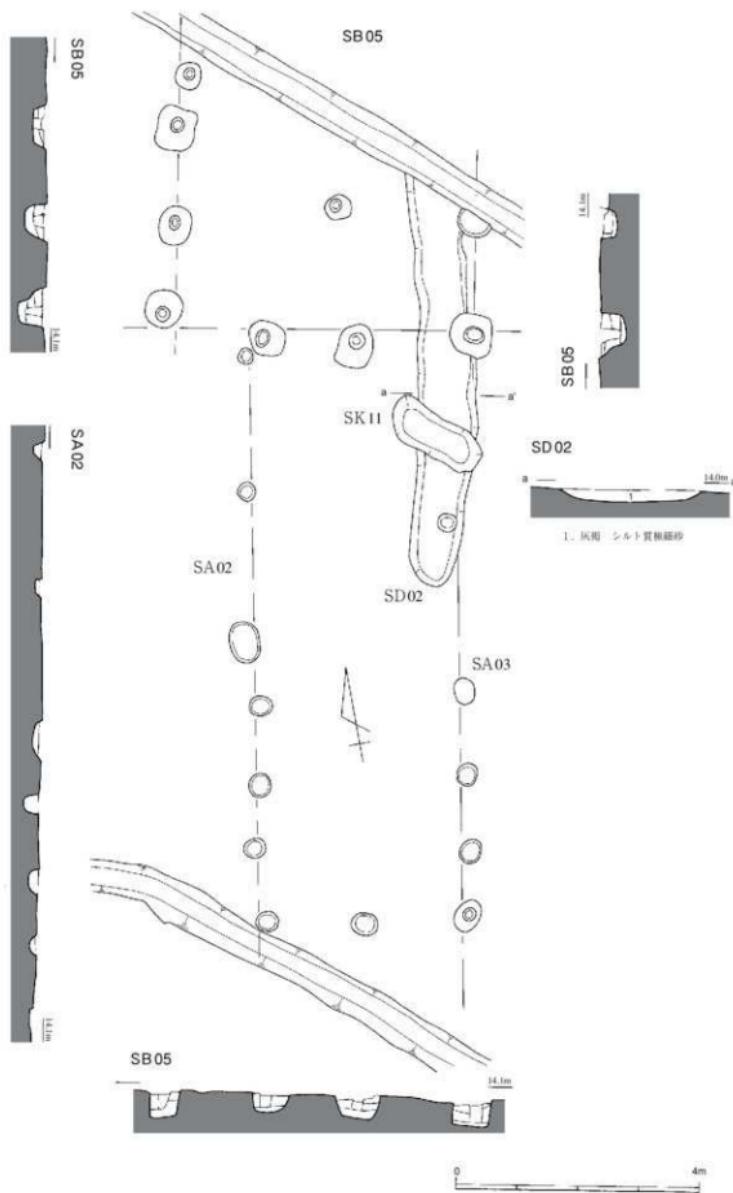
寺域内の遺構(6)

SD01

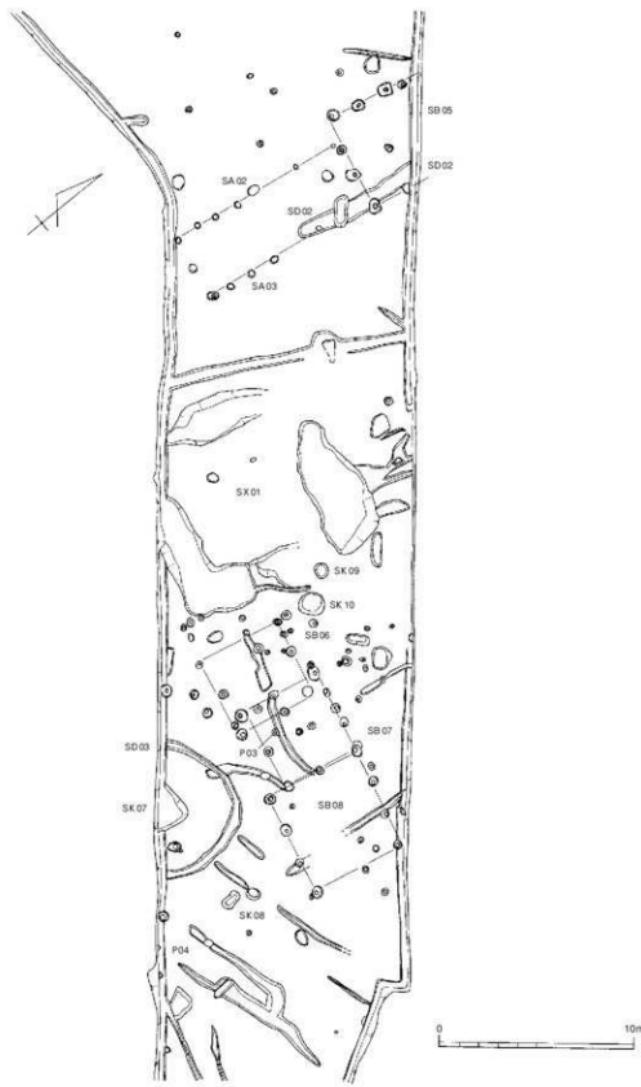


SD101

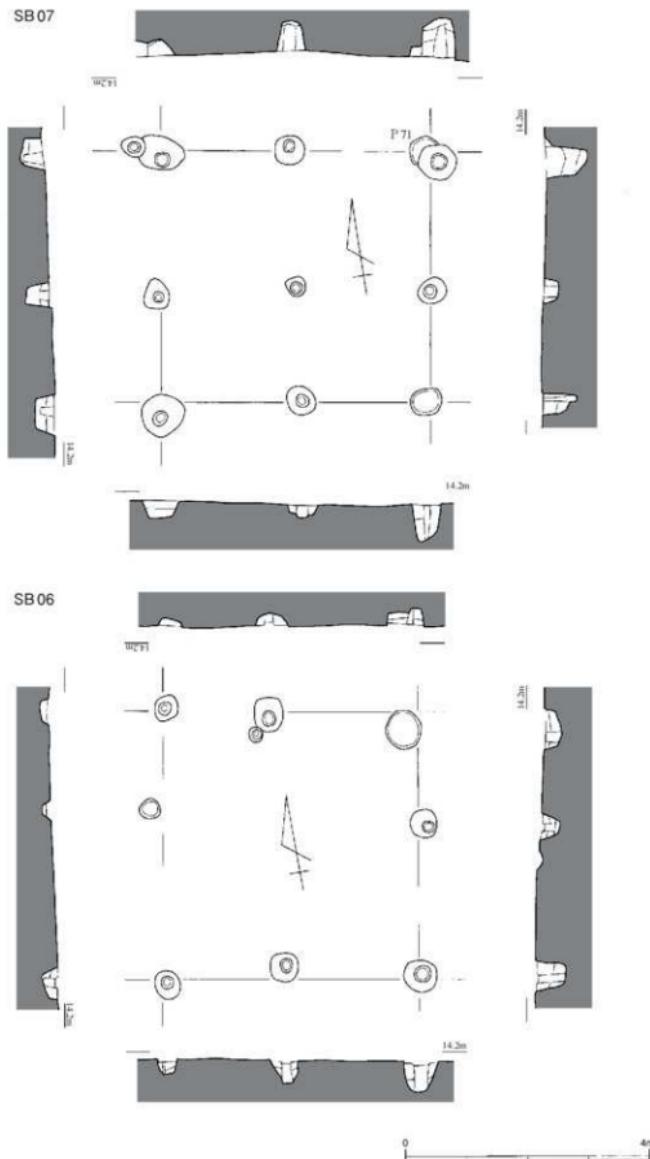




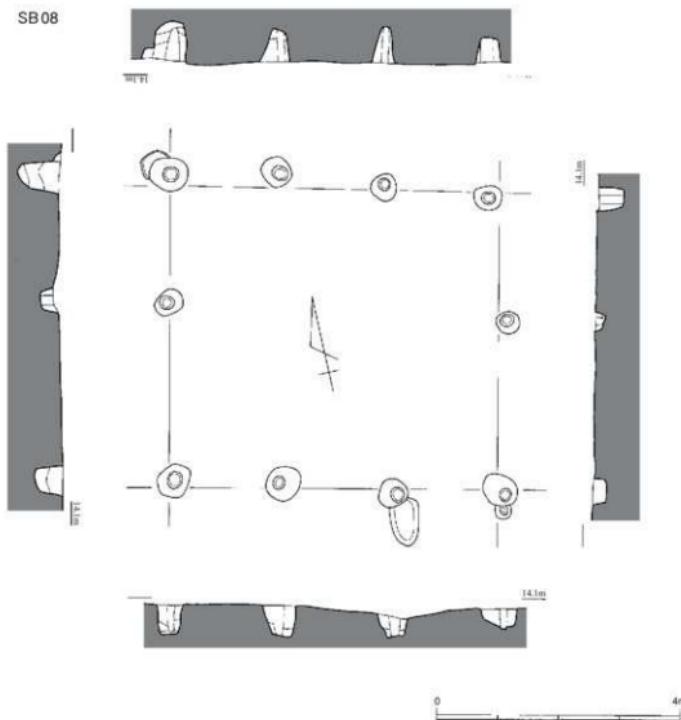
寺域東限の遺構



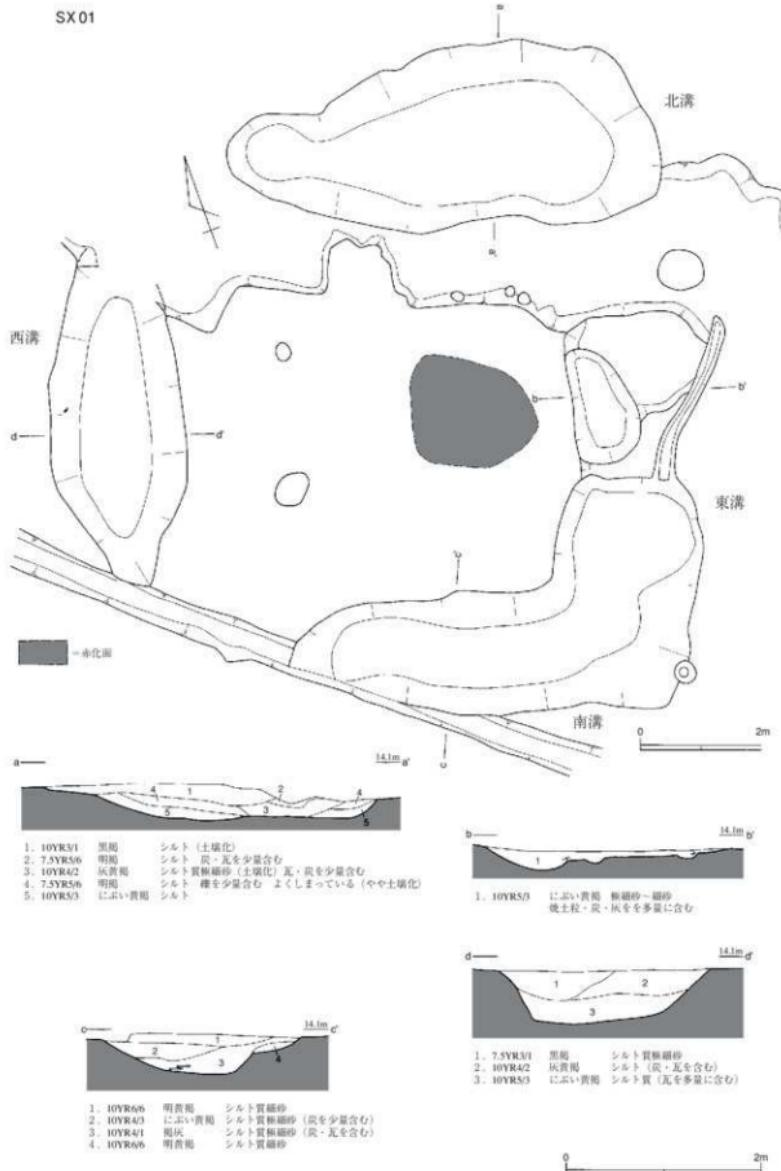
寺域東側全体図



寺域東側の遺構(1)

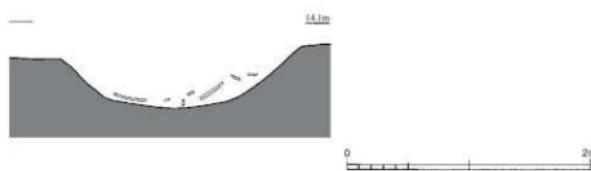
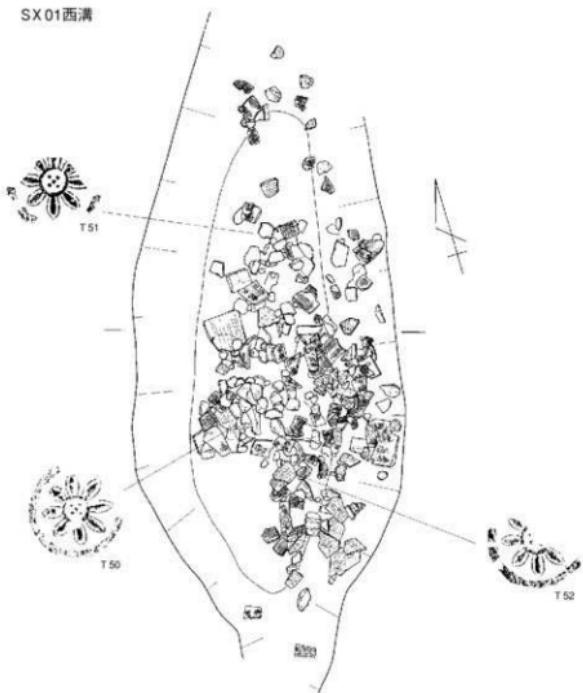


寺域東側の遺構(2)



寺域東側の遺構(3)

SX01西溝

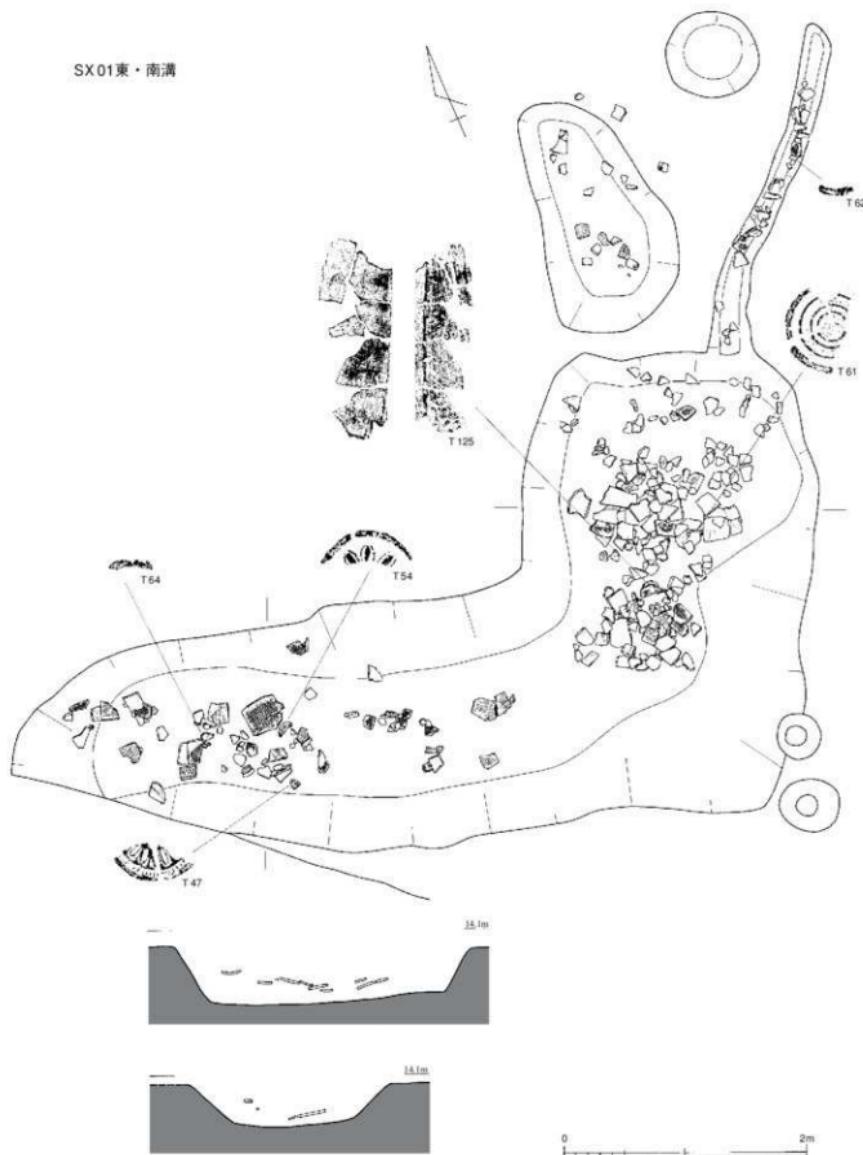


寺域東側の遺構(4)

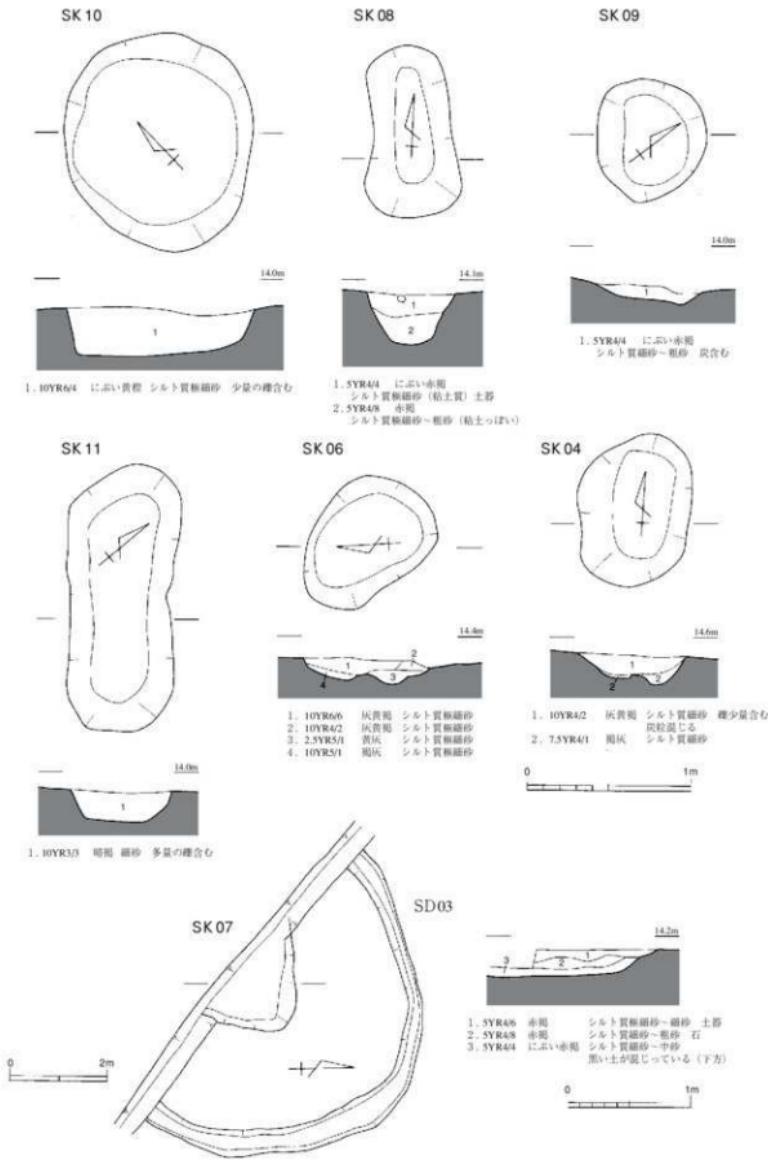


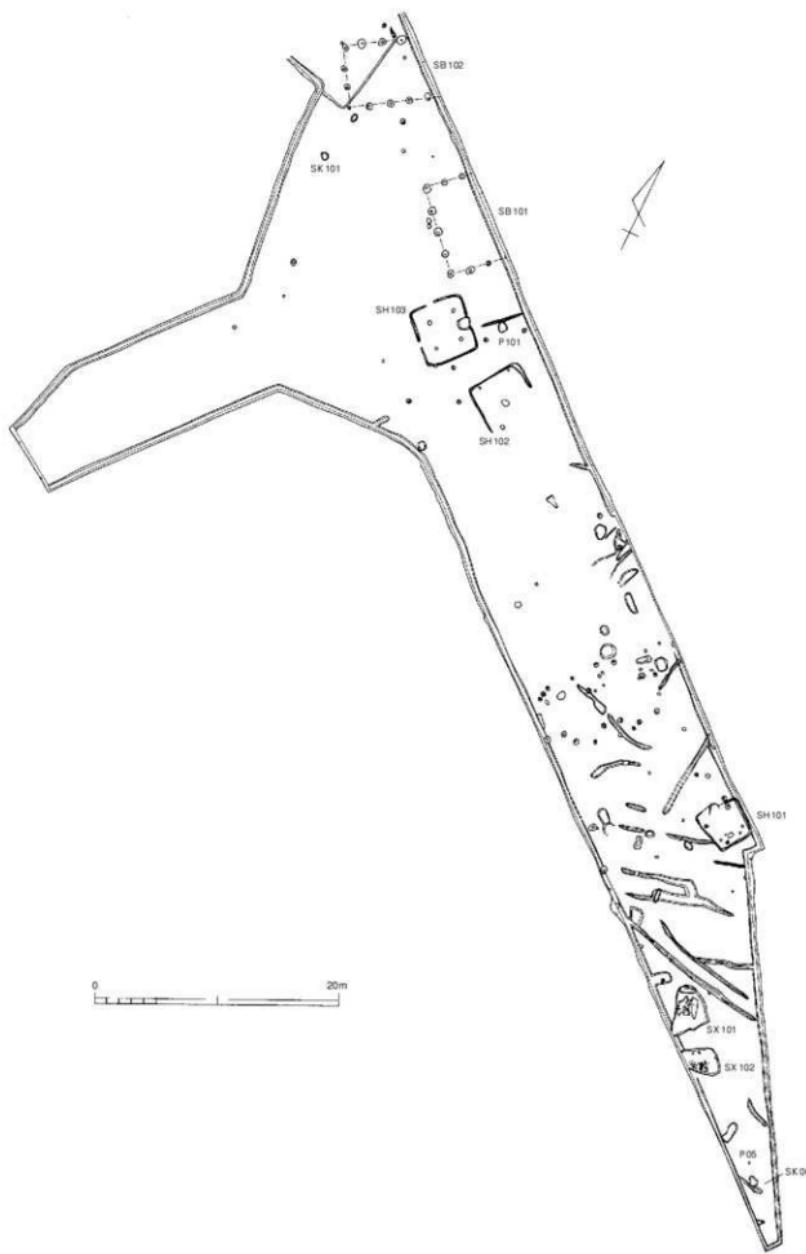
寺域東側の遺構(5)

SX01東・南溝

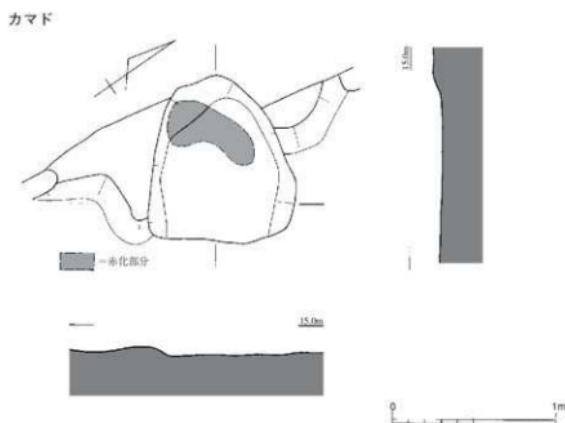
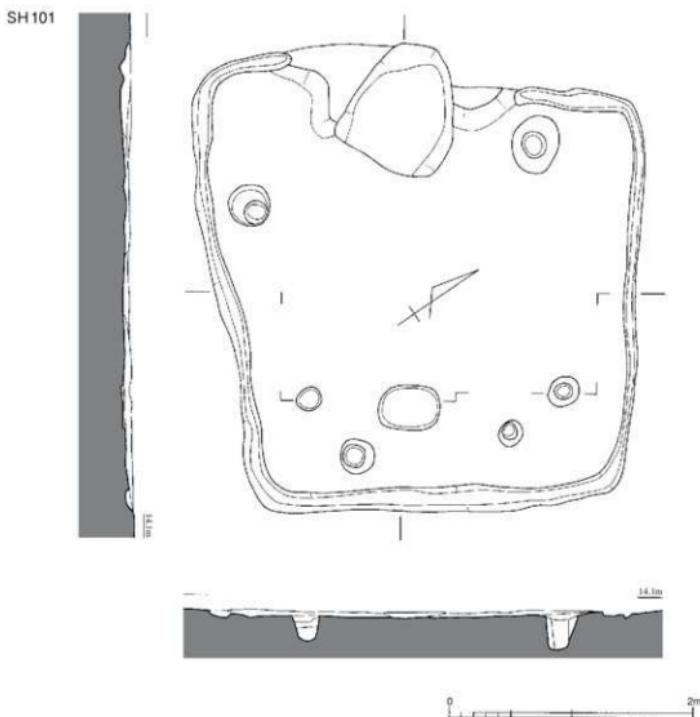


寺域東側の遺構(6)



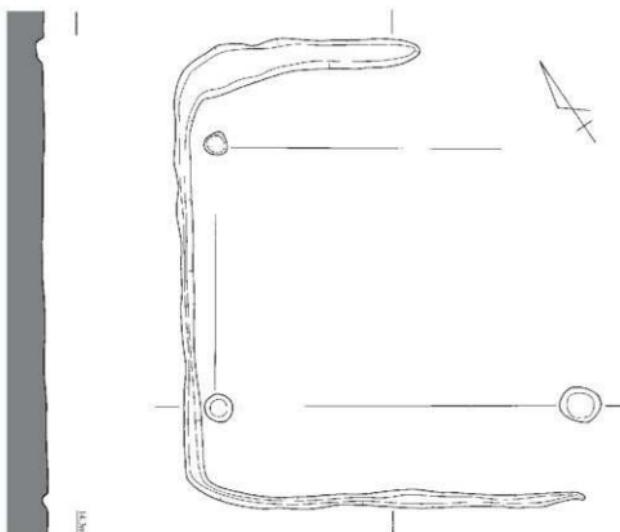


その他の時代の遺構全体図



その他の時代の遺構(1)

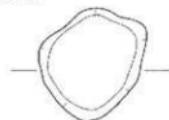
SH 102



1.0m

2m

SK 101



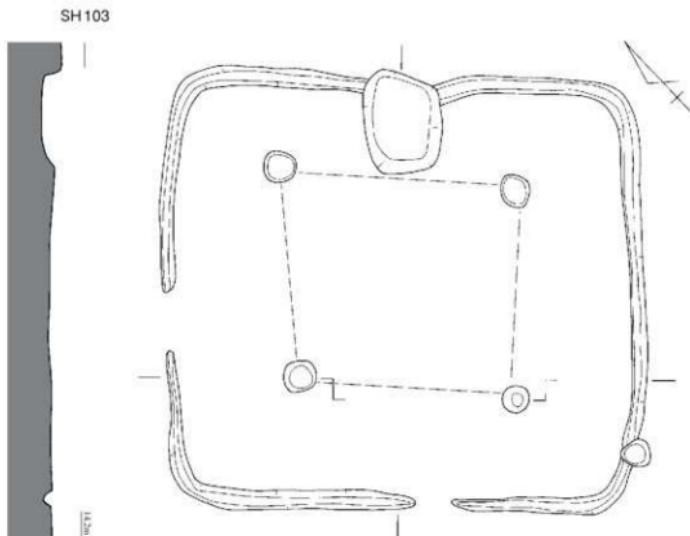
+



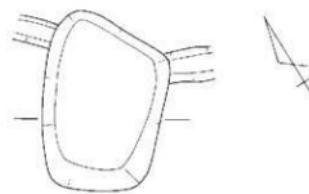
0 1m

I. NOYRA/I 黒瓦 磁器等 (焼土混じる)

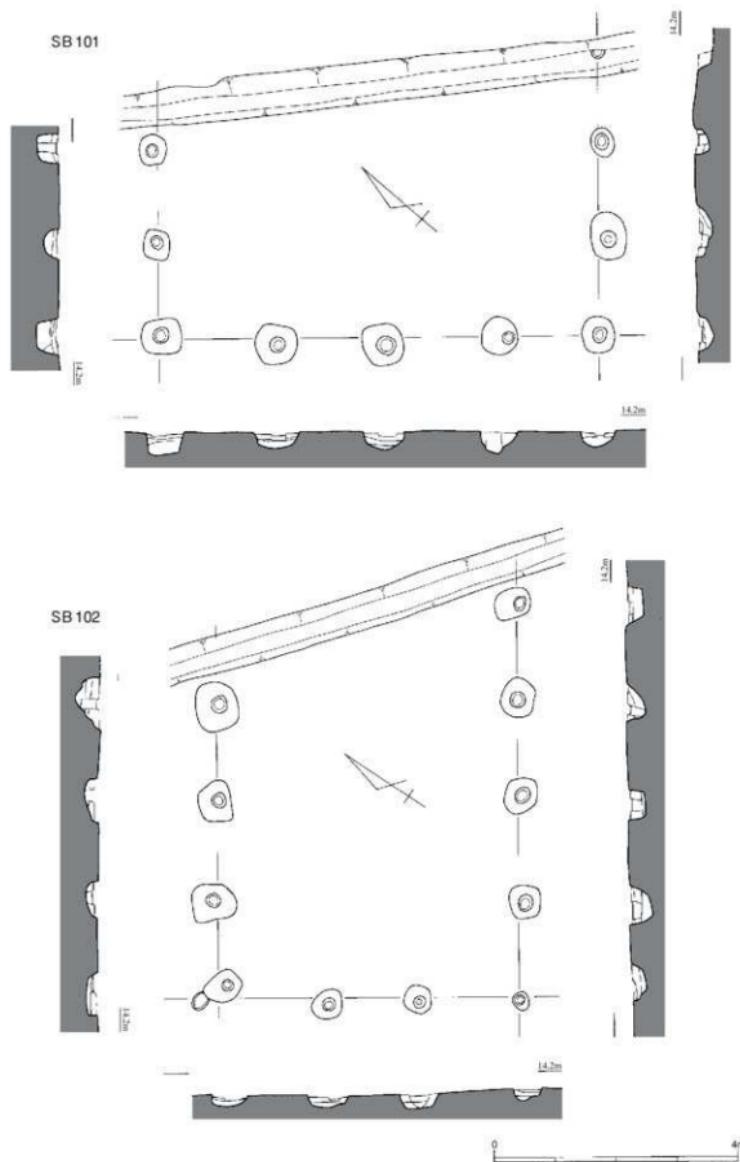
その他の時代の遺構(2)



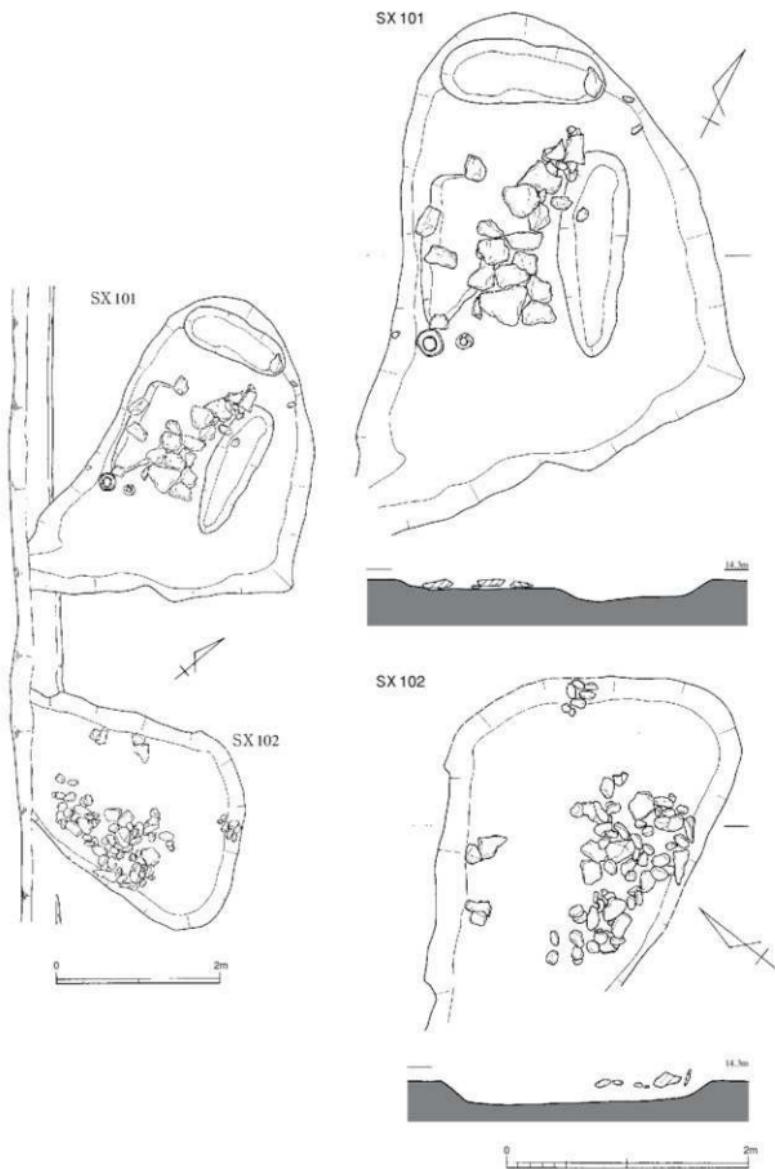
カマド



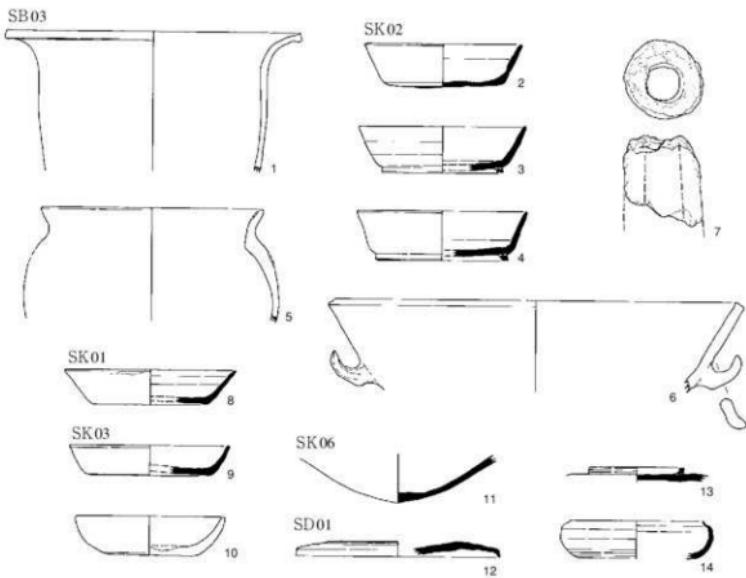
1. HOYR3/1 黒泥 シルト質粘土 (炭・焼土を多く含む)



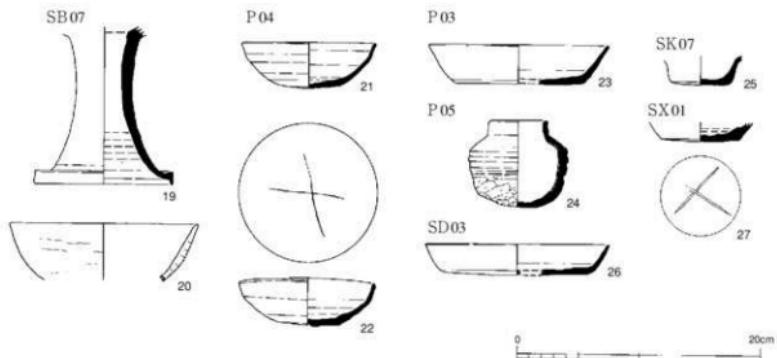
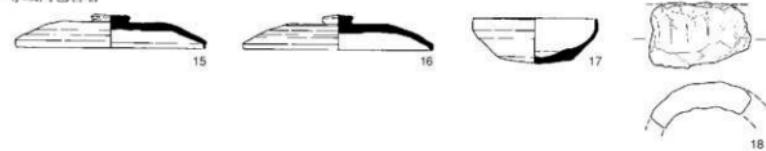
その他の時代の遺構(4)



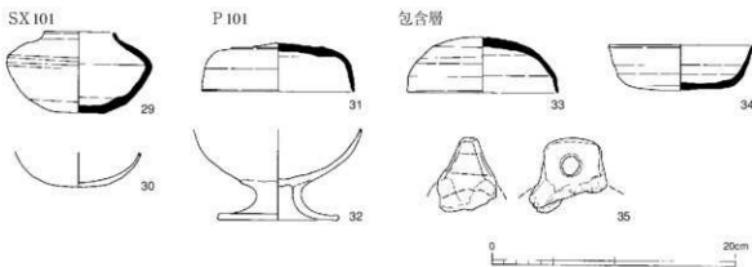
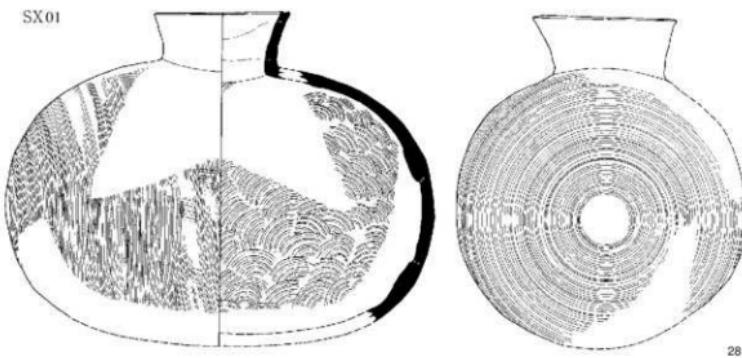
その他の時代の遺構(5)



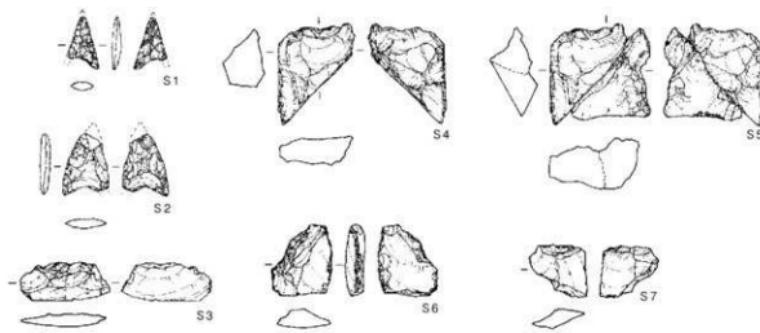
寺域内包含層



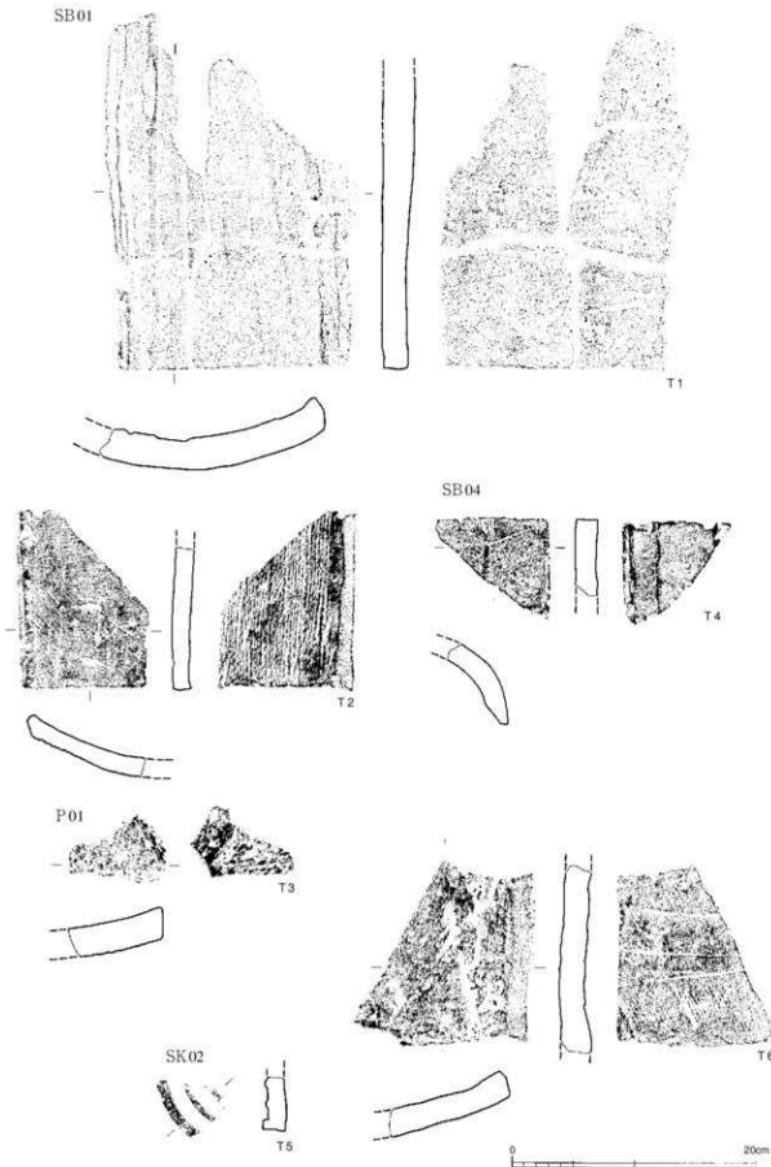
出土土器(1)



出土土器(2)

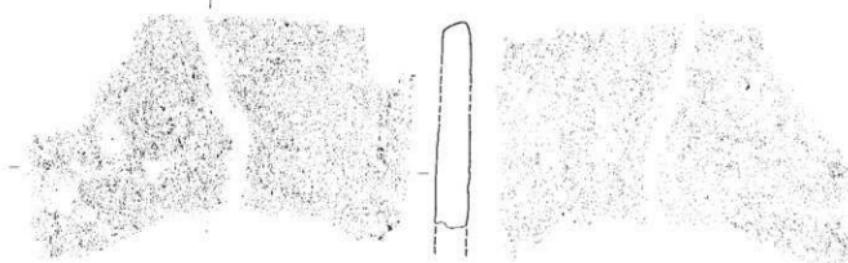


出土石製品

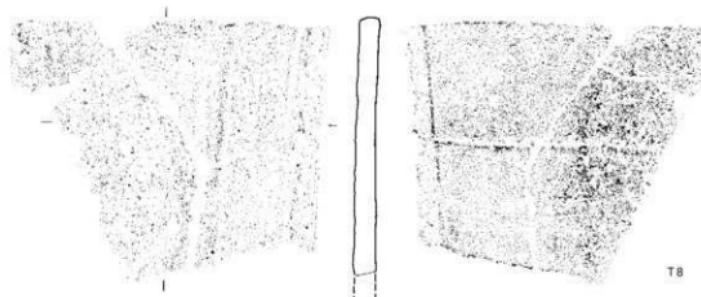


出土瓦(1)

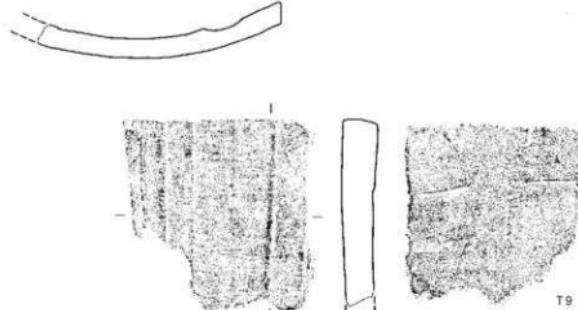
SK02



T7



T8

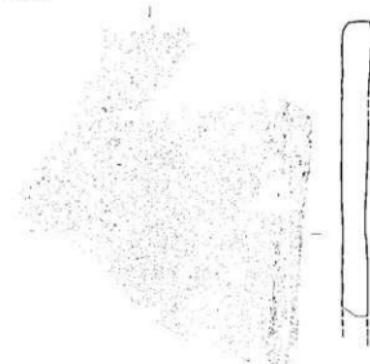


T9

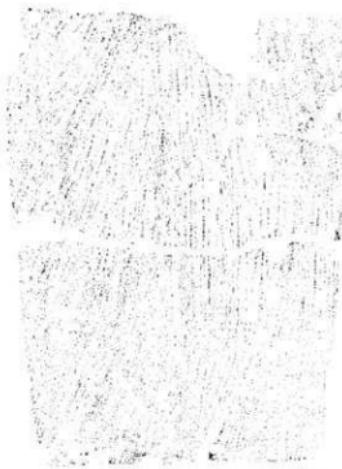


出土瓦(2)

SK02



T10

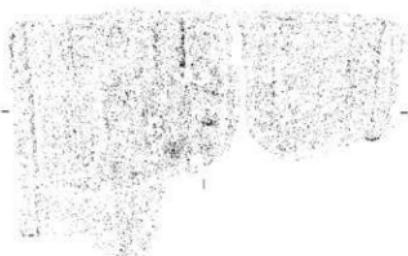


出土瓦(3)

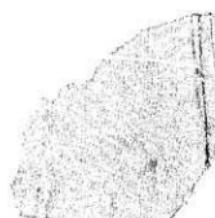
SK02



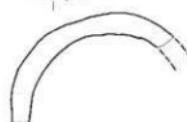
T12



T13

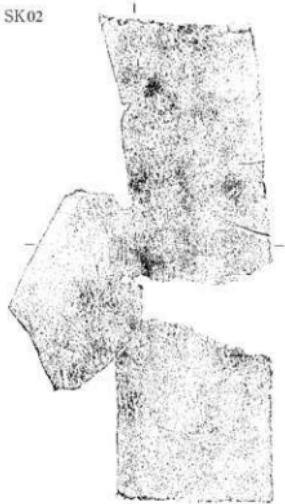


T14



出土瓦(4)

SK02



T15

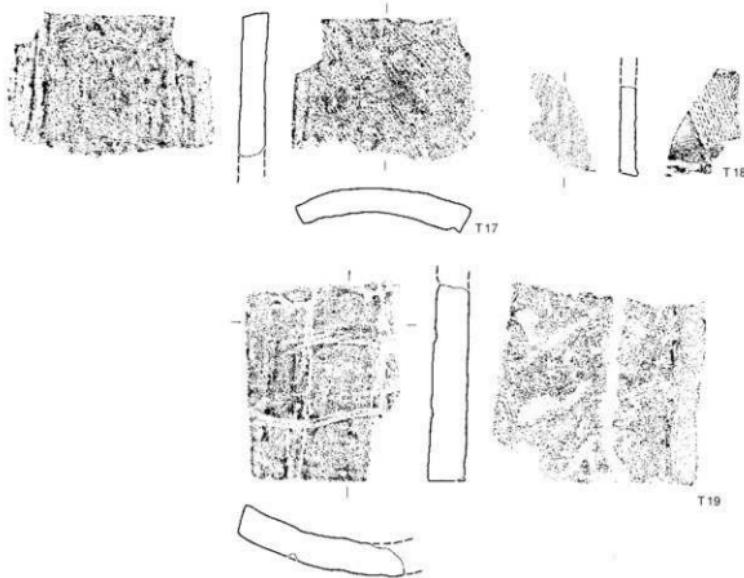


T16

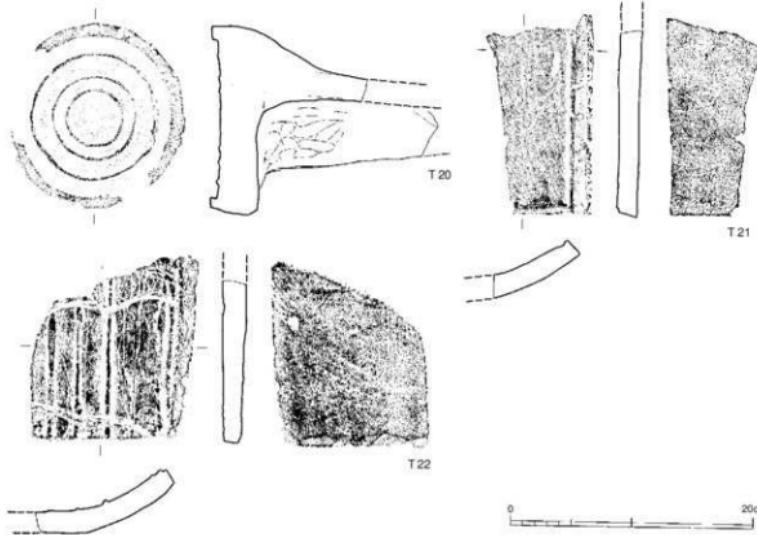


出土瓦(5)

SK02



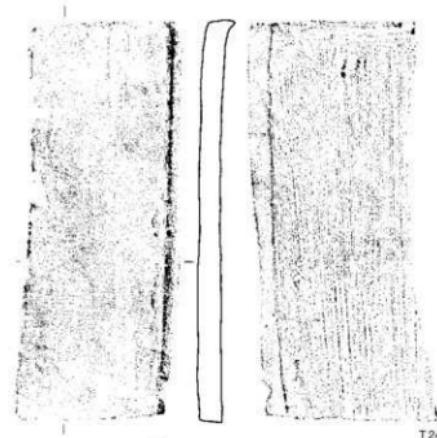
SK01



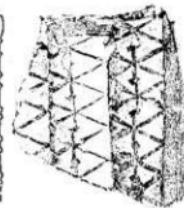
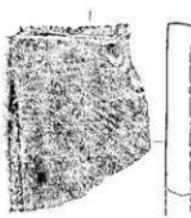
SK01



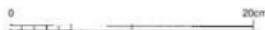
T23



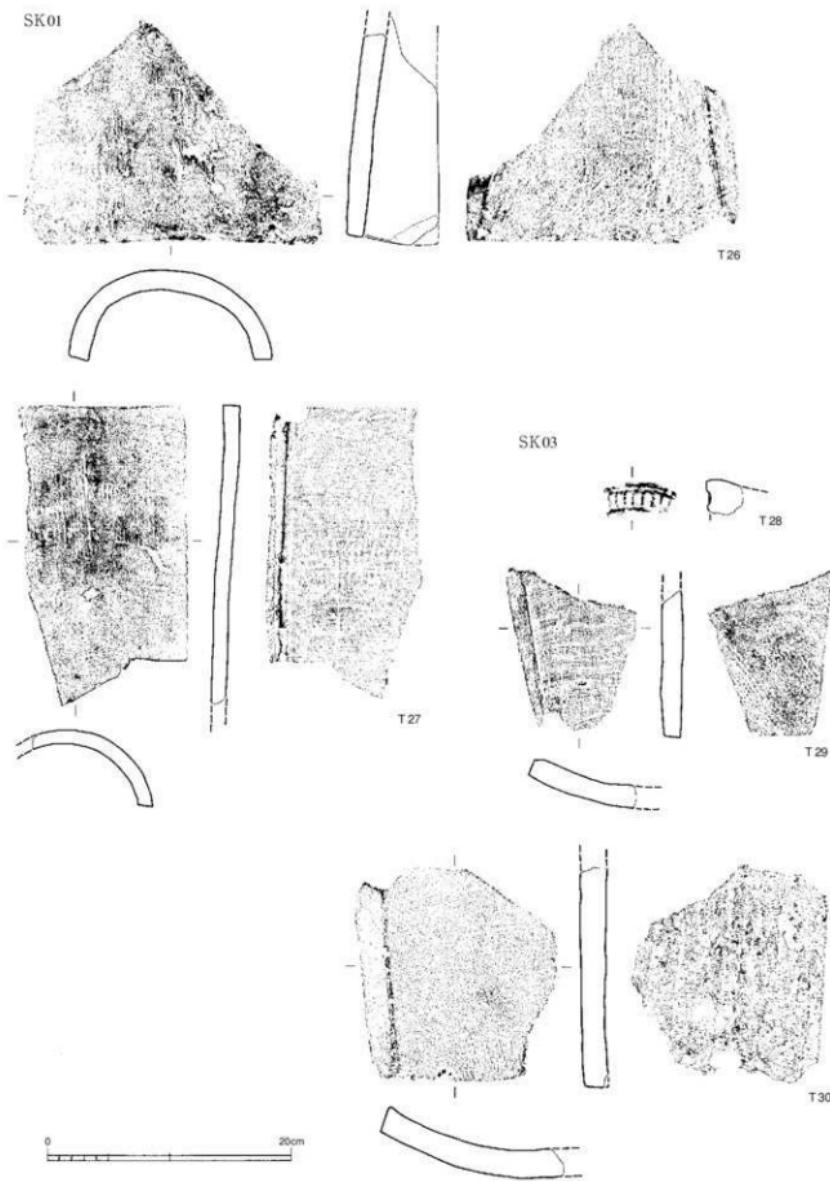
T24



T25

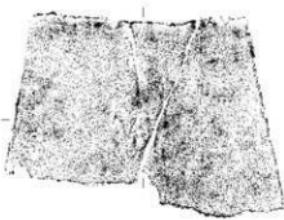


出土瓦(7)

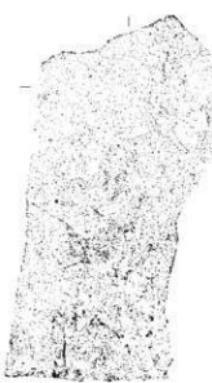


出土瓦(8)

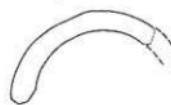
SK03



T31



T32



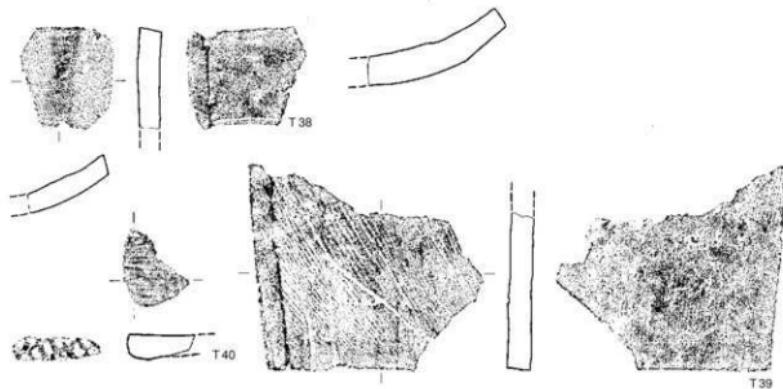
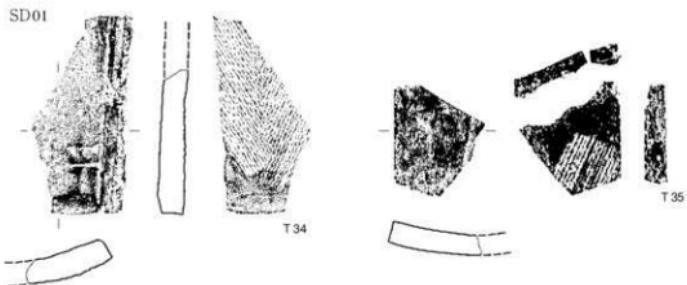
SK05



T33

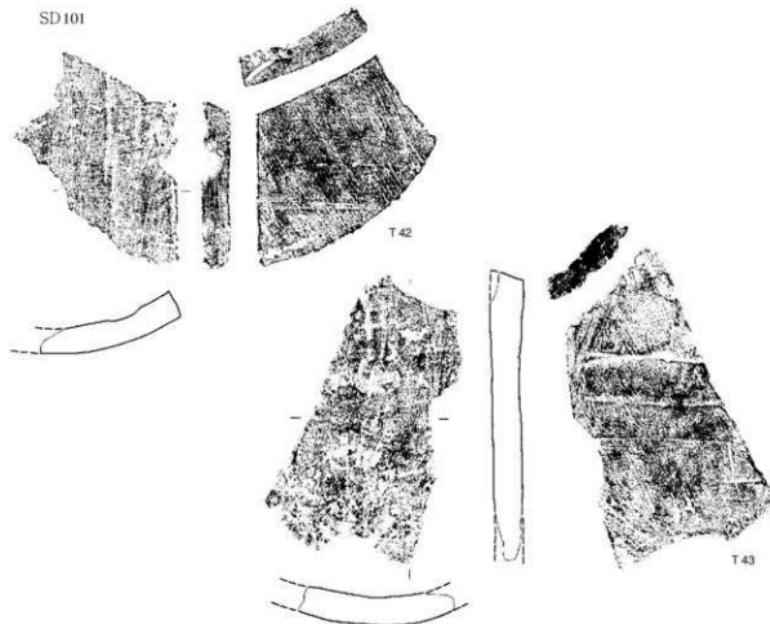


出土瓦(9)

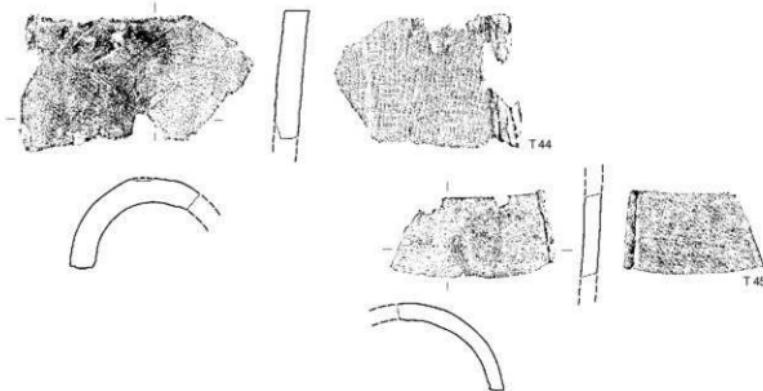


出土瓦(10)

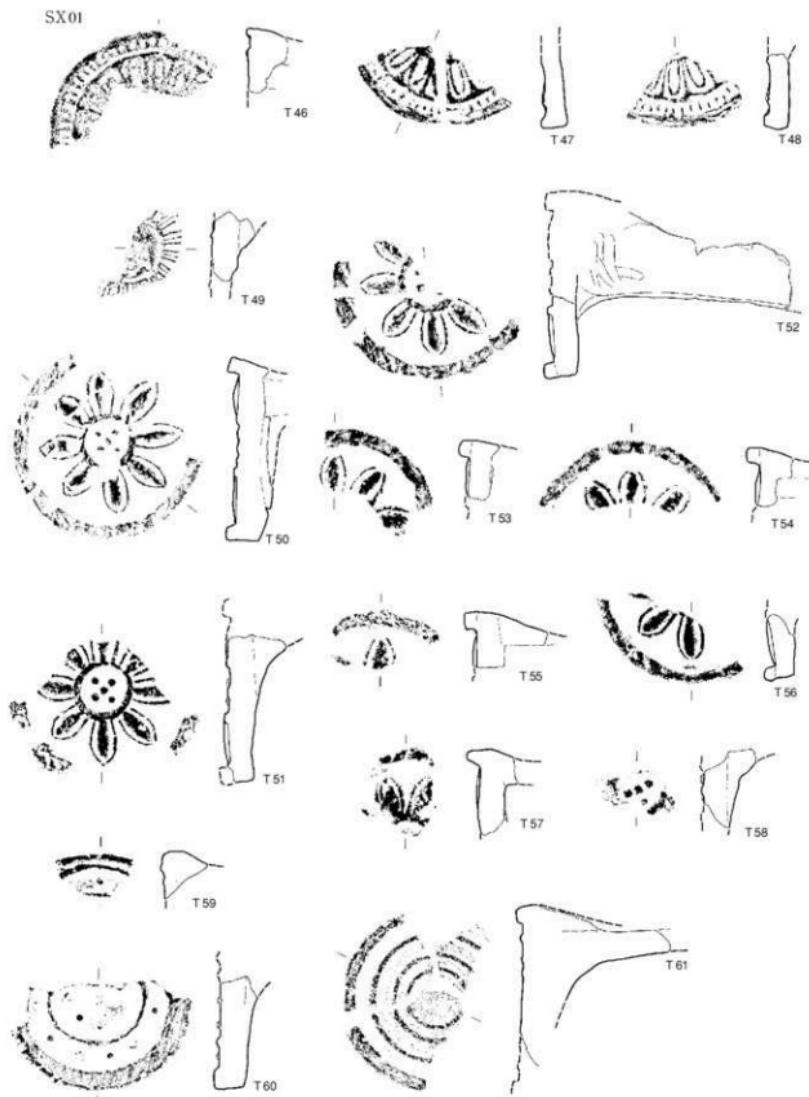
SD 101



寺域内包含層

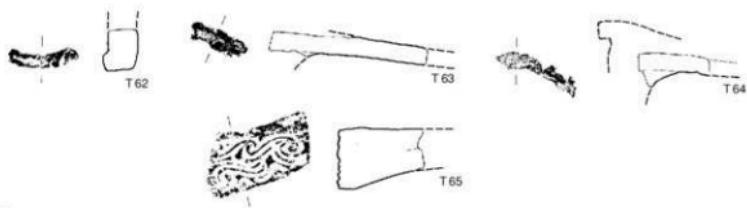


出土瓦(11)

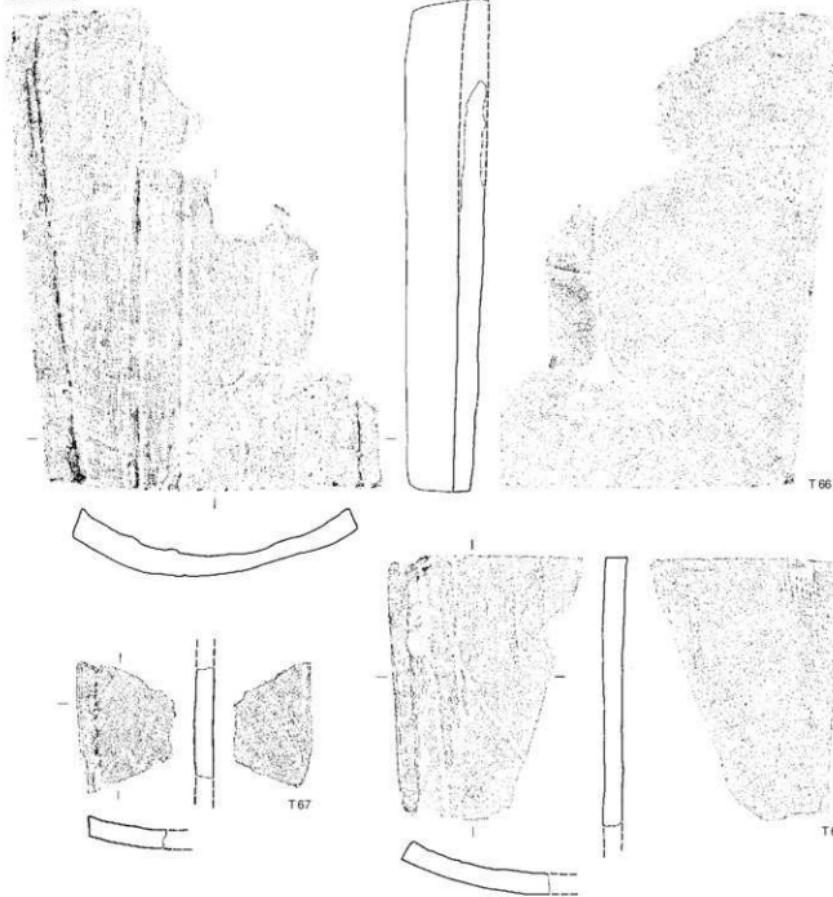


0 20cm

SX01



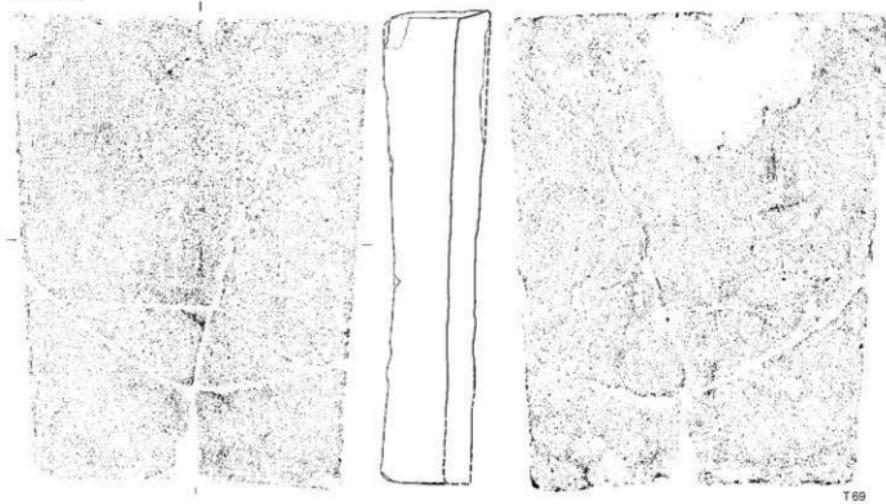
SX01西溝



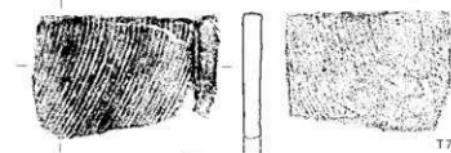
0 20cm

出土瓦(13)

SX01西溝



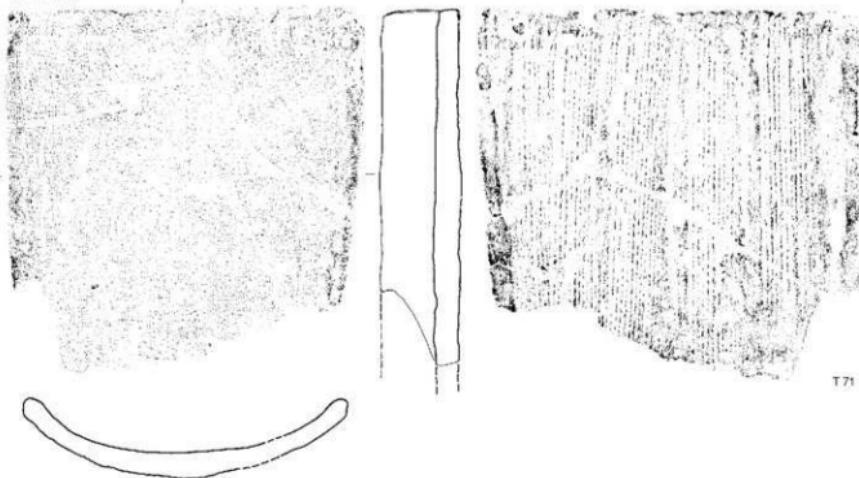
T69



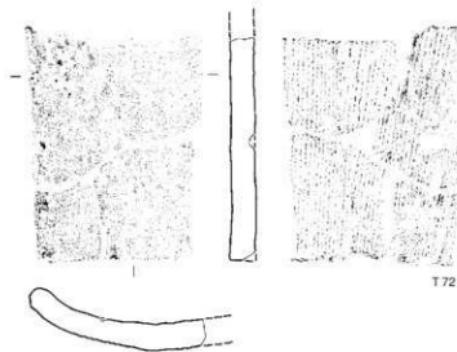
T70



SX01西溝



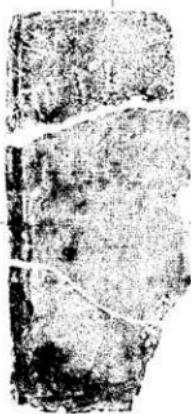
T71



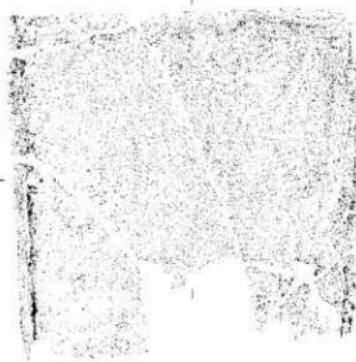
T72



SX01西溝



T73

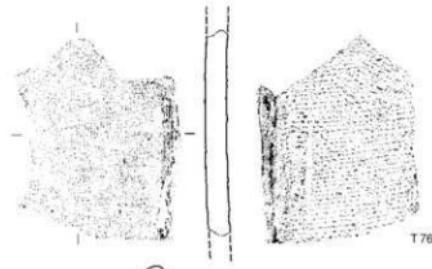
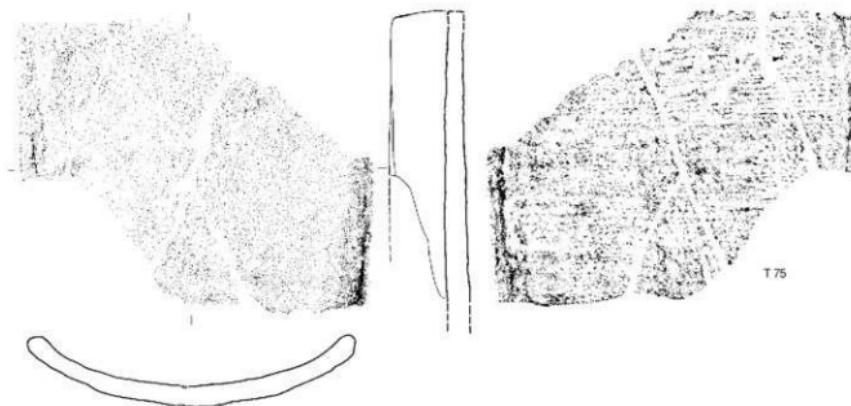


T74



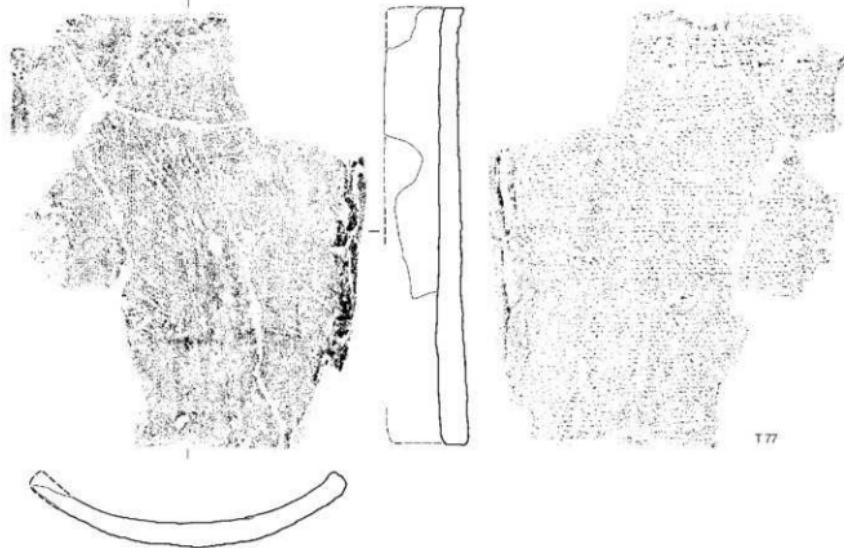
出土瓦(16)

SX01西溝

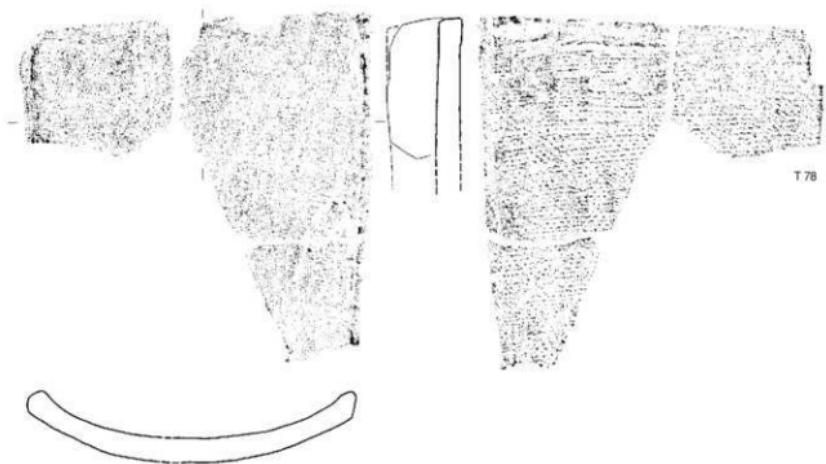


出土瓦(17)

SX01西溝



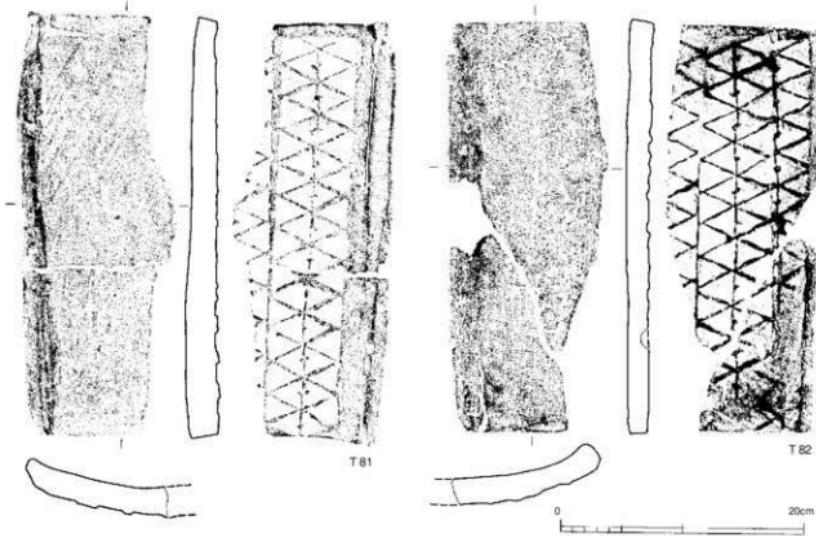
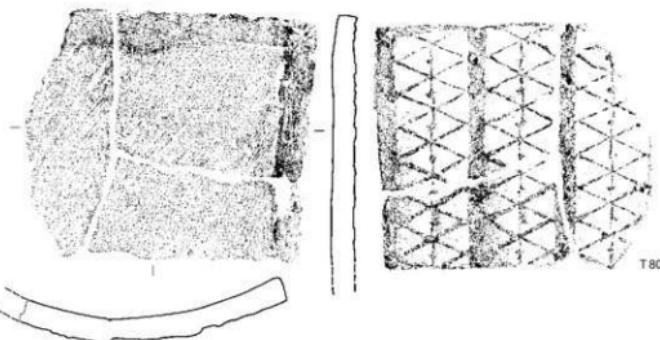
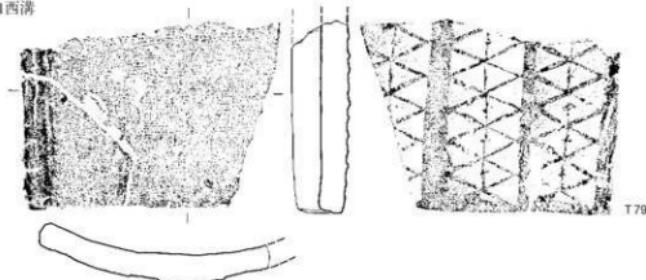
T 77



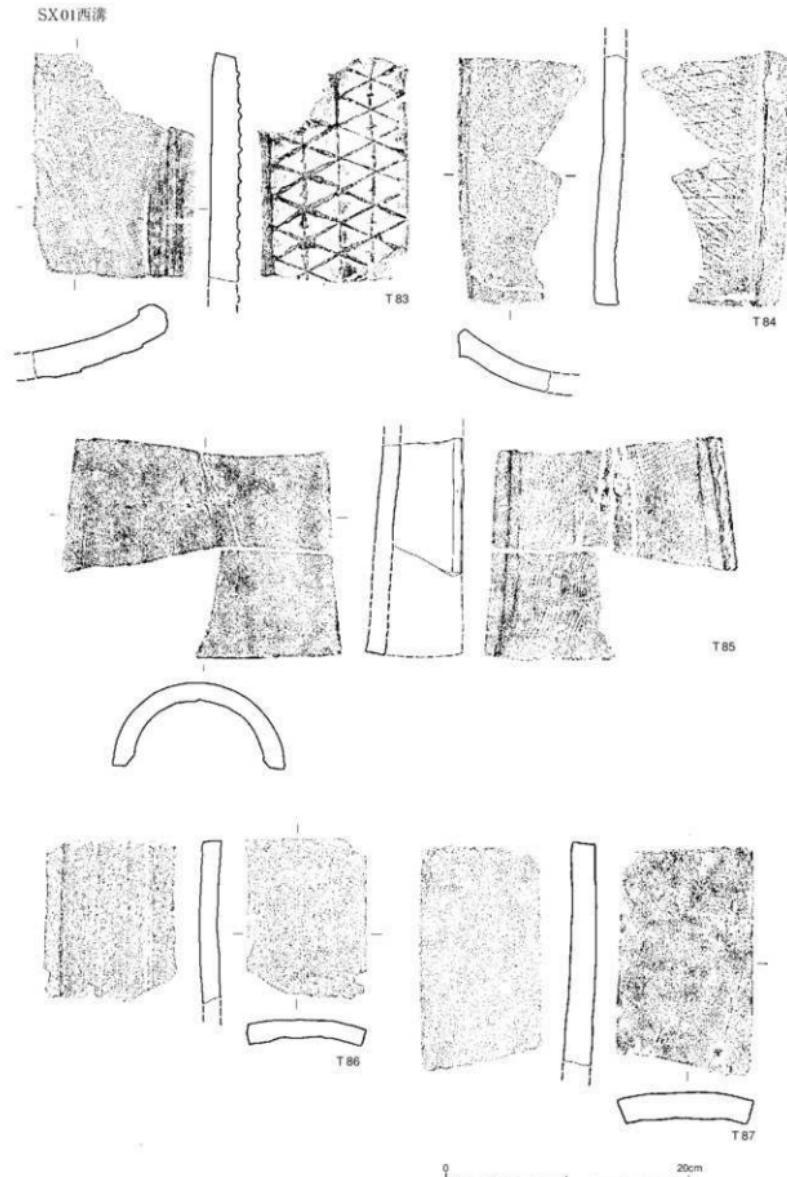
T 78



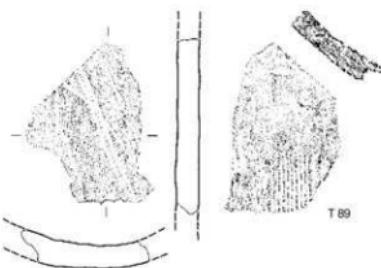
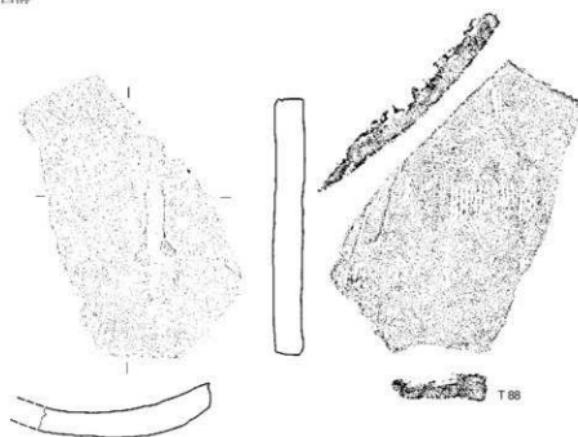
SX01西溝



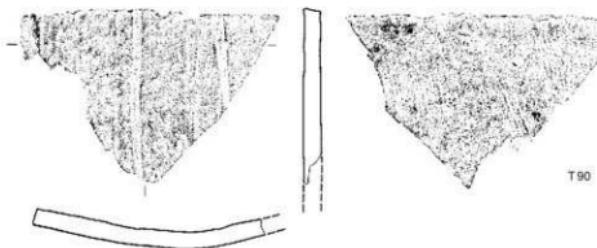
出土瓦(19)



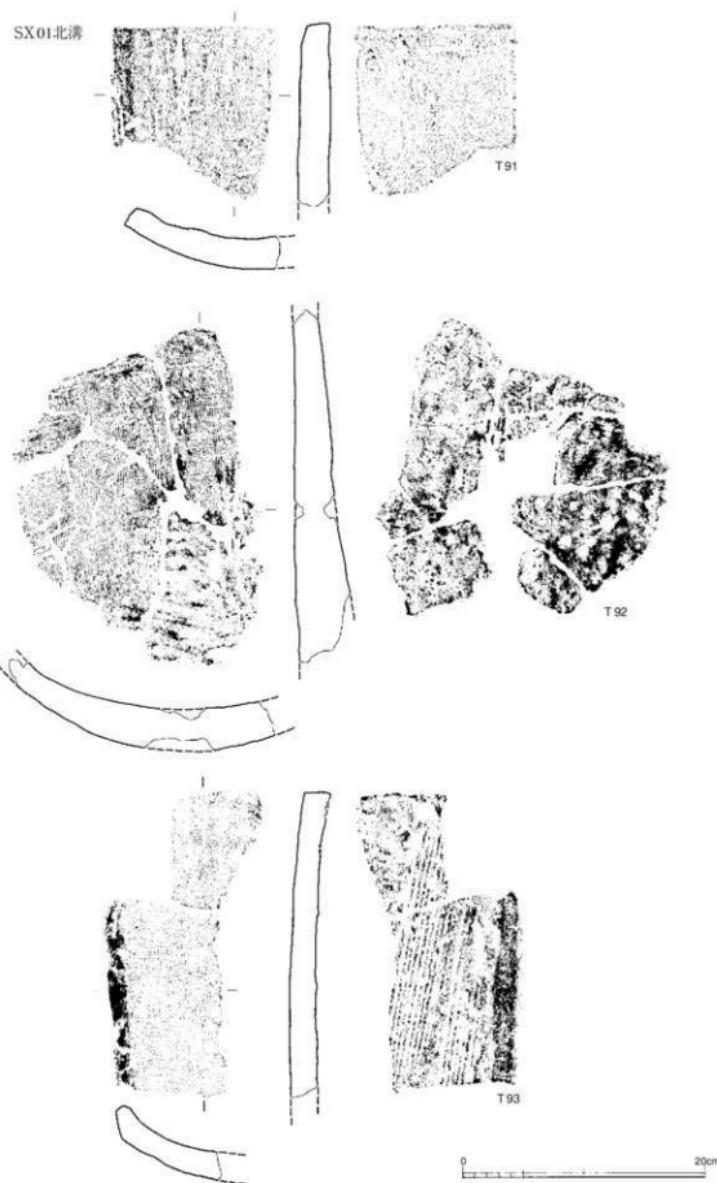
SX01西溝



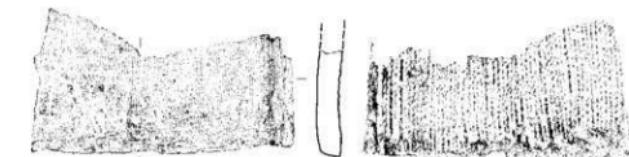
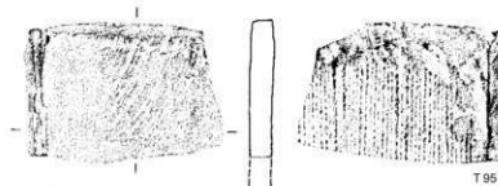
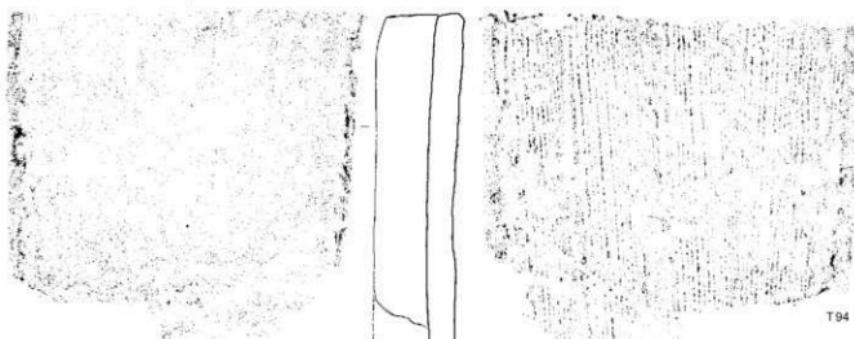
SX01北溝



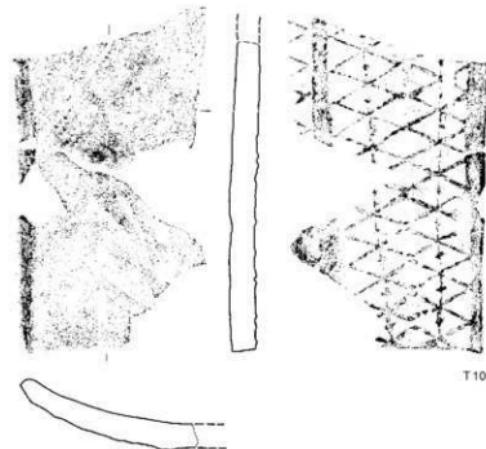
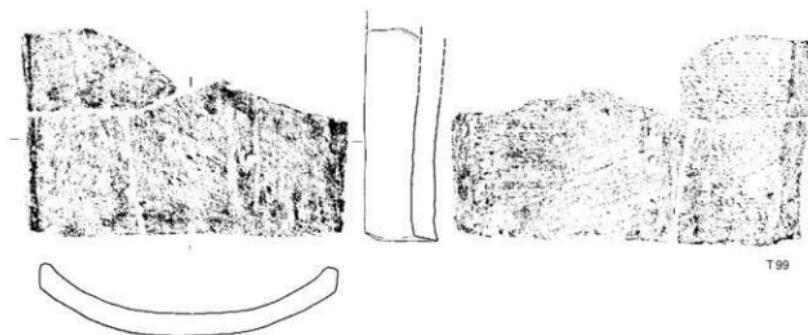
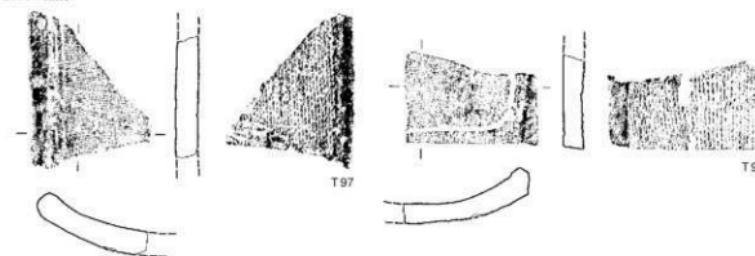
出土瓦(21)



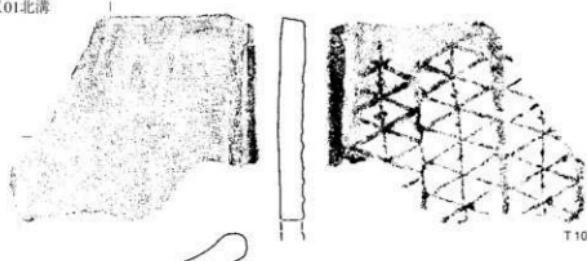
SX01北溝



SX01北溝



SX01北溝



T101

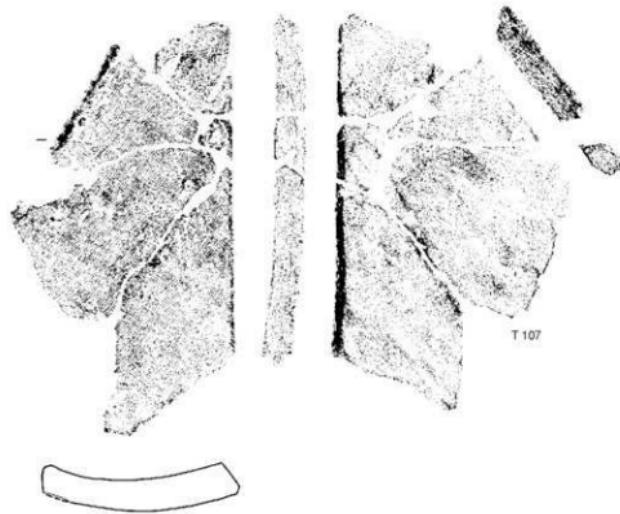
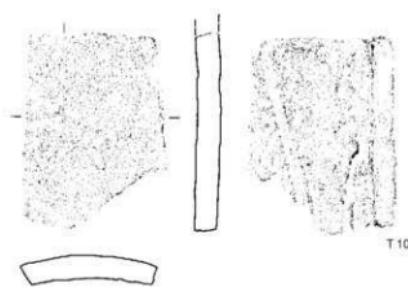
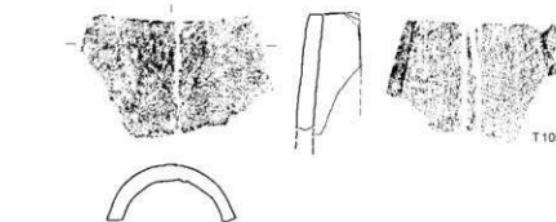
T102

T103

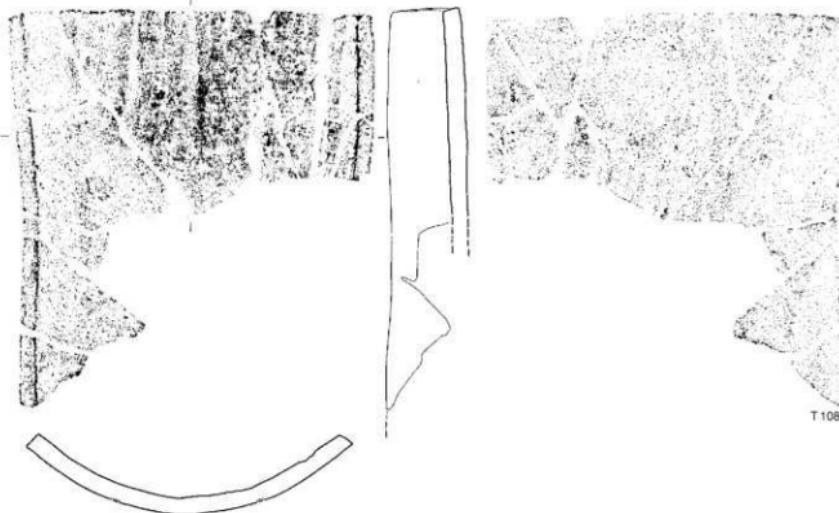
T104



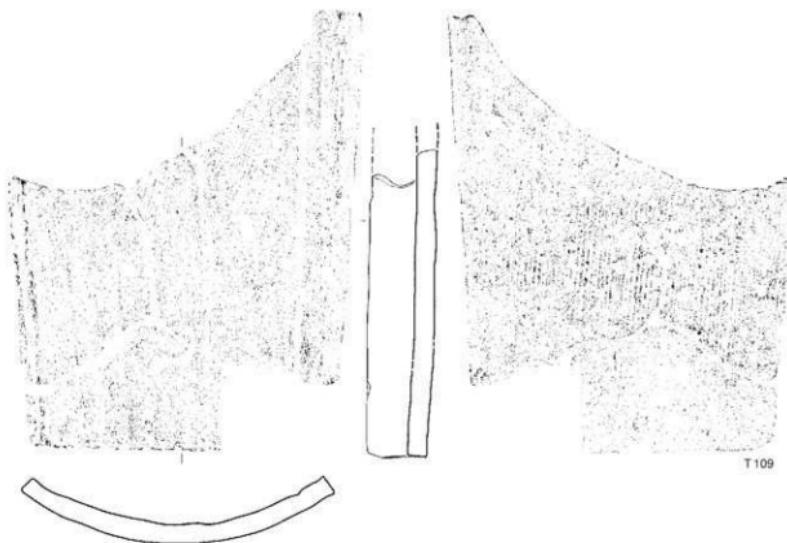
SX01北溝



SX01東溝



T108

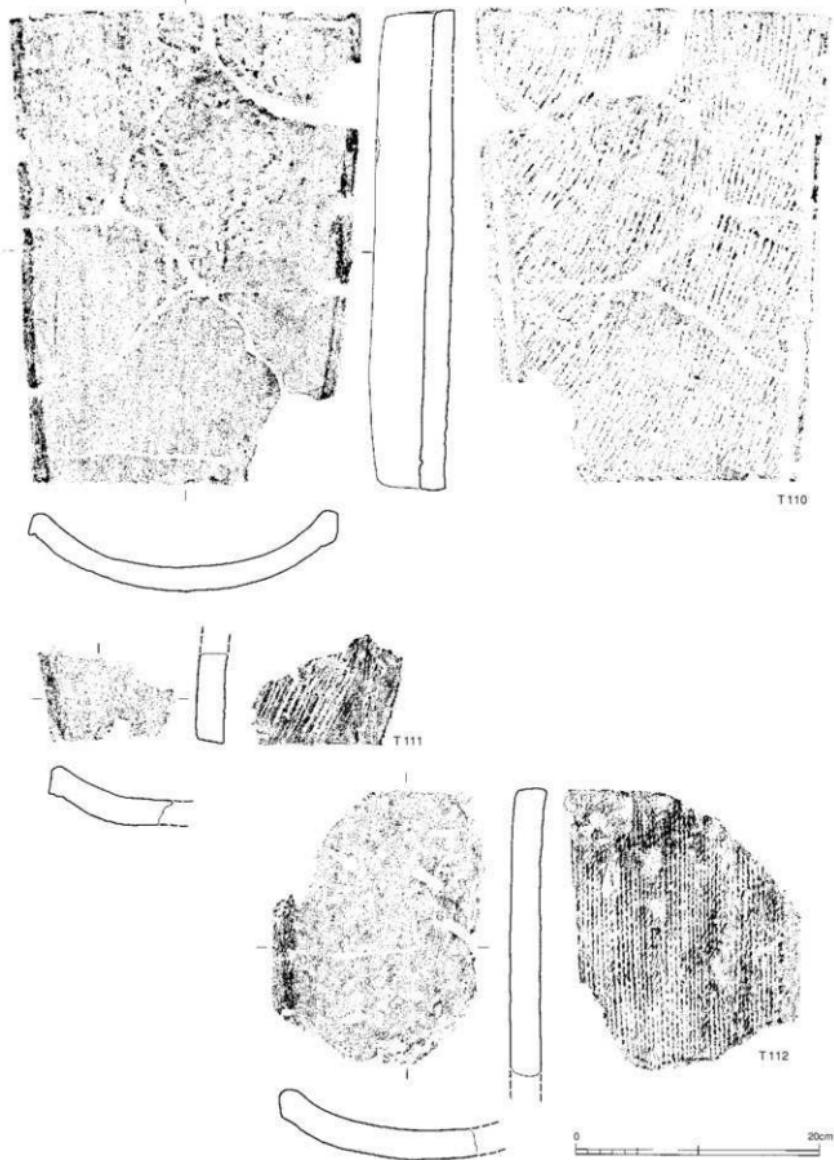


T109

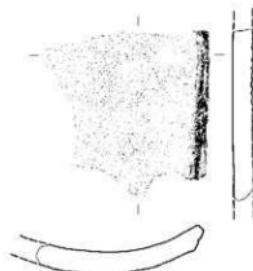


出土瓦(2)

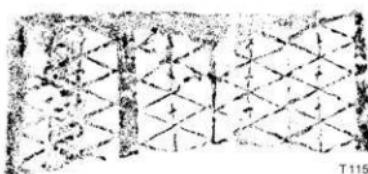
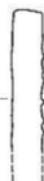
SX01東溝



SX01東溝



T114



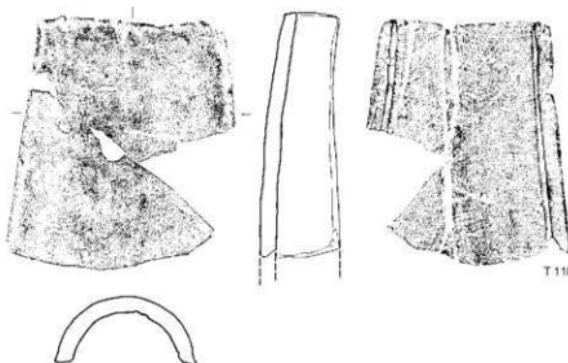
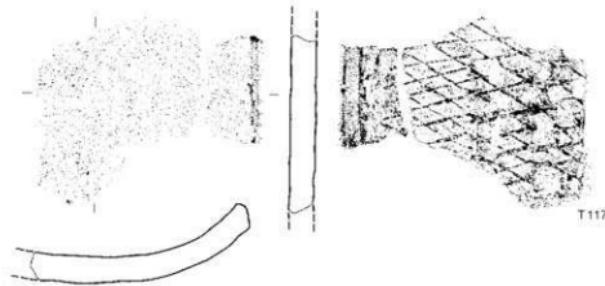
T115



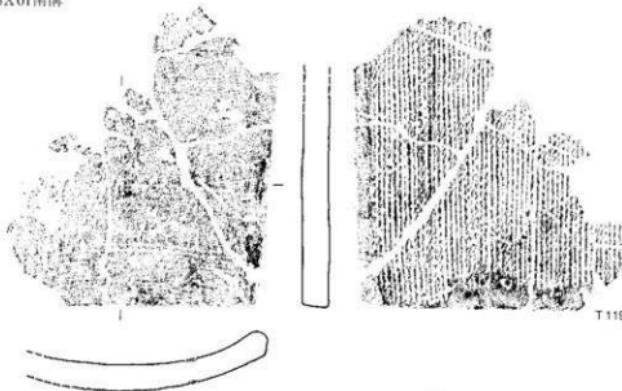
T116



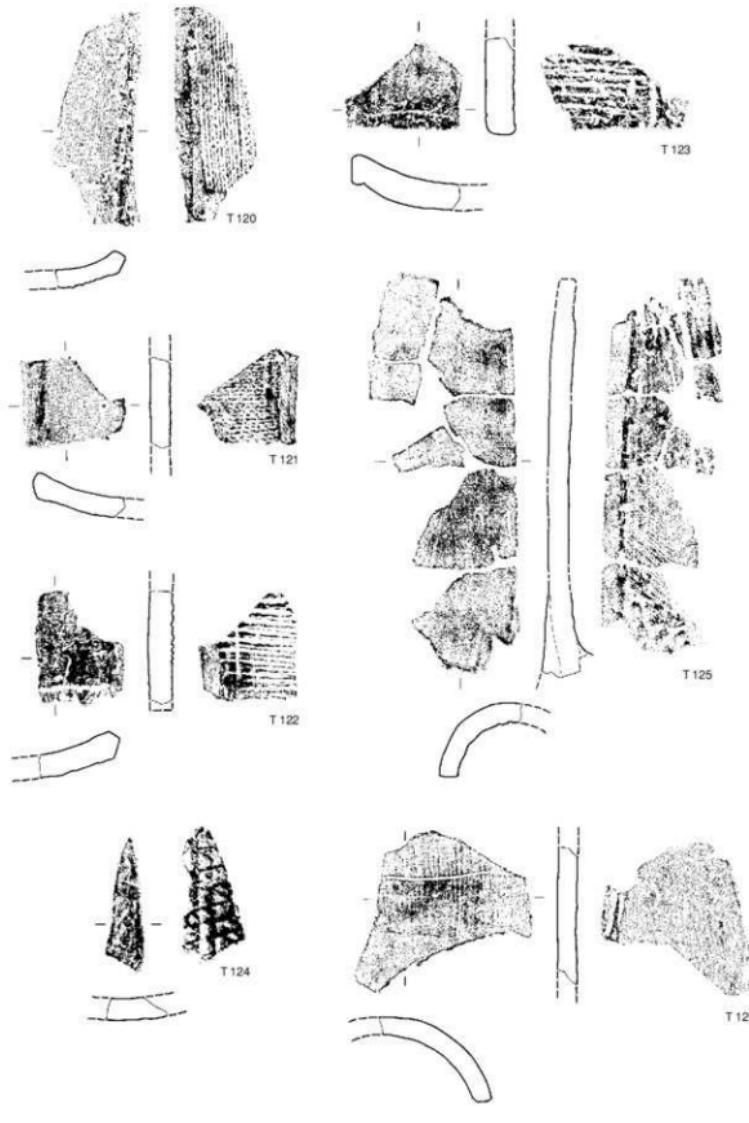
SX01東溝



SX01南溝

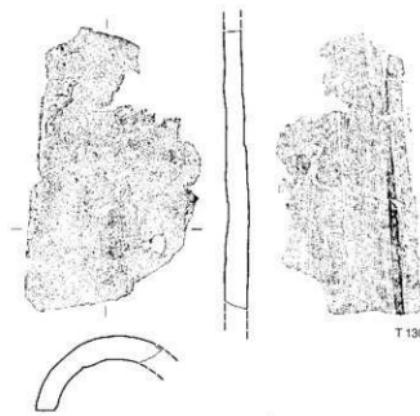
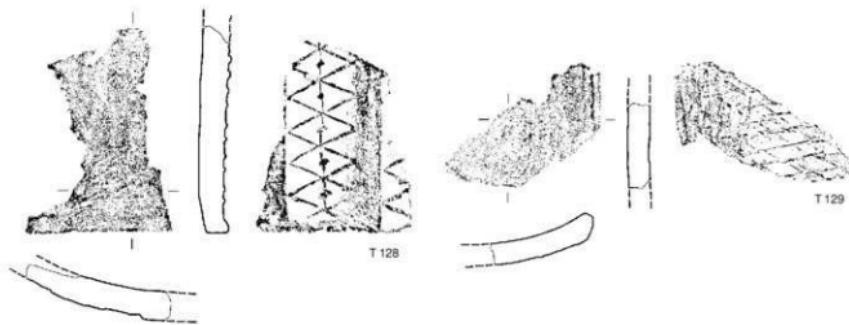
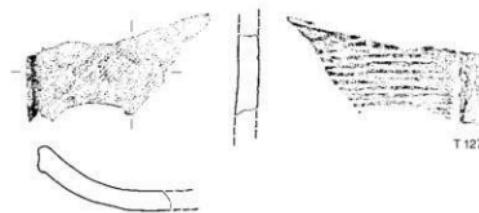


SX01南溝



出土瓦(3)

SX01検出時



写真図版





調査区遠景(1)

(南東から)

中央の河川が墨川、奥の河川が

加古川



調査区遠景(2)

(北東から)

中央付近が西条廃寺と

西条古墳群



石守魔寺付近航空写真  
(1974年国土地理院撮影)



調査前の状況  
(南東から)

奥の空地に塔・金堂が所在



調査区全景(I)  
(垂直写真)



調査区全景(2)  
(南東から)



調査区全景(3)  
(北東から)



調査区全景(4)  
(北西から)



調査区全景(5)  
(南東から)



寺域内の遺構  
(垂直写真)



寺域東側の遺構  
(垂直写真)



古墳時代の集落(I)  
(垂直写真)



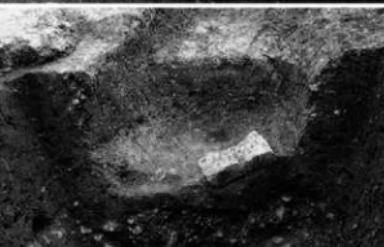
古墳時代の集落(2)  
(垂直写真)



寺域内の遺構  
(北西から)



SB01周辺  
(南から)



SB01柱穴断面状況



SB02  
(南から)



SB03  
(南西から)



SB03柱穴断面状況  
(南から)



SA01  
(南から)



P 02瓦出土状況  
(南から)



SK05  
(北から)



SK02  
(南西から)



SK01  
(東から)



SK01軒丸瓦出土状況  
(南から)



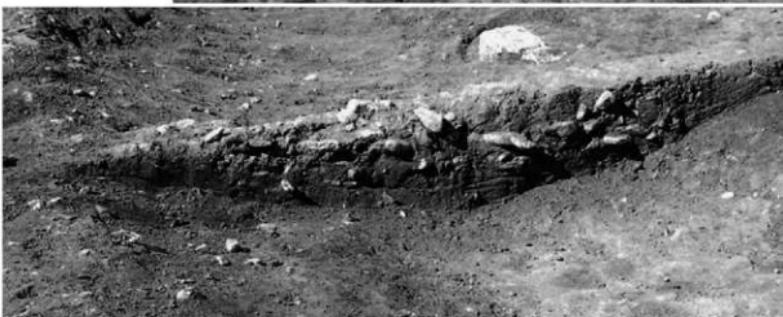
SK05断面  
(南から)



SK03  
(西から)



SK03  
遺物出土状況





寺域東限付近の遺構  
(南から)



SD02断面  
(南から)



寺域東側の遺構(1)  
(南東から)





SX01検出状況  
(東から)



SX01(1)  
(東から)



SX01(2)  
(北西から)



SX01南溝断面  
(東から)



SX01南溝  
(西から)



SX01南溝  
軒丸瓦出土状況



SX01東溝断面  
(南から)



SX01東溝(1)  
(南から)



SX01東溝(2)  
(北から)



SX01東溝  
軒丸瓦出土状況  
(北から)



SX01西溝断面  
(南から)



SX01西溝(1)  
(南から)



SX01西溝(2)  
(北から)



SX01西溝  
平瓦出土状況  
(東から)



SX01北溝断面  
(北から)



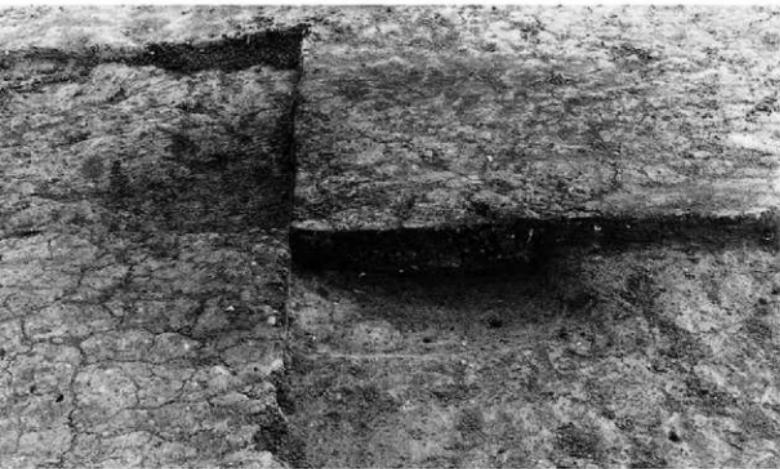
SX01北溝(1)  
(北西から)



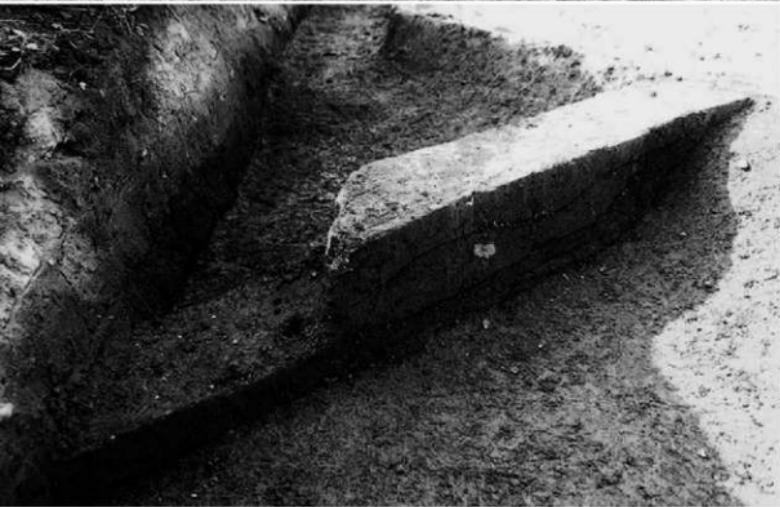
SX01北溝(2)  
(西から)



SX01北溝  
平瓦出土状況  
(北東から)



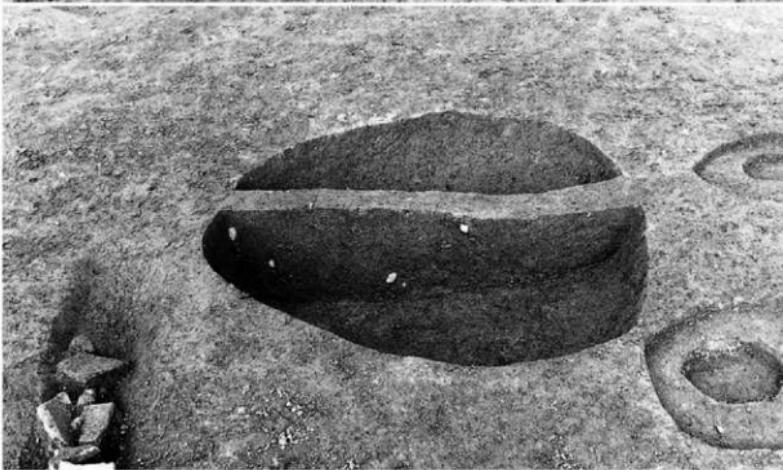
SX01赤化面  
断割断面  
(東から)



SK07断面  
(東から)



SK08断面  
(南から)

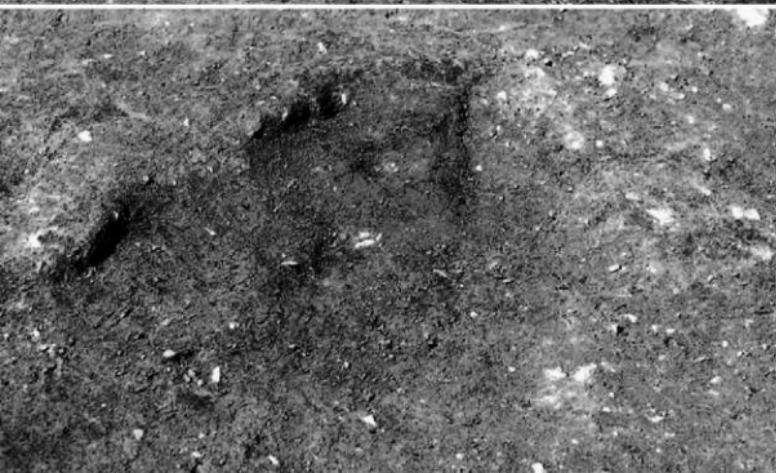




SH101  
(南東から)



SH101カマド断面  
(南西から)



SH101カマド  
(南東から)



SH102  
(西から)



SH103  
(南西から)



SH103カマド断面  
(南西から)



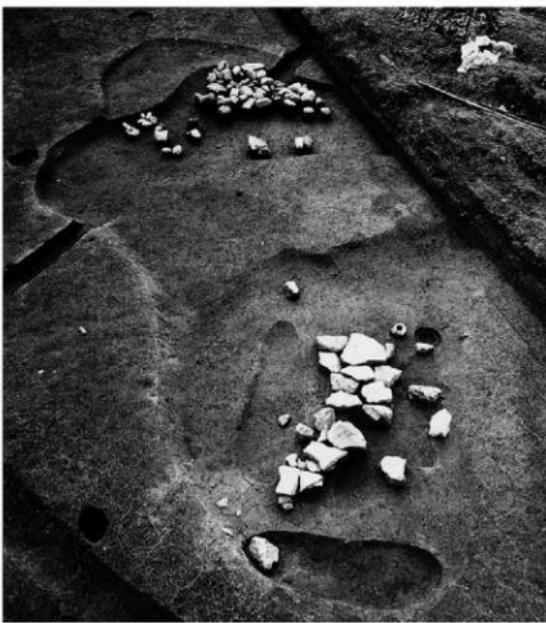
SB 101  
(西から)



SB 102  
(南から)



SK 101断面  
(東から)



SX101・102

(北西から)



SX102断面

(北から)



SX102

(北東から)



SX101  
(北から)



SX101断面  
(南から)



SX101土器出土状況  
(北東から)



調査風景

左) 塔心礎

(寶塔寺境内)

右) 伝石守庵寺礎石

(石守觀音堂前)





19



20



21



22



23



24



25



1



27

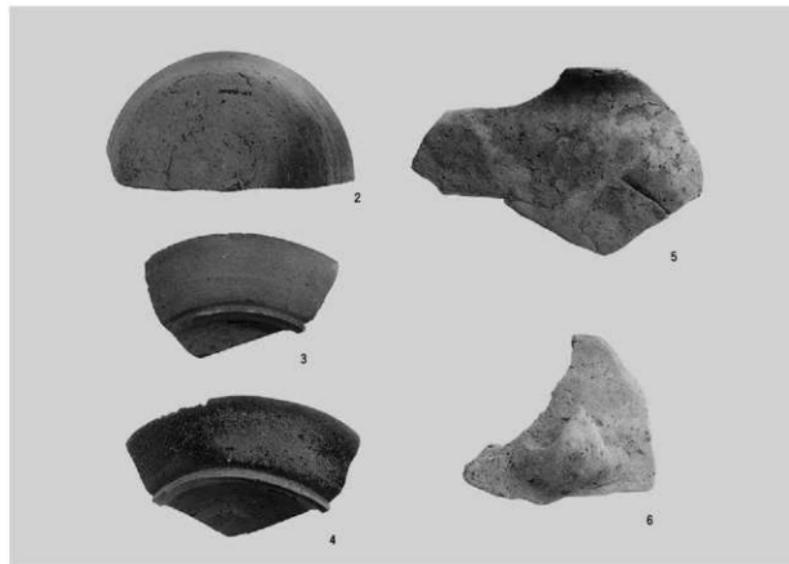


28

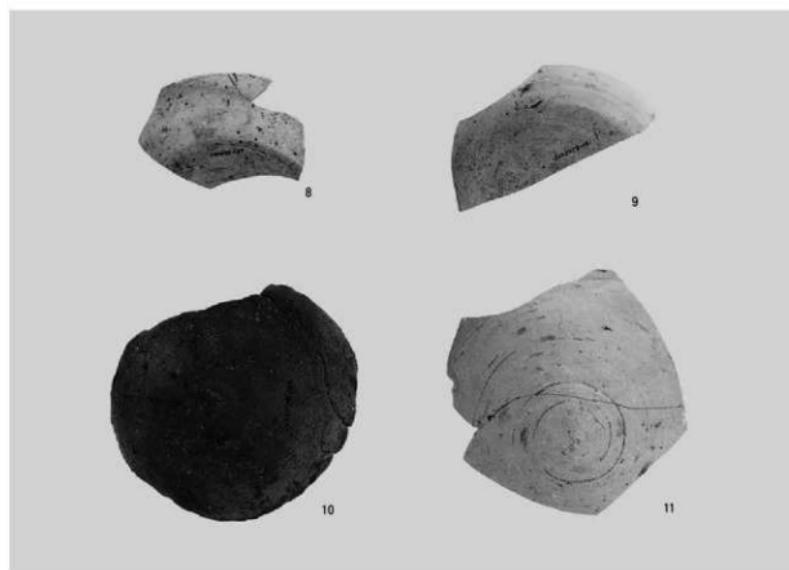


7

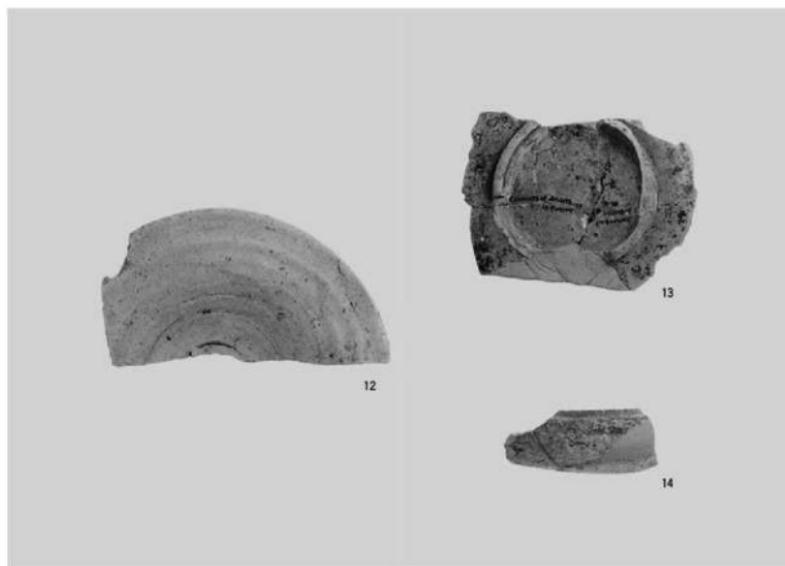
出土土器(2)



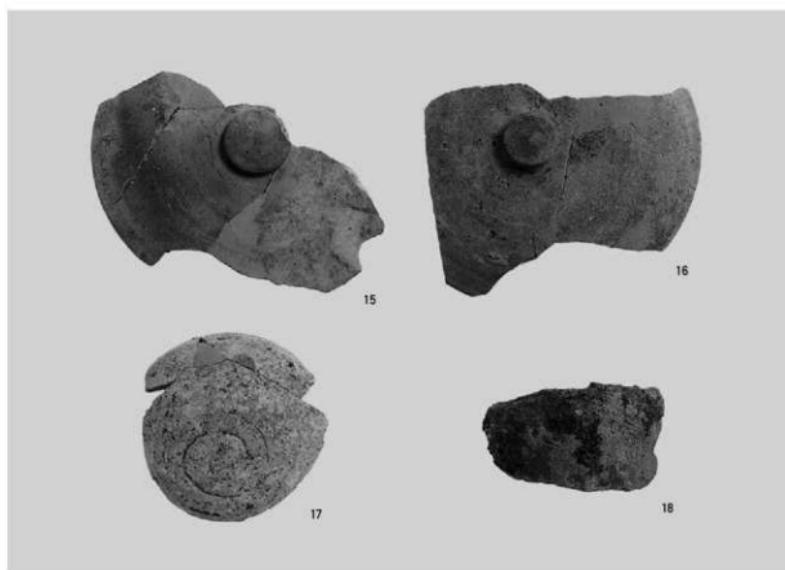
寺域内柱穴出土土器



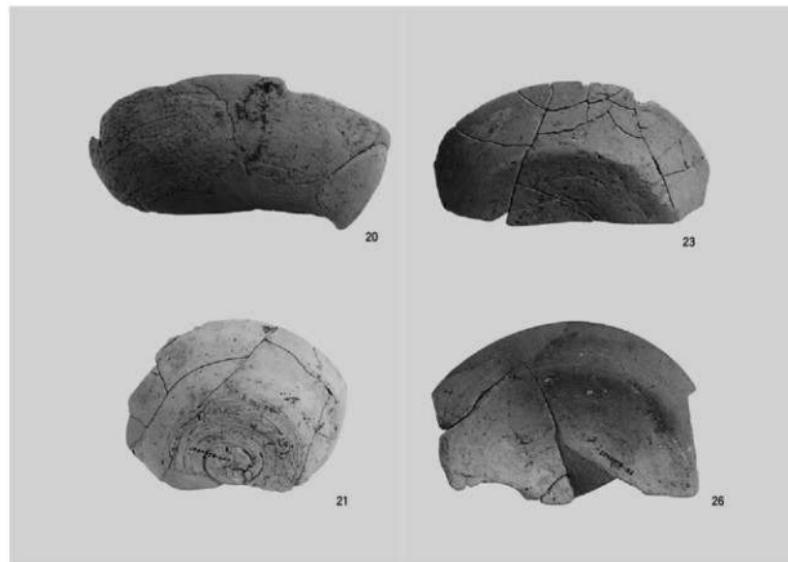
寺域内土坑出土土器



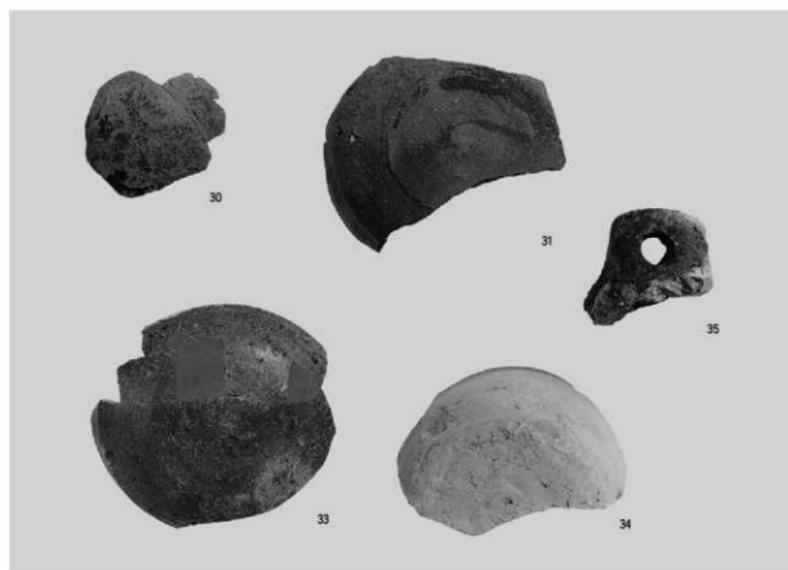
寺域内包含層出土土器(1)



寺域内包含層出土土器(2)



寺城東側出土土器(1)



寺城東側出土土器(2)

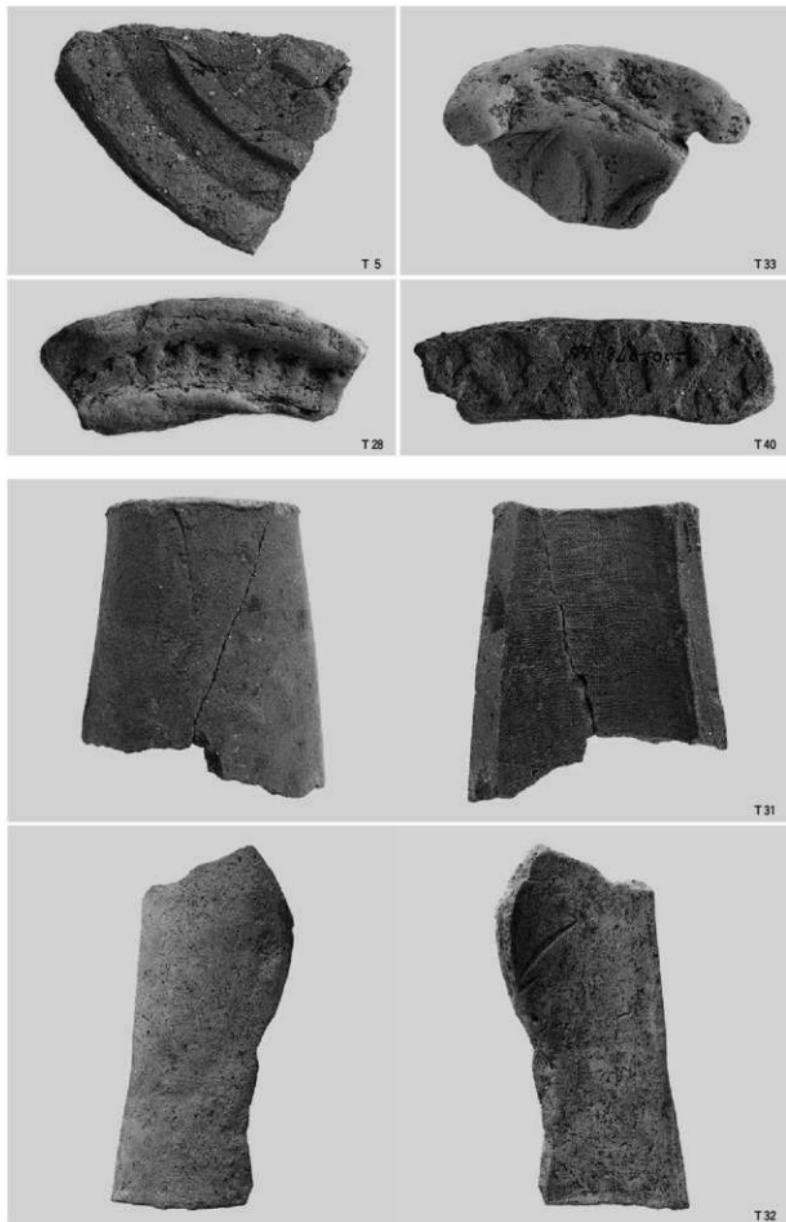


T20



T36

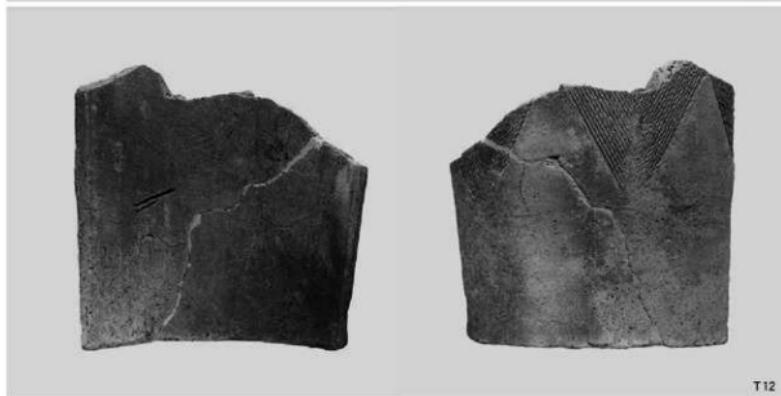
寺域内出土軒丸瓦



寺城内出土軒丸瓦・丸瓦



T11

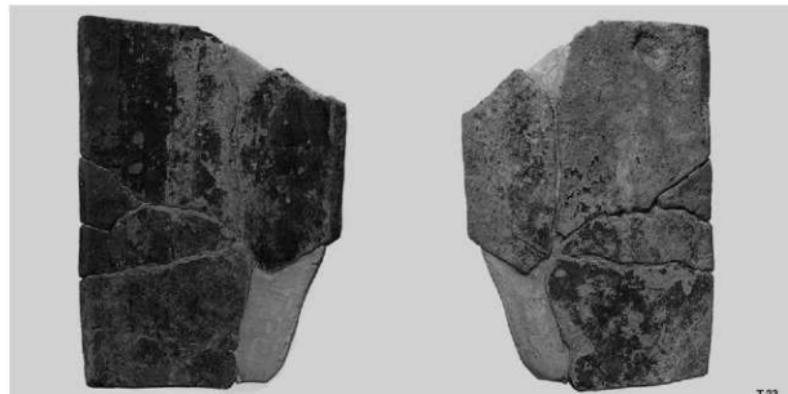


T12



T13

寺域内出土平瓦(1)



T 23



T 24



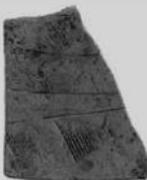
T 7



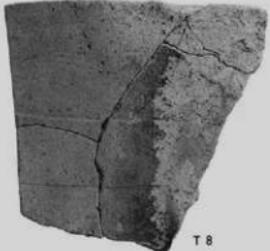
T 1



T 2



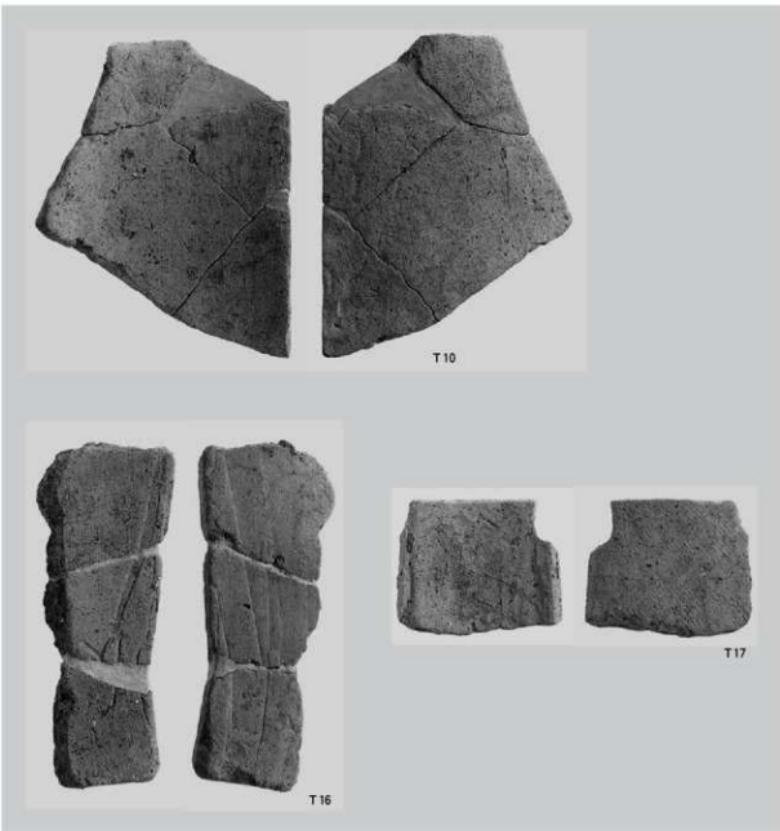
T 6



T 8



T 9



寺城内 SK02出土瓦



T18



T19



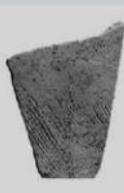
T21



T22



T25



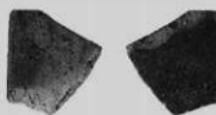
T29



T30



T 34



T 35



T 37



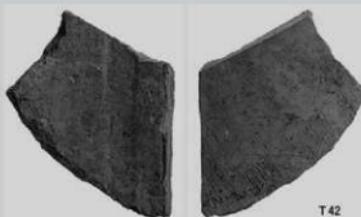
T 38



T 39



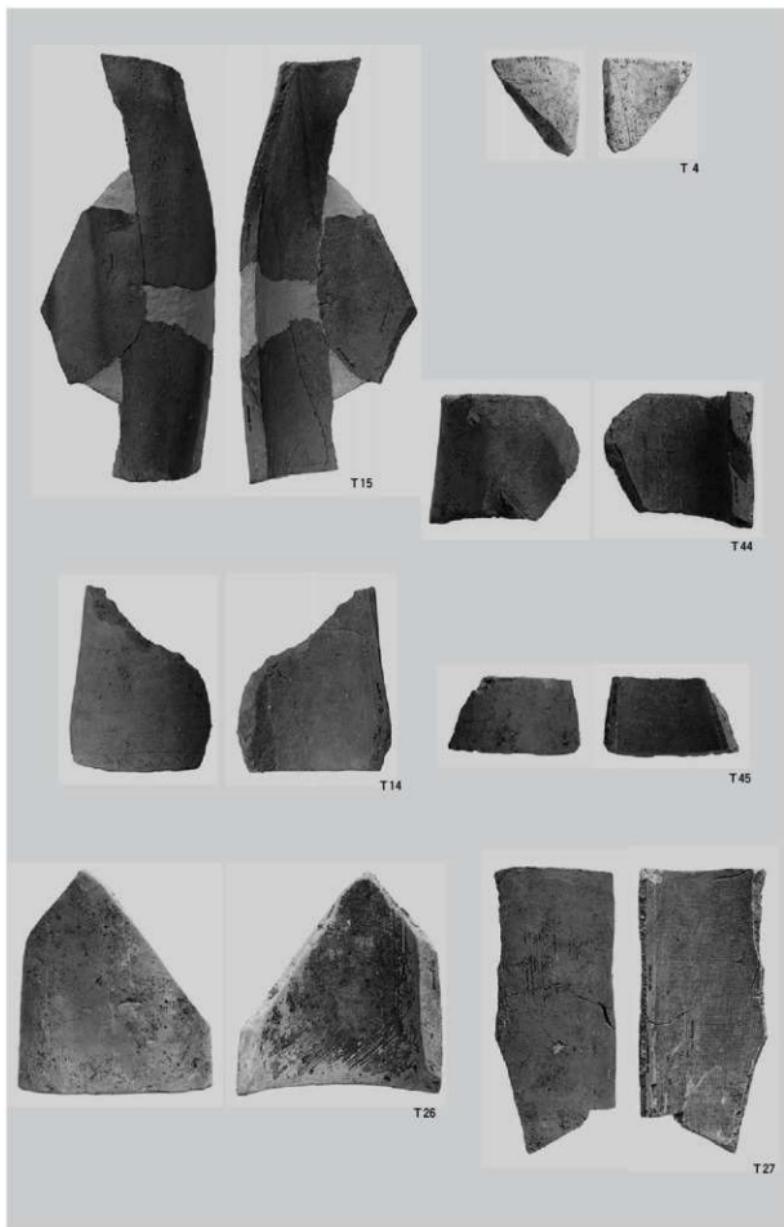
T 41



T 42



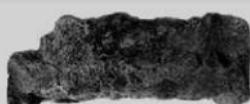
T 43



寺域内出土瓦



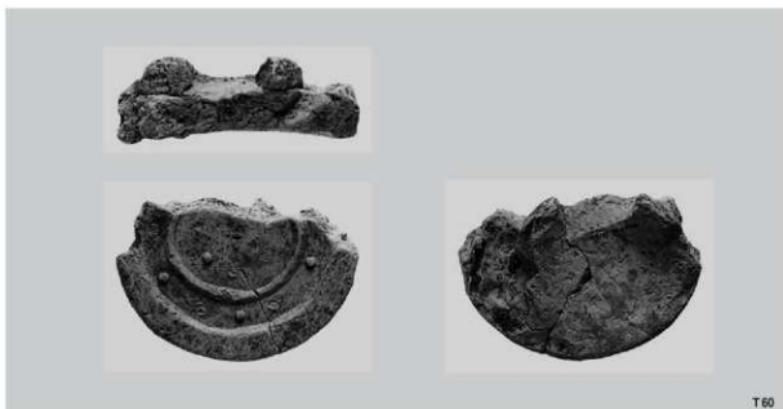
T50



T51



T52

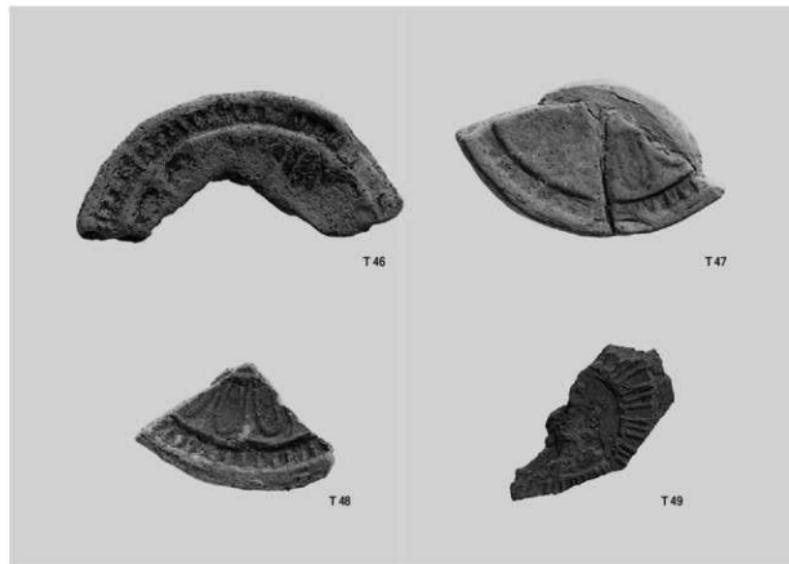


T 60

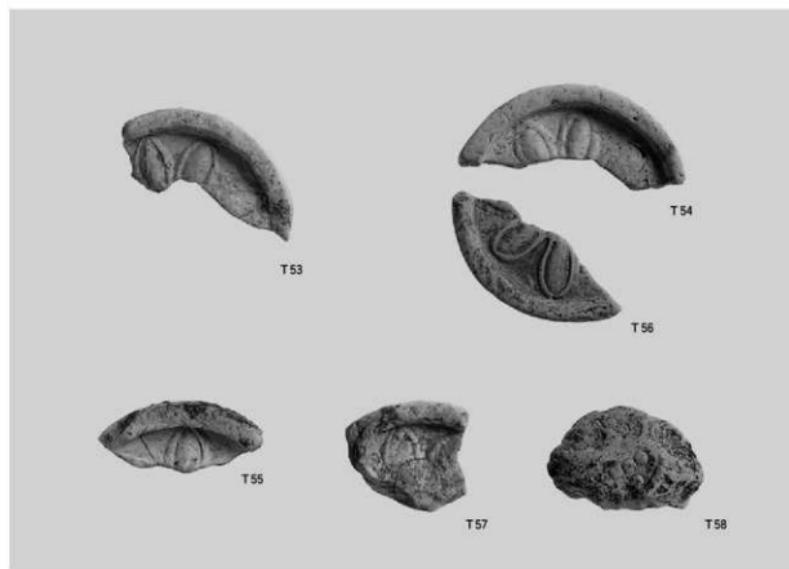


T 61

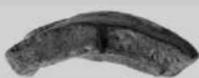
SX01出土軒丸瓦(2)



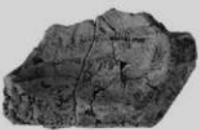
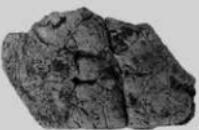
SX01出土軒丸瓦(3)



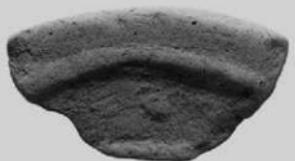
SX01出土軒丸瓦(4)



T63



T64



T59



T65



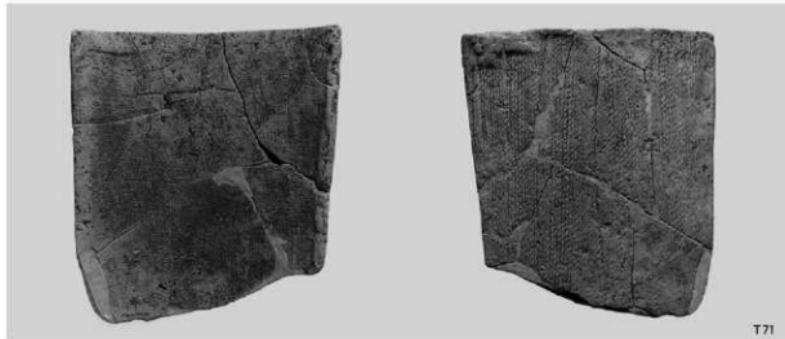
T52



T66



T69



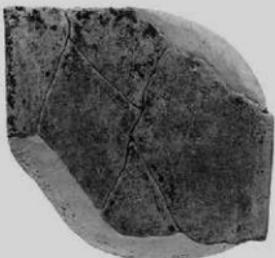
T71



T73



T74



T75

SX01出土平瓦(2)



T77



T78



T81



T82



T92



T94

SX01出土平瓦(4)



T 99



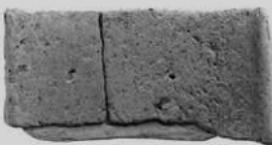
T 108



T 109



T 110



T 115



T 107



T 85



T 105



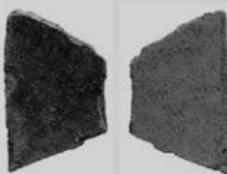
T 118



T 106



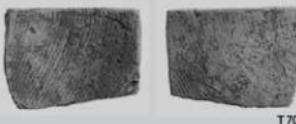
T68



T67



T72



T70



T79



T76



T80

SX01西溝出土瓦



T83



T84



T86



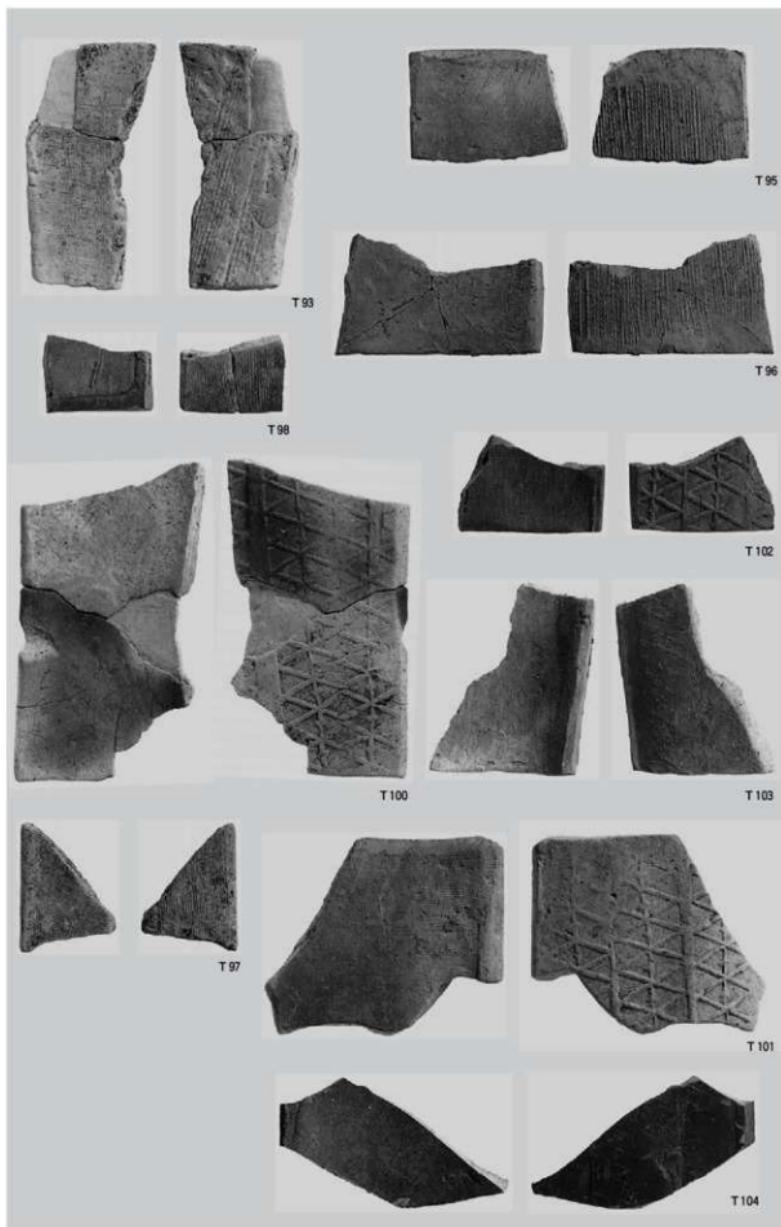
T89



T90



T91



SX01出溝出土瓦



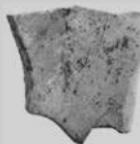
T111



T113



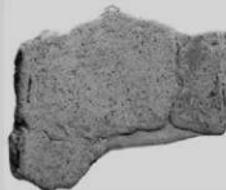
T112



T114

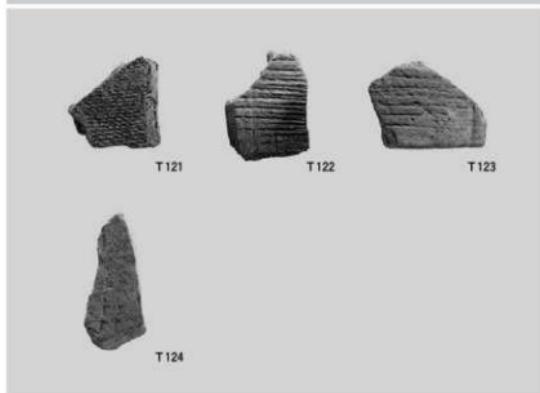
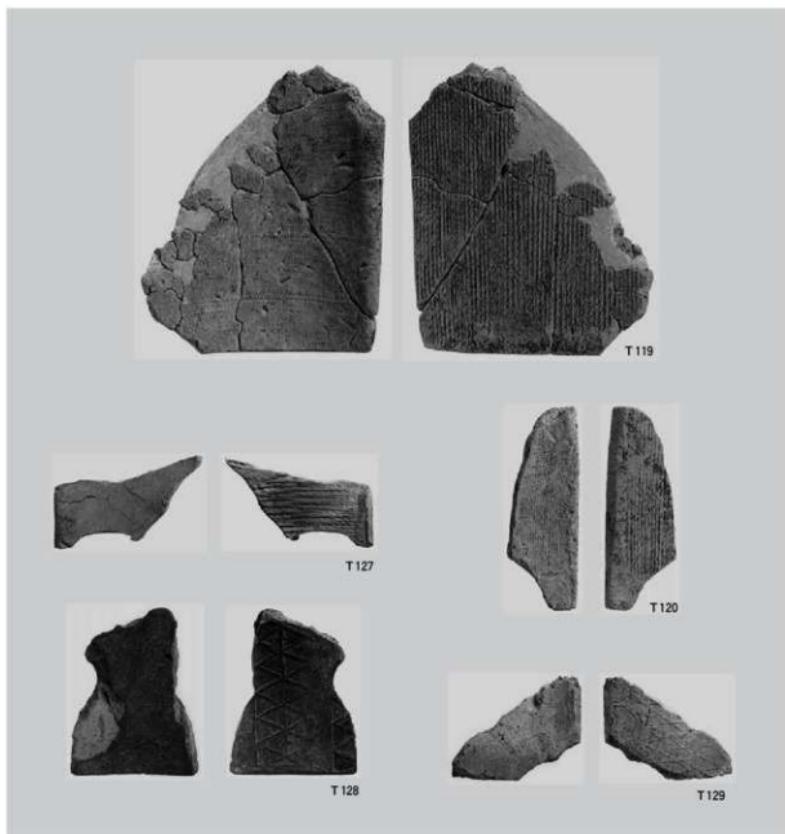


T116

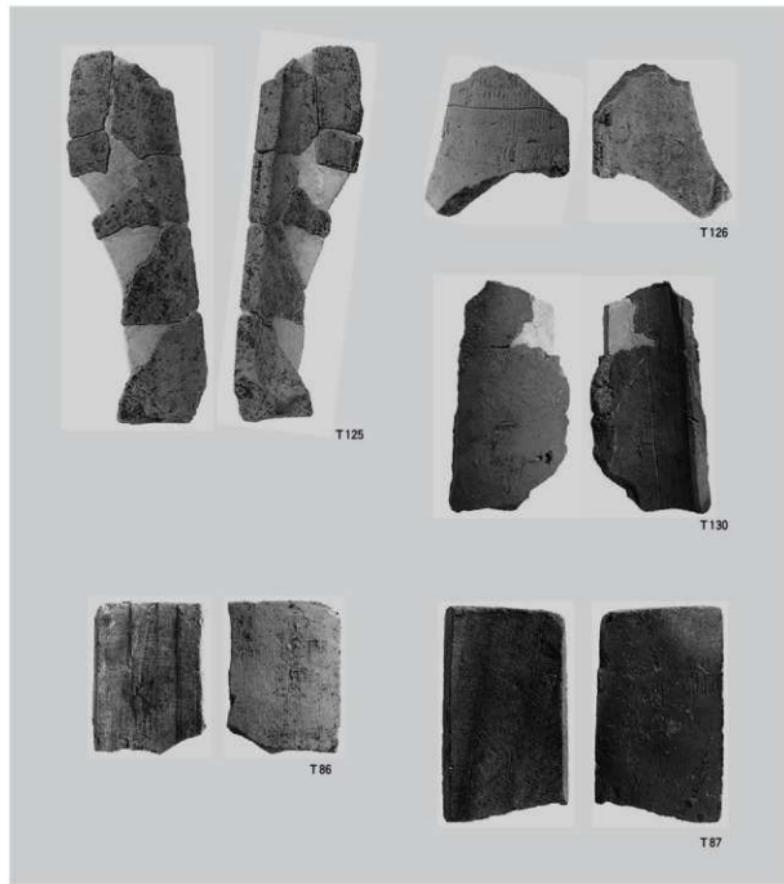


T117

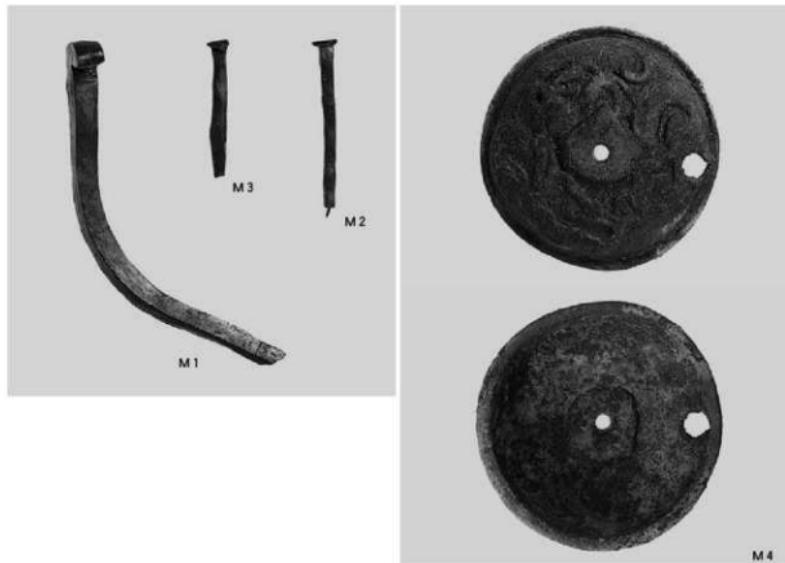
SX01東溝出土瓦



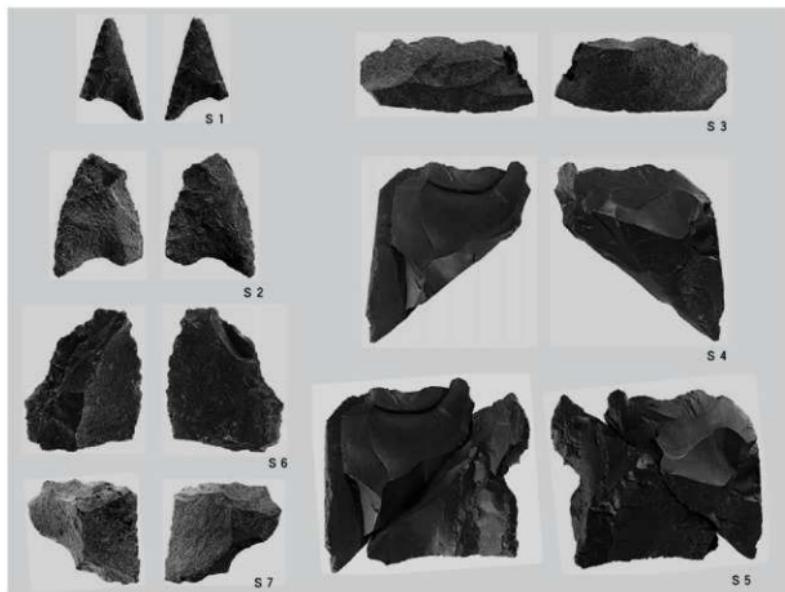
SX01南溝・検出時出土瓦



SX01南溝・西溝、検出時出土瓦



出土金属製品



出土石製品



## 報告書抄録

ふりがな	いしもりはいじ							
書名	石守庵寺							
副書名	(一) 大久保平莊線交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第331冊							
編著者名	長濱誠司・森永達男							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500							
発行年月日	西暦2008(平成20)年3月							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
いしもりはいじ 石守庵寺	兵庫県 加古川市 神野町 石守 字丸山	28210   930163	2001210 (確認調査)  (本発掘調査)	34度 46分 36秒	134度 46分 36秒	2001.12.13 2002.09.09 ~11.28	22m <sup>2</sup>  2,668m <sup>2</sup>	(一) 大久保平莊線交通安全施設等整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
石守庵寺	宗教施設 集落	奈良時代 古墳時代 弥生時代以前	掘立柱建物・土坑 豎穴住居・掘立柱 建物・集石遺構	瓦・須恵器・土師器 須恵器・土師器 石器	寺域周辺部を調査			

兵庫県文化財調査報告 第331冊

## 石 守 廃 寺

(一)大久保平莊線交通安全施設等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年3月31日発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

TEL 078-341-7711

印刷 株式会社 岸本印刷所

〒676-0805 兵庫県高砂市米田町米田400-1

TEL 079-432-0123